



2



* 0 0 1 9 6 5 0 0 0 0 *

0019650-000

565-139

経済主義論

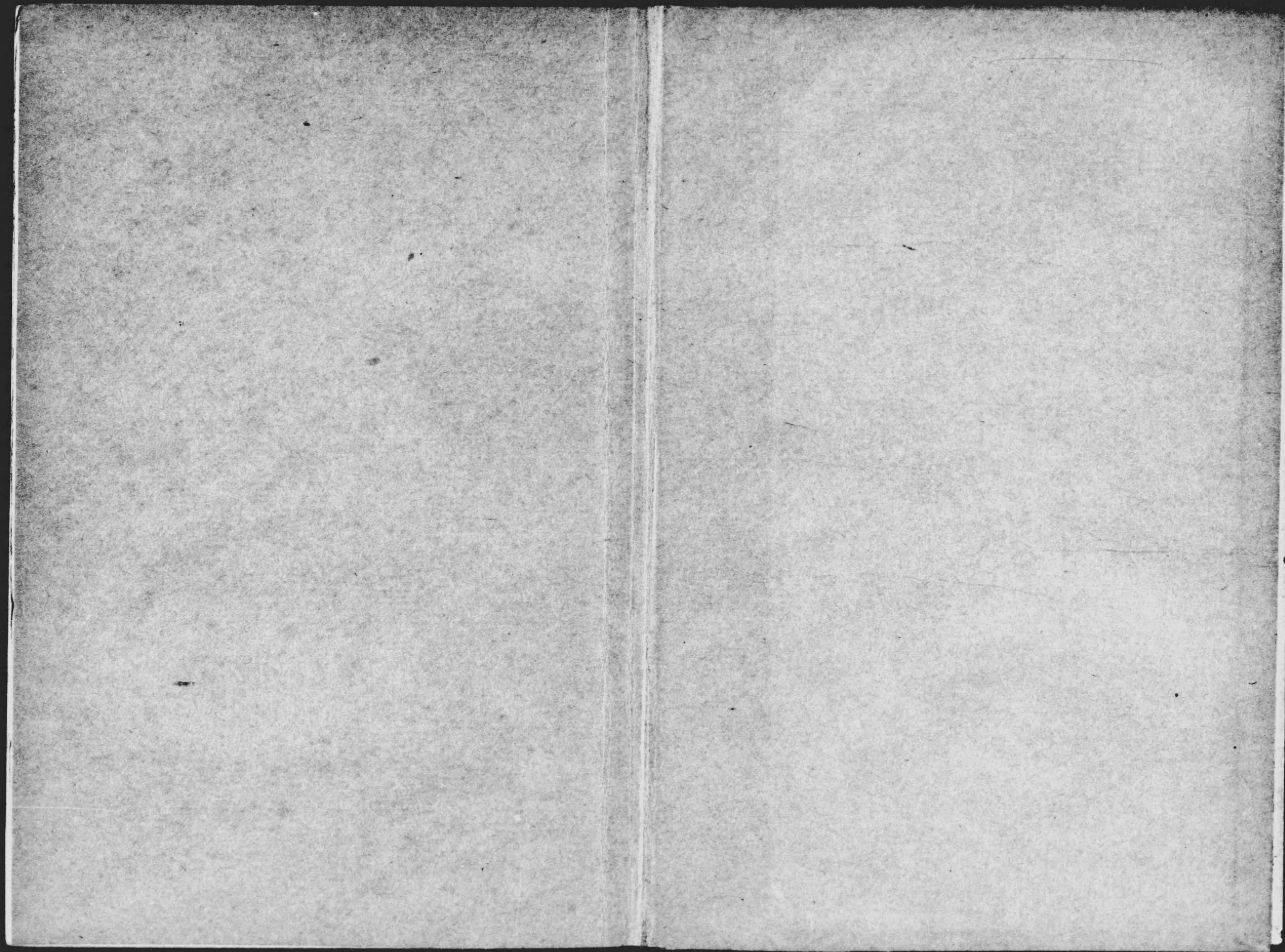
福島藤太郎・著

交通文化会

昭和2

ADB

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法
第67条の規定に基づき、平成12年3月2日
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもの







商學士 福島藤太郎著

濟主義論



東京 交通文化會發行

序

盲、蛇に怖ぢずといふ諺がありますが、淺學不肖自ら慮らず、敢て私論を茲に公にせむとする大膽に對して先づ其の罪を謝します。

殊に經濟に關するものは古今東西に亘りて幾多の碩學大儒著はれ、研鑽既に深遠該博を極めて餘蘊なく、今更に我々風情が之に臨まむとするは身の程知らぬと申すさへ烏許がましい次第であります。退いて從來教はり來つた各種の經濟原論なるものに就き大觀致しますれば、未だ經濟それ自體の本質の何たるやに付き定説あるを見ないのであります。不肖私は從來説かるゝ經濟主義と稱するものこそ經濟の眞髓であるまいかと考へまして、學問上に用ゐらるゝ經濟の語と、普通我々が節約と同意に解する經濟の語との連繫を求め、爾來臆想多年、おぼろげ乍ら其の概念を綴つたもの即ち本書であります。

惟ふに經濟主義とは人が此の主義に従つて總てを律し、此の主義に則つて行動せむとするの動的觀念でありまして、所謂經濟現象なるものは悉く此の主義より演繹せられ又盡く此の主義に歸納するものに外なく、此の主義を研究することが、經濟原論並

に其他凡ゆる應用經濟學の根本的基礎でなければなりません。加之宇宙の森羅萬象は總て運動の表現でありまして、悠久たる大自然の中心に萬古誠を照す太陽ですらも、其の時の流れは光陰となりて推移して已むことなく、幾多の科學は實に此の運動の原理を對象として其の分科を生じつゝあるのであります。而て物の動く處必ず力あり、力に於て方向、目的を有し、其道に従つて法を成す、所謂事物の靜態と稱するものも物體に加はる力が釣合を保ち、運動の速度の零なる場合を指すものに外ならざること、は物理學に於ても説かるゝ通りであります。故に經濟現象なるものも經濟の法に従つて生ずる經濟力學上の作用たるべきものなるを否定し得ず、人々が經濟主義に則りて或は進行し、或は靜止し、或は逆行して、社會の經濟現象あり、大自然の森羅萬象を此の經濟主義の法の批判の下に置いて初めて經濟上の價值を測定し得べきものでなければなりません。果して然らば所謂經濟主義は經濟學の金剛憲法たり、經濟は此の憲法に依りて構成せられ、此の法に則りて運動す、乃ち此の主義を解剖することが經濟學の基本たる所以であります。

從來の經濟原論が此の基本を没却して、如何に樓々説く所あつても、終に亡羊、今に至りて經濟の本質の那邊に在るやを捕捉し得ざる亦故なきに非ずと思考せられます

私は固より經濟主義を悉く謳歌するものではありません。複雑なる人生の社會生活が凡て此の主義を以て律せられてたまるものでなく、又律し得べきものでもありません。要は吾人の運用の如何に在り、其の善惡の批判も亦他の學問の自由に屬するや勿論であります。

天下一介無名の貧措大、その言や區々として何等の權威を有しますまい。さあれ容れられずして何ぞ已まむ、打たるゝとも出る杭となる亦人の至情であります。蹇蹇匪躬の節幸に御斟量の上鷲馬の智慧聊かなりと用ゆる所もあらば、望外の喜と致す次第であります。

本書は出版屋の急促に遭ひ、能く推敲を経るの違なく、文章拙劣、加之從來の通説と異なる所を主として説明せむと努め、一般周知の理論は極めて省略しました爲めに冗長、簡潔其の宜しきを得ず、却て無理に陥つた處尠からぬことを恐れます。庶幾くは御諒讀賜はらむことを。

大正十五年十二月

三猿窟にて

著者識す

Faint, illegible text, likely bleed-through from the reverse side of the page.

經濟主義論 目次

- 第一章 緒論.....一
- 第二章 經濟基礎論.....九
 - 第一節 法の觀念.....九
 - 第一項 自然の法.....一四
 - 第二項 社會の法.....一五
 - 第三項 自己の法.....三一
 - 第二節 人生と經濟.....三九
 - 第三節 法と經濟.....四九
- 第三章 經濟學論.....六三
 - 第一節 經濟學の意義.....六三
 - 第二節 經濟學の沿革.....六九

第四章 經濟主體論.....八五

第一節 總 說.....八五

第二節 經濟主體の分類.....九一

第一項 公經濟、私經濟.....九一

第二項 個人經濟、團體經濟.....一〇〇

第五章 經濟客體論.....一〇三

第一節 總 說.....一〇三

第二節 經濟的慾望.....一〇四

第三節 財.....一一〇

第四節 貨 幣.....一一五

第一項 貨幣の本質.....一一五

第二項 通 貨.....一二九

第三項 貨幣經濟.....一二二

第六章 經濟價值論.....一三五

第一節 價値の意義.....一三五

第二節 使用と利用.....一三八

第三節 價値不減の原理.....一三六

第四節 價値の分類.....一四四

第五節 價値の價格.....一五八

第六節 價格と對價.....一六七

第七節 需要と供給.....一六九

第八節 市 場.....一七五

第九節 商.....一七九

第十節 高價安價.....一九五

第七章 經濟組織論.....一九九

第一節 經濟單位.....一九九

第二節 私有財產制度.....三三九

第三節 經濟社會……………三二九

第四節 共業……………三三八

第五節 分業……………三四一

 第一項 總說……………三四一

 第二項 職務……………三四九

 第三項 職業……………三五三

第八章 經濟活動論……………三五九

 第一節 總說……………三五九

 第二節 經濟活動の法則……………二六二

 第三節 經濟活動の要素……………二八三

 第四節 營利行爲……………二八五

 第一項 總說……………二八五

 第二項 生産經濟……………二九六

 第三項 流通經濟……………三二〇

第四項 不生産的經濟……………三三五

第五節 資本……………三三五

 第一項 資本の意義……………三三五

 第二項 資本の分類……………三三五

 第三項 資本の還元……………三三五

 第四項 資本經濟……………三五三

第六節 企業……………三五九

 第一項 企業の本質……………三五九

 第二項 企業經濟……………三六三

 第三項 企業の種類……………三七二

 第四項 企業社會……………三七六

第七節 代金……………三八二

第八節 貨幣……………三八七

 第一項 地代……………四〇〇

- 第二項 勞 銀……………四〇六
- 第三項 利 子……………四一四
- 第一 利子の意義……………四二四
- 第二 通貨の速度……………四三〇
- 第三 金融と信用……………四三八
- 第九章 經濟行爲論……………四三四
- 第一節 經濟行爲の意義……………四三四
- 第二節 資産及負債……………四三六
- 第三節 商 行 爲……………四三九
- 第一項 商の社會的意義……………四三九
- 第二項 商業と經濟……………四四五
- 第三項 商 取 引……………四五五
- 第四項 賣買契約……………四六〇
- 第五項 手 附 金……………四六一

- 第四節 利 潤……………四六九
- 第十章 消費經濟論……………四八一
- 第一節 經濟生活……………四八一
- 第二節 所 得……………四八一
- 第一項 總 說……………四八〇
- 第二項 生 活 用……………四九二
- 第三項 交際用並租稅……………四九六
- 第四項 資 本 用……………五〇〇
- 第十一章 結 論……………五一

經濟主義論目次終

經濟主義論

福島藤太郎著

第一章 緒論



現代に所謂經濟學なるものは其の祖を彼のアダムスミスに發すと稱せられて居るとは今更申す迄もない、然しスミスの國富論は本來重商主義に反對して説かれたる一の國家の經濟政策にして國家の干渉を排して個人の自由主義を唱へ生産を以て國富の本とし分業より働き出されたるが如き國家學政治學の一方面として頗る相應しきものあるも教育即ち經濟なりとは考へられず、惟ふにスミスの國富論は國家の政治的方面より人間の經濟生活を考察し以て個人の自由放任主義を鼓吹せられたるに外ならずして今日に於ける所謂純正經濟學の基を發したるには相違なからむも之を以て直に經濟の本理であるといふは蓋し其の當を得ざるものであらうと思ふ、然るに後世經濟學を

講ずる學者は富國論の内容こそ經濟學の對象でありとなし漫然として生産を説き分業を論じ勞動を述べ價値を考ふ、誠に洋學の翻譯家乃至紹介者として吾人其の恩澤に浴する頗る多大なるものあるも此等が經濟上に於て如何なる作用ありや、何が故に經濟學に於て生産とか勞動とかを研究せざるべからざるものなるやを説明せず其の間の連絡や支離滅裂にして經濟自體の本體が果して如何なるものであるかといふことが未だに解決せられて居らぬのである。現に今日經濟なるものの定義は學者の數丈けありと稱せられ紛々として吾人初學の輩をして其の趨く所に迷はしむ、是れ學者自體が經濟其のものの本義を知らざるに由るものにして經濟學とは英國の正統學派とか獨逸の歴史學派とか其他奧太利やら米國やらの先進國の學者が名づけて經濟と稱するものを説くことを謂ふものであるかの如し、從來の經濟原論を見るに經濟なる語の根本的意義が百種百態であり乍ら其の内容に至りては殆ど皆其の軌を一にして居る、誠に不思議なる學問である、スミスが今日は所謂經濟原論を創作せられたるものに非ざることは先づ經濟とは何ぞやといふことが説明せられざるに徴しても明白である、經濟なる觀念はスミスに不拘既に昔より存在する一の觀念にして富國論や其他後世の學者の所説のみに依りて經濟の眞義を極むべきものに非ず、我國の經濟學者が徒に西洋の經濟學

のみを請け入れて以て之を經濟學とし、其の内容を翻譯し取捨し折衷して以て經濟の眞義を得たりとなし、甚しきは油水相融和せざるものを強て混合せしめて而て後其の請け賣り小賣の看板や商標として經濟なるものの定義を各自が勝手に其中より見出し牽強附會して以て經濟原論であると説くが如きは頗る迷惑至極な事である。

惟ふに現代に於ける我國の經濟學就中經濟原論が單に英國の正統學派の所説のみを翻譯するに止まつて居た間は我國の經濟學界に多くの波瀾なく坦々として平穩に發展したのであるが、他方獨逸學派を紹介する者現はれ又奧國學派に眞理を認むる者を生ずるに至り、更にマルクスの社會主義學説の輸入せらるるに及びては忽ち混沌として甲論乙駁、論者自身が朝變暮改同一學者教授の定説が年々新にして我々人類に最も密接にして又誰人にも最も了解されて居るらしき實際的通俗的なる經濟なるものが學問的には事實了解せられて居らぬといふ有様である、學者の立論は固より夫々自由にして之を拘束すべき理由もなきも實際上最も通俗に使用せられ最も解つてゐさうな實社會の經濟の意義が學問上に於ては未だ統一せる結論を見出し得ないといふことは經濟學に於て殊に然り、爲めに經濟の意義は茫漠として甚しきは人間に關するもの一として經濟ならざるなしと説く人あに至つた、その荒唐無稽なるや明白にして人生學、

社會學等は人間に關することを研究するのであろう、然し經濟學を人間に關する現象を研究する學問とせば他の學問と殆ど其の限界を定めることが出來なくなるであらう。凡そ定義は頗る困難なる事であるといふは人の普く謂ふ所にして敢て定義を特に作る必要なく所謂概念を會得するを以て十分であるとも爲されざるに非るも其の根本が第一に説明せられてなければ經濟が系統的に説明出來ない。

或は經濟と理財とを同一に解し能く收支を適合せしむることが經濟であると説く人あるも理財即經濟に非ず、財を適當に運用し其の收支を適合せしむるには經濟の法則に合致することを要するを以て理財學と經濟學とは相合致するに至るべきも理財は財政と略ぼ同意義にして既存の財を如何に處分すべきやといふ其の支出の方面に主たる意義を有し収入を計ることは理財の本質でない、國家の財政に於ても其の主たる眼目は租税其他の形式に於て國庫に納入せらるる収入を如何に支出すべきやといふことに在りて存し豫算の協議の如きも主として支出に其の主たる生命を有して居る、而て其の支出は無用の濫費を省き最も經濟的に利用することに在るを以て經濟の法則は理財財政に於ても研究せらるべきものなれども經濟と理財とは明白に區別せらるべきものである、殊に國家經濟とは國家の財政を指すとす者多きも此等は經濟と財政とを

同一視せる謬見にして取るべきでない。

或は經濟は人間が生活を維持せむとして外界の物質を獲得し以て自己の生活を營むことを謂ふとす。

此の生活といふことが今日經濟の要素として生活に關すること悉く經濟學の對象として普く研究せられ、凡ての事物と人の生活とを結び付けて考ふるときに之を經濟的觀察などと呼んで居る。然れども生活が即ち經濟に非るは勿論、生活せむ爲めには經濟せねばならぬから茲に經濟が必要となつて來るのであるが、此の手段として外界の財物を獲得する現象を以て經濟行爲、經濟現象、經濟生活等となすことは大なる誤謬なしとするも直に之を以て經濟の全意義を説明するものなるや否やを疑はずには居られぬ、即ち生活を離れて經濟なきや、經濟と生活を結合する時は之を或は經濟生活と呼ぶを得べきも生活を以て經濟の意義を説明するに缺くべからざる要件であることとは考物である。

凡て生活とは人が其の生命を維持することにして所謂自然界に生存せむとする努力である。學者或は生存と生活を區別し、單に生命を辛うじて維持するのみが生存である、而て更に幾分の餘裕ありて享樂をも行ひ得る時、生活と名づくべしといふ人あ

れども、生存とは人間が自然界に其生を維持して存在する事實にして人は生活することによりて生存しつゝあるものである。生活といふときは人が或る意思目的を以て生存せむとする努力の意義を有する、故に生活とは人が努力して生存するを謂ふとなすことが出来る。努力して生存すとは人が或る目的の爲めに目的的生を行ふとの謂である。其の目的は人によりて千差萬別であるが其の窮極なるものは生きて居るから生きるといふものである、即ち生存して居るから生活するといふものにして右は生存を目的とする生活である、此等は動物的生活にして經濟はない。或は生きむが爲めに食ふ者と食はむが爲めに生きるといふ者がある。後者は食ふことに自己の樂を求め其の目的の爲めに生活するのである、然るに前者は生活の爲めに食ふものにして、其生活には又他の目的がある、然し生活には生存といふことが必要であり、其の生存には食はねばならぬから已むを得ず食ふといふものである。

而て經濟とは生活を維持する爲めに外界の財物を獲得するのであるとせば空氣を呼吸し水を飲み仙人が雲や霞を食ふのも經濟行爲となされるかもしれぬ、仙人は別に經濟生活をなすとも覺えぬ、經濟を以て直に生活とか外界の有形物とかを意味するものとなすことは首肯し得ざるものにして、生活には勿論經濟を必要なる事實とするも生

活は生活にして經濟は經濟、兩者夫々獨立の意義を有し、生活と物質とを結び付けて以て直に經濟云々となす觀念は改められねばならぬと考ふのである。

所謂經濟なる語は英語の *Economy* を翻譯したるものと普通稱せらるゝも其の譯語として經濟なる語を使用するに至りし其の語源に就きては經國濟民の語に出でたるものとなされて居る。

經國濟民とは國を經り(To value)民を濟ふ(To save)との意にして天下國家を平和に統治し國民の幸福を圖るといふことである、經國濟民は國民を濟度するといふことなるを以て善政を行ふといふことでなければならぬ、其政善ならざれば經國濟民とは申されず、却て民を苦しむるものである、其の如何なるものが善政なりやは即ち政治學の研究事項である、從來經濟學が政治學若くは國法學中の一分科とせられつゝあつたのも全く此理由かと思ふ、而て古來の政治の善惡を觀察するに能く人民の自由を尊重し、解放し、國民の幸福の爲めに必要なる手段方法を講ずることに在つたやうである、國家としては適當なる法律制度を設けて之を行ふことである。個人としては例之親が子の爲めに働きて金を儲け以て子の自由の幸福を得せしむることである。金は社會に於て幸福を得る方法手段である。此の金を儲けることに個人の經濟がある。

而て宇宙の森羅萬象は法に依りて成立し法に依りて動く、而て人生の不幸、苦痛、慾望を感じるは法に違反しつゝある場合である、幸福愉快を感じるは法に的確なるに依る、故に人生の救済は此の的確なる法を運用して、之に則らしむるに在るものにして人生が或る目的の爲に適當なる方法手段を求めることが即ち經濟的慾望となるものである。換言すれば人生の苦痛は人生と他の自然や社會の法と矛盾しつゝある状態に於て情に感ずる所のものである。此の矛盾は衆愚が法の無知なるに依り法の運用其の宜しきを得ざるに基くものにして賢明なる聖人上に在りて衆愚の爲めに適當なる法を講し之に則らしむ、是れ衆生濟度の道である。故に經濟は聖人の道にして能く法を理解し、法をして最も善く人生に的確ならしむる如く、宵衣旰食して休む暇なく、天下の憂に先して憂ひ天下の樂に後れて樂しむ、是れ衆生を濟度して以て自己の幸福と自覺する聖人の人生觀たり一言以て之と掩はむか、最少の勞費を以て最大の効果を收むることにして、是れ法を人生に對して最も的確に運用するものなればである。故に經濟の本望を論ずるに當りて先づ法の何たるやを知ることとする。

第二章 經濟基礎論

第一節 法の觀念

法の觀念に就きては法律學者が専ら深く研究する所にして法律學者に非る者が之に容喙するは頗る僭越なるの誹を免れざるも現代の法律學者の法に對する觀念頗る紛々として一定せるものを見ざるのみならず、法は獨り法律學者のみの専らにすべきにあらず、法律學者は法の中の法律を論ずるものにして法は決して法律のみに限らず、物理の法、化學の法、心理の法、宗教上の法等皆法にして經濟學に於ても經濟の法の存在なきにしもあらず、尤も獨逸歴史學派に於ては經濟に一定の法あることを否定して居るが其の法の有無といふことは法律の有無にあらずして法律を離れたる法である、而て經濟學に一定の法ありや否やといふことを知る上に於ても、先づ法の何たるやを一通り會得し置くことが肝要であらうかと思ふ。

法律學者の見解に依れば法は社會の秩序にして其中道德は守ることを強制せられざる秩序なるに法は必ず守らざるへからざる強制力を要する秩序であるとなす如し。右は法の中の法律の解釋とすれば、法律に就きては吾人は法律専門學者の此の見解を

無時件に受け容れねばなるまい、唯た法律以外の法は如何、以下若し自分の考が能く此の法律の意義にも適用して悖らざるものがあつたならば自分の説明は少なくとも法律學者より非難せらるゝことはなからうと思ふ。

自己流の考を以てすれば法は之をノリと訓す。則、憲等亦ノリである、又孔子は七十にして矩を踰えずと云ひ矩も亦ノリと訓せられて居る、又法は法則、法規といひて規亦法と同様の意義をも有する。而て規と矩とは規矩と稱し規はブンマハシ矩はジャウギであり或る形を作る爲めに缺くへからざる道具とせられて居る。即ち之に則りて或る目的とする物を形成するのである。而て又或る形を作り出す際に於ては或は内法(ウチノリ)外法(ソトノリ)或は寸法などと呼ぶ所を見れば法(ノリ)とは或る目的物を形成する爲めに必ず従はざるべからざる條件又は方式にして、此の條件又は方式を守らなければ其の物は目的とする形を成さうといはず、又其の物が目的の形を維持せむとせば他は如何やうになつても少くなくとも之に必要な或る條件又は方式は目的に叶つてなければならぬ。一尺四方の箱は一分一厘でも長くなつたり短くなれば最早一尺四方の箱ではない又其の寸法の保たれある限りは必ず目的の一尺四方の箱である。此の或る目的物を構成する形式にして目的の爲めに必ず則らざるべからず又之に則るときは

必ず目的を達し得る要件が法であると思ふ。

是の故に法は

一、目的を有す、法は其れ自體存在するものにあらず、必ず目的あつて之と相對的に存在するものである。彼の道の如きも銀座通りとか人道とか車道とか鐵道軌道とか稱して居る、人の往くべき道が人道にして車の往くべき道が車道である法も亦同じ。法は漠然之を法であるといつても分らない、必ずや何の法であるかといふことを知らねばならぬ、是れ即ち法は或る目的物と相對的に存在するものにして目的なければ法なるものは存在せぬのである。

此の目的を法の精神と名づけ、法の形式に對して實質又は單に實と名づくることがある、實は誠にして人に就ては意思の方向たる所謂目的にして情に反應して快感を味ふことである、而て社會の法は蓋し社會全般の幸福といふことが社會の法の精神にして、又之を自然に就ていはゞ自然の物質的現象たる事實、實在が自然の法の精神であり自然の目的であると認定せざるを得ない。

二、法は形式である、即ち實質が法にあらず、實質に對する形式が法の本體にして法は約子定規である、目的物は此の形式に従て構成されあるものにして亦は方圓の器に従

ふ、方圓が法にして器が方圓ならざれば方圓の水といふ目的が得られないのである。

三、法は目的に對する手段である、手段は又方法ともいふ、或る目的を達するが爲めに取るべき道となり、術となるものである、故に適當方法手段を盡さざれば、如何に努力するも目的に中ることなし、然し目的に的確なる手段を盡すときは、必ずや目的に達する。此の適當なる手段を法に従ふと稱する。

此の目的と手段との觀念に於て、結果に於て同一なれども意思の存在に於て相異なるを見るのである。

四、法は力(force)を有す、力とは物理學に於ては物體を運動せしめ、運動せる物體の運動の方向或は速さを變ずるものにして一定の方向を有する一のベクトル(vector)である、法は力にはあらざれども或る目的に對しては必ず其の法に則らざるべからざるものにして此の法に則らざる時は即ち其の目的を達し得ざるものなるが故に吾人は此の法によりて束縛せられ、此の法の爲めに壓迫を受けねばならぬのである、此の束縛を稱して法の義務といふ、然れども其の半面に於て法に従ふ時は必ず其の法の目的に達し得る力を與へらる、ものにして之を權利と呼ぶ。

五、法は道である、然れども道必ずしも法に非ず、是れ通常法律と道德と區別せらる

る所である法は目的に達する形式要件にして是れ其の道たるや明なれども、道は單なる存在にして道を歩むが故に、必ず目的に達すと限らず、東海道を歩むが故に必ず東京から大阪に達すといはれず、一步を進んでも東海道を歩むのである、加之大阪と東京との間には陸路あり、海路あり、水路あり、空路あり、故に東京から大阪に行くには東海道が法であるとはいはれない、其の道に依らずして他の道を行くも同一の目的に達するからである、故に或る道に則らずとも同一の結果を得、以て目的の構成に何等の差支なきときは最早法たる資格を失ふものである。

六、法は則るべきものにして究むべきものにあらず、即ち法に理屈はないのである、苟も法であると認定せられたる限りは必ずや目的に對していふものにして吾人は唯だ其の法に従ふことを以て足り、何が故に法なりや等を論ずる限りでない而て其の法に能く的確なる時は吾人は不知不識の中にも吾人の目的を實現しつ、あるものである。

而て其法を犯すも従ふも何等目的上害なく又効果もなき時はそれは最早法に非るものにして苟も法たる限りは唯だ此の法に的確なるべき努力することを要し、又之を以て十分とするのである。

要之法は經濟の本質上缺くべからざる要件にして、人の慾望、苦痛等は此の法に違

犯する所あればである、故に能く適法なる手段を供する時は慾望は満足せられ苦痛は救済せらるべきものにして此の法に對して矛盾せる状態を観察し適法なる手段を給與することは是れ經濟なりとも定義し得るものである、故に經濟は法に違反するにあらず法に違反するを得ざるが故に經濟あり、又法に従ふことが經濟にあらず、法に従ふは當然の權利義務にして敢て經濟を必要とする迄もない、經濟は人生に適當なる方法を供給して能く其の慾望を満足せしめ其の苦痛を救済することに在るのである。

從て適當なる方法手段を缺くときは經濟不可能である、是れ即ち法に違反し、從はずして何事をも爲し得ざる所以にして其の法なるものを凡そ三種に大別し得る。

第一項 自然の法

自然の法とは自然を構成する法にして、凡そ自然界に生存する者は自然の法に則らずして何事をも爲し得ず、而て自然を観察するときには四の法によりて成立しつ、あるを見るのである。

一は時間である、時は絶對の流れにして宇宙の森羅萬象は必ずや時間の經過を伴ふ、
二は空間である、空間は場所又は單に處ともいひ、之を時と共に宇宙と總稱する、
字は東西の空間を意味し、宙は古今の時間を指すのである。

三は物體である、物體は又單に物ともいひ一定の時、一定の場所に於ける存在をいふ人間も一の物體にして人間の存在を特に運命ともいふ、運命とは人間が一定の時一定の場所に於ける存在の状態を指していふものである。

四は物質である、物質は物體の運動變化を指し或は之を單に物に對して事ともいふ。之を更に分ちて物理的變化と化學的變化となす、而て物體は物の靜的觀察にして物質は物の動的觀察である。又此の物體は物質變化の速度の零なるをいふものとすれば物體も物質も同一に歸着し從て普通一般に物質として總稱せられる、而て物質の物理的作用又は化學的作用により、物質は人の利用せらるべき範圍に屬し、土地又は地の利とし之を狹義の自然ともいふ、物質の物理又は化學的變化を、傾向(inclination)又は性向(nature)といひ物理化學生理學等の研究する自然の法とせられて居る。

第二項 社會の法

社會の法とは自然界の中に存在する人間を構成する法にして人が自然の一物として生存し自然の生理の法に依りて存在する外に人は社會的動物として自ら多數の人が相集まり、相交際して茲に社會を構成し以て自己の幸福を營みつ、あるものである。

社會は宇宙の萬象中より獨立せる人間をいふものにして此の人間のみの現象を社會現

象とし、之に對して人間を取り除ける物理化學等の現象と區別する、若し人間をも加へたる時は、特に大自然ともいふのである、是れ人間も自然の一物なれども、人間は自然の中に在りて、一の自治體を組織しつつあるに依りて通常之を分ちていふものである。

社會の意義に關しても亦幾多の説明の存する所にして一々之を論述するは我が使命に非ず、惟ふに社會は孤立と反對に共立共存を營む二人以上多數の獨立自由人格者の集合物にして其の要素は人間が二人以上なること、其の人間は互に獨立自由の意思主體たる人格者なること及此等の人格者が互に共立共存を營むものなることであらう。二人以上なるが故にロビンソン・クルーソーの如き孤獨生活に社會なく、此等は單なる自然の存在あるのみである、而て獨立自由の人格者なることは互に自由平等其の間に人格上、上下の區別なく自己の意思に反して他人の如何なる干渉をも許さず、他人は他人、自分は自分といふ自我主義の觀念の謂である。

即ち社會は利己主義の人の寄合である、故に家庭親子の間は社會にあらず、親は親にて勝手にし子は子にて自由獨立といふものにあらず、子は親の附屬物にして親に對して子は人格を有しない、親の命令は其の事の如何を問はず、直に之に服従し抗抵干

犯すべきでない、加之親は子を以て自己の心とし親子の關係は表面二個以上の人格者の如く見ゆれども其の眞の精神に至りては親子合一して單一なる人格者たり、親は子の爲めに隠し、子は親の爲めに隠し、子の爲めに親の心は闇であるが如きは争ふべからざる人生の至情にして其の間に對當獨立、互に親は利己の爲めに子を養ふひ子は親を利己の手段道具とするものではないのである、血液骨肉の相通する所兩者は單一なる人格者にして家庭は利己の寄合ではないのである。

然るに社會は此等利己的人格者の共存を營む寄合集合物である、共立共存とは互に有無相通じて利益の交換を行なひ業を分ち互に相倚り相助けて自己の生活幸福を致すことを謂ふ、共存の反對は孤立にして其の生活を自給自足と名づけ、自給自足は他人の御世話にならず、自己單獨にて生活するものなれども共存生活は自分一人にて生活するにあらず、他人と共同生活を營むものにして其の目的は他人の利益の爲めにあらず、皆自己の利益の爲めなれども他人なしにては幸福を得ざるものである、即ち自己は互に他人を自己の利益の手段とし之を利用して其の共同一致に依り、初めて自己の完成を期し得るものである、此の共存生活は自己の肉體に於ても之を窺ふことを得べく骨は肉なしにては何等の用を成さず、又肉は骨がなくては立ちて往けず、茲に互に

結合し利益を交換して各々自己の完成を期し得る如きものである。

此意味に於て家庭は社會に非るも夫婦間に於て男は自己の利益の爲めに妻を娶り、女は自己の利益の爲めに男に嫁し、茲に夫婦といふ共存生活を営むならば夫婦は社會生活である、是れ夫婦間は互に婚姻契約と稱する自由獨立の意思の合致にして結婚した方が自分に利益である、幸福であると思ふが故に結婚するものにして相手方の利益の爲めに同情して結婚する譯ではない、是れ親子の關係と異なるものにして夫婦は互に他人である、然れども其の間に一體同心の誠の敬愛の情の相通する限に於ては夫婦は社會にあらず、之を愛の結婚とかいひて現代に流行するものである、然し社會としての結婚は互に自己本位にして自己の爲めに相手方を手段とし、之を利用する意味に於て結合するものである。

社會の成立に關しては社會契約説ありて最も有名であるが今日の法律學者よりは社會を作らむとして我々が契約なるものを行ひしが如きことを想像し得ずとして反對せられて居る、固より國家なるものは契約に非れども社會の成立は契約に外ならざるや疑ふの餘地なく其の契約は今日民法上に於ける如き契約に非るも吾人は自由獨立の人格者として互に相交換をなすは互に意思の合致あるが故にして茲に契約の發生あること

とは否定すべきやうもないのである。

人は社交的動物なるや否やは敢て知らず、然し人は孤立して生活するよりも社會と交際することの更に有利なるや疑なき事實にして自己の意思の承認に於て利益を相交換して互に利益こそあれ、何等の不都合のあるべからざるや當然の事理にして人は社會を形成するといふは利害の問題にあらず、當然利益なる最早超人格的なる自然の本性である。既に自然は男性と、女性との區別を設けたるは互に社會を形成して生存生活を營むべきものたることを規定せるものとも推測し得べく、吾人の肉體内に於ても各細胞が共存して、其の本性を發揮しつつあるを見れば、社會は人の本性であること見て差支ない。

由是觀之社會は純粹の自然と云ひ得ざるや勿論なれども人間より成立する準自然にして之を構成する法に二あり、一は其の要素たる獨立自由意思たる人格の尊重にして他は利益の交換即ち共存といふことである。若し社會に入るに依りて自己の獨立を失ひ自己の意思にあらざることを強制せらるゝならば護しも孤立を欲して殊更に社會を準自然的に形成するが如きことなし、又利益の交換なるが故に相互の利益といふことが其の條件にして一方のみ利益にて他面に利益なければ交換行はれず、共存の實を

擧げ得ないのである。

社會の意思の力は自然と人間との中間に位する準自然の意思の力にして其の力は自然に劣るも人間獨特の意思の力に勝り、其の意思の具體的に表現せられたるもの之を國家とする。

國家の説明は他の憲法學其他に於て至れり盡せりであるが、要するに國家は一定地域を限界とせる社會を統治權と稱する自然の物力を以て支配する單一の意思組織體にして其の物力が國家の缺くべからざる要件であり、此の物力の及ぶ範圍内の社會が國家である。

但し此の物力は社會の法を維持するの物力にして其の理想の國家は社會の法を能く會得し、其の法を守りて社會共存の目的を十分に達し得るものでなければならぬ。故に二人の間に於ても苟も國家となす限りは必ず物力の存すべきものにして孰れか一方が其の法を維持し得る物力を有すれば其の間に於て國家である。但し通常此の物力を所有せるものは動もすれば專横となり、爲めに社會の法を無視するに至る虞あるも若し其の人が堯舜の徒たる聖人ならば決して兩者の間に秩序の紊亂ある筈なし、若し秩序紊亂せばそれは最早社會ではない、戰國戰爭は其の間に於て社會を成さざるものであ

る。社會の成さざる所唯だ自然の力あるのみである、聖賢の道を王者の道となせるは物力を有せる者は動もすれば社會の法を無視して自己の專横を擅にせむとする傾向がある、之を抑壓して常に他人の利益人格を無視せず、社會の正義人道を尊重して自己は自己の自己なれども又社會の自己なることを固く守り、之に違背せざらむことを期するに在る。

今日法律上に於て土地は國家の一要素を成すものとして論せらるゝも土地は人生の要素にして人に附着し、人を支配するといふことは當然土地をも支配し得るものなることを示すものである、國家は地域團體であるといふは土地といふ物質の所有權を意味せず、一定の限界場所を示すものにして其の場所は物力の及ぶ範圍を限るのみ、而して其の物力とは能く社會の法を維持し得る實力なるが故に人間界に於て最強なることを要するものにして若し他に更に強力なる物力を有するものあらば事實統治權は其他の者に歸して居るものである、然れども最強なる物力を有するが故に其の人は必ず社會の法を無視する人と限らざること前述の如くなれば少なくとも社會の法を維持し得るだけの物力を所有せねばならぬ。

通常國家の有する最高の物力は生殺與奪の自然の力たる腕力武力にして社會の法を

破壊せむとする者をして其の意思の實現を妨得し以て社會の法に従はしむべく、其の身體を束縛するの力である。

國家は社會の必要物に非ず、唯だ社會の法を紊り社會を破壊する暴漢あるに依りて自然的に生ずるものにして若し社會が聖人君子のみならば國家は無用の長物である、軍備も裁判官も警察官も何等必要とせず。

然れども事實自ら社會の法を守るが如き者なく、自然の腕力武力に富みたる者は自己の自由を主張して社會の法を無視するに至るが故に破邪顯正生民塗炭の苦を救ふべき王者の出づるありて理想の國家の組織あるべきを人の本性とする、從て無政府は衣食足りて禮節を知る場合に於てのみ社會の秩序は維持せらる、然らざる限り弱肉強食となり、生民其の居に安んじ得ざるが故に或る一部の人が無政府主義を説く者ある如きも到底人の本性に背くものにして其の實現可能なる見込はない、震災に於て殆ど無警察の状態となれば各人が自治的に自警團を組織するが如き皆人の國家的性向の發露ならざるなし。

但た如何なる國家が理想なりや、如何にせば社會の法は完全して人々共存の實を全からしむるを得るやは固より、國法學政治學上の研究問題にして吾人之に預り知らず

國家を組織するに民主あり、君主あり、專制あり、立憲あり、孰れも社會の事情に依り、人の性向に依りて一利一害ある所である。

以上如く社會は自ら國家を生み社會の力は表現せられて國家の力となる。社會の力若くは國家の力は單一なる自己たる人間の意思の集合して化學的に發生したる準自然の意思の力にして個人の意思を超越し、吾人の意思は社會の意思に妨げられて其の自由は束縛せられるのである。

社會の意思は社會自身の意思にして自己自身の意思の集合なれども其の分子は自己が他人の意思を尊重するの意思にして、傍若無人の意思の集合ではない、自己の外に自己と同一の人格を有する他人の自由意思をも尊重し互に有無相通し利益を交換し合ふといふ意思が社會の意思である。之が爲めには吾人は常に他人の意思といふことも無視するを許さず、從つて他人の意思を無視して自由を主張することが出来ないといふ拘束を受けるのである、社會は此の他人の意思の尊重すべきこと自己自身の意思を尊重すると同一なるべきを其の社會の構成要件とするが故に此の要件こそ社會の法にして此の法の拘束力こそ社會意思の力である。

然れども社會の法は自然の法と異なり事實の不可不可能にあらず、例之人は天空を

自由に翔けることが出来ない。然し飛行機を適法に利用すれば自由に飛ぶことが出来る、此等は自然法上の可能不可能である、故に飛行機もなく又飛行機を操縦する技能がなければ到底人は空を飛行することが出来ない、然るに社會生活を營むときは自分に飛行機がなく、又技能を有せずとも他人が之を有するときは空を飛ぶことが出来るのである、即ち彼が強大なる武力を有すれば飛行機を徵發し、之が操縦を強制し若し聽かすむは殺すと脅迫せば彼は厭やでも之に服従せざるべからざるものにして是れ亦自然の物力の然らしむる所である。

雖然如斯は其の飛行機主の自由意思を無視するものにして他人の自由意思の承認を得ずして之に損害を與ふことは社會を破壊する傍若無人の行爲である、若し人總て如斯くむは、弱肉強食の自然の物力の放任にして社會共存の目的を達することが出来ないのである、故に人は他人の自由意思の承認を求め得る範圍内に於てのみ可能なるものにして自由意思の承認を得ざれば自然の物力上可能にても社會上不可能である。

此の點に於て自然法上の不可能と社會法上の不可能と相異なる、自然法上の不可能は事實の不可能にして事實可能なるものに自然の不可能の法は成立せず、然るに社會上の法は事實的可能なのである、即ち社會の法は事實の力に依りて可能なるものである。

る、自然法は物理的化學的に違背し得べからず又得べきものである、社會の法は人に對する法にして物質的自由の力に依りては自由自在に違背することが出来る、但た社會の法に違背したる場合は更に強大なる他人の物力に依りて其の無効、取消、損害要償、現状回復其他の方法を講し社會の法に従はしめ得るのである、而て結局社會の法も物力の支配に歸するも其の物力は自然の法を破壊したる者に鐵槌を加へ其の法に従はしむる力にして純粹の自然の物力の外に社會の意思の力なるものが附加せられしものである。社會の意思に基かざるものは純然たる自然力にして國家に就ては暴君と名づけ社會の賊敵である、然れども社會は物力を其の背景とするが故に如何に暴君暴漢と雖も自然の力に富むものは自ら社會を支配し勝ては官軍負くれば賊にして其の人の意思は社會の法となりて以て其の法に従ふ社會が形成せられるのである、絶對的強大なる物力を有せる者が私有財産制度を禁するの意思ならば其の社會は自ら共產制度の社會となる、此の法に違反し得ざるに非るも若し違背せば其の社會を破壊するものとして處罰を受け或は無効となさしめられる、故に此の制度の下に於ては財産は社會の意思の力に依りて私有が不可能となり、吾人が私有せむとする自由意思は其の實現不可能となるのである。

是の故に社會の意思とは社會上に於て最も強大なる自然力即ち物力を所有せる人の意思に依りて定めらるゝといふも不可なし。

從て社會法上の不可能は事實の不可能に非ずして人爲的不可能、詳言すれば他人の意思の方に依る不可能にして之を他律的不可能といふ、而て此の法による權利は他人に對して要求し得る法の力にして之を他律的可能と呼ぶ、之を他力といふは社會の力に依りて可能なるものにして法は自然の意思の力にあらず、社會の意思の力なるが故にして之に反し法によりて要求せらるゝものは社會上の義務である。

今日社會の意思の力は之を國家が統治權なる物力の背景に依りて有する所にして、國家の意思が社會の意思を代表するは國家が今日最も強大なる物力を所有する意思主體なればである、故に社會の力は國家の力となり吾人は國家の力によりて他律的に支配せられ、其の自由は拘束を受けるのである、而て國家を組織する條件は憲法と名づけ國家は之によりて構成せられ國家自身が自己の意思目的に依りて之を達するが爲めに又自ら守るべき法である。

憲法は國家を形成する法なれば國家の體様即ち國體及其の性質即ち政體は皆此の憲法に依りて定まり、若し人間の中に於て國家を最も強大なる意思の主體とせばそは唯

だ憲法の規定の範圍内のみである。

憲法を守らざるべからざる者は國家と社會とある、國家を組織せむとする目的を有する者は社會にして國家が之によりて構成せらるゝ時は其の目的を社會に主張するを得る、換言すれば社會が國家を必要として組織するものなれば社會は國家を組織する限り憲法を守る必要がある、國家は絶大なる武力を有する者が單一の意思を以て組織する場合もある、或は多數の人の契約に依り共和國となるものもある、孰れに於ても物力を其の基礎とするが故に人々は此の力に依りて自己の意思が壓迫せられる。

又國家は自己の意思を以て、幾多の目的を有する、國家の目的を達する要件は、法律にして、法律は又國家の守るべきものであり、國家は法律を守らねば、國家の目的を達し得ざるが故に、此の法律を適當に守つて行かねばならぬ、法律なくとも十分に國家の目的が達せらるれば、國家は法律を作る必要なく、又夫れは國法たる價値なし、國家の目的は憲法の示す所にして、國家の發する法律命令等は憲法の精神を實現せしむる國家の意思である。故に國家内の各個人は國家の法律命令に他律的に従はざるべからざる義務を負ふ、而て義務の反面には權利あるが故に法律命令の精神を善用せば、そは權利として國家は其の目的上法を破り得ざる義務を負ふので

ある。

國家の法律に公法と私法とあり、公法は國家が國家を實現する法にして私法は國家が社會を形成する法であると自分は解する、今日通常公法と稱せらるゝ刑法、訴訟法等は國家が憲法により、組織せられたるより其の目的を達するに缺くべからざる法にして此法に従はざるときは國家は憲法上の目的を達し得ざるものである。

然るに私法は國家の實現には關係なし、民法とか商法とかは無くとも國家は存立し得るのである、如何なる者が所有權を有するや、何人が債權を有するや等一々國家が法律として之を定めなければ國家は滅亡するとか無能であるとかとなし得ない、國家が一般社會の意思を認識し慣習道徳人道等を顧慮して適當に裁判を與へ善を勧め惡を懲らせば足る、故に此の裁判の勸善懲惡等は公法なるも社會の慣習道徳人道風俗等が國家の要件であるとはいふことが出来ない、而て此の慣習道徳人道風俗等の社會の公序良俗こそ社會の法にして社會の人々が互に他人の人格を尊重して傍若無人の振舞なく、自分さへよければ、他人はどうでもよいといふ如き利己害他を禁じ、互に平等の地位に於て、利益を交換し、有無相通し、社會全般の幸福を圖つてこそ、社會共存の目的が達し得られるのである、現に民法に於ても、公序良俗なる、漠然たる語を使

用し或は慣習法を認むるが如きは、民法商法等の規定の内容が國家の成立に缺くべからざる要件たるものに非ることを意味するものである、故に裁判、刑罰、強制執行等は國家の缺くべからざる行爲として苟も國家として之無きものなけれども物權、債權親族、相續、商行爲或は賣買、質入、銀行、倉庫、保險等の行爲は國家の缺くべからざる要件に非るの故を以て特に之を規定せざる國家もあり得るのである、專制政體の國家に於ては尙更である。

我國に於ても幕府政治の時代は專制政體にして、如何なる民法商法等の規定ありしやは敢て之を知らぬが奉行とか與力とか刑罰とか裁判とか沒收課役徵發等の制度のない時代はなかつた、それでも大岡名奉行の如きは適當に社會の裁判を行なひ人民に公平なく社會の秩序は十分に保つたのである。

但し國家は社會の目的を達する爲めには如何なるものを以て社會の正義なりや、社會の法或は公序良俗の何たるやを自ら認定する必要がある、加之立憲政體に於ては法律に依るに非れば國家の強制力を社會に加ふることを得ざるが故に特に國家が社會の慣習道徳人道風俗等を仔細に察知し以て民法若くは商法等の法律を制定し之を以て國家の認むる社會の法とせるものである。故に事實社會の風習の變遷に依りて民法、社

會の法と必ずしも一致しない場合もあるかも知らぬ、然し之は國家に對しては社會の法であると主張することが出来ないものである。謂はゞ民法商法等は刑法等と異なり國家の成立上缺くべからざる要件を其の内容とするものに非るも、國家が社會の存立を目的とする上に於て裁判官は此の準繩に依りて裁判を與へ適法なる者を國家が保護し違法の者は國家の力を以て其の無効の決定を與ふべき標準を定めたるに過ぎぬ。故に民法に違反したとて國家の存立に關係なし、國家が物力を加へて人民の自由を束縛するは訴訟法、強制執行法、刑法等の公法にして我々は公法に依りて意思の自由實現を妨げらるゝも民法商法等に依りて我々は自由は束縛せられぬのである。從て我々は民法に違反して契約を締結したとて國家から何等の干渉を受けず、唯だ吾人は民法に従はざるものは國家の法を借りて之を強制することが不可能なるのみ、又國家は單一なる意思の主體として社會の一員となるが故に社會の人々と共存の實を得むとせば民法に従はねばなるまい、然れども國家に對しては強制力を有せず、何者國家は最大なる物力を所有する者なれば唯だ大自然の事實の外には國家を壓迫するを得ざればである。從て國家は他の國家と國際社會を構成し、此の國際社會の社會の法は國際法と名づけ而て國際社會は互に國家自己の存立を主張するものなれば國際公法と命名すれども事

實に於て此の法は國家と國家との社會を構成する私法である、他律の法にあらずして縱令此の法に違反したとて強大なる物力さへ有すれば此の法に依りて他律的に羈束せられることはないのである。

第三項 自己の法

自己の法とは自然の物生理及社會の準物力より全く離れたる自己自身の人格を構成する理性の力である、人間は意思の力の強き方面に動かされ弱き意思は他の強き意思の爲めに壓倒せられて其の實現不可能となる、心は二つに身は一つである、身が一つなるは自然の法の不可能にして、兩物兼ねることを得ざれば心の強い方面に動きて心の弱い方は實現出来なくなるは當然である、然れども事實不可能なるにあらず、又社會の法も禁ずるにはあらず、而かも猶之を抑壓するは理性の發する意思の力である例令今日は親の命日である、事實魚なきにあらず、金も澤山あり、又社會は命日なりとて必ずしも魚を食ふなどは別に法律にない、而かも猶今日は親の命日であるとなして強て精進するは自己の理性の力でなければならぬ、人間の人間たる人格は此の理性の意思に存するが故に此の理性の意思こそ人格を批判する唯一の標準でなければならぬ、理性の弱き人は之を薄志弱行の人と謂ひ、或は單に意思の弱い人とも呼ぶ是れ必

かすも絶對的に意思の弱きにあらず、相對的に他の意思が強いに外ならざるも人格は此の理性を標準とするが故に意思の弱いとは、此の理性の力を指すに外ならぬのである。理性の發する意思は國家の法律命令に相當し現實に於て苦痛である、食ひたいといふ意思を打ち消して食はぬといふ理性の意思は必ずや苦痛である、斬ろうといふ意思のなき馬謬を斬る意思は萬斛の涙である、國家は無法律を理想とする如く、人生亦理性の意思は絶無なるを理想とする、國家の法律は國家の憲法上其の目的を達する爲めに已むを得ざるに出づるが如く、理性の意思も自己の目的を達する上に於て已むを得ざるに出づるものである。

國家を定むる法は之を憲法といへば自己の人格を定むる法之を主義と名づく、而て理性の發する意思の活動は之を精神的活動又は心配といふ。

主義は自己を形成する法にして自然の法たる物理、國家を構成する憲法に相當するものである。

自然の法は自然の傾向又は性質性格等に依りて定まり、國家の憲法は社會の人々の意思の自然的傾向を以て人の定むるものなるに自己の法即ち主義は純然たる自己のみが他の自然や他人を超越して自己自身にて定むるものである、此點に於て人間は全く

自由、天上天下唯我獨尊である、然れども人は自然の一物たるに於て全く自然を超越するを得ず、自然の性向が主義を定むる根本的基礎となり、又社會の法の束縛を受けて憲法や法律に違反することが出来ない、然し右は主義には關係なく主義は他力によりて妨げられて實現不能とするも主義は自ら自由に定め得る。

自然の本性本能を主義とするもの之を無主義又は自然主義と謂ひ、無主義も一の主義である、其の時其の時に依りて氣の向いた方面に行動するものにして普通の人生は通常無主義が理想である、即ち何も心配がないからである。

然れども我々は永遠一定的に又時々主義といふものを定めるのである、其の主義は即ち自己の幸福を達すべき自己實現の方針を定むるものにして、其の主義は事實意思に外ならざるも自己の他の意思を發すべき準繩を成し、如何なる行爲も此の主義に従へば自己の幸福を致すべき権利のあるものであるとなすの自己の法である。之が爲めには吾人は永遠の大理想を定め此の目的の下には自ら一定の法ありて之を自己の主義と定める。例令自己は大臣になることが目的であるならば其の道に従ふのが自己の主義である。又大實業家大資本家になるとなれば經濟の方面が自己の進むべき道にして所謂金儲主義とならねばならぬ。又物質主義といへば旨い物を食ひ面白い物を見て之

を以て自己の最大なる幸福であるもののであるし、又人格主義といへば、物質を超越して自己の社會的地位を向上せしめ、他人の尊敬を受けむとするものである。

要之主義は自己の意思に外ならず、唯だ一定の意思目的を定むると定めざるによりて有主義と無主義とが分れるに過ぎず。故に其の目的が變轉窮りなければ所謂無目的の無主義である。又如何に目的を定めても是れ勝手に自己が定めたるものなれば勝手に變更出来るものにして、社會的に見れば頗る當てにはならぬも苟も自己として一定の目的を定むれば自分としては一定の主義あるものであり、之が爲めに勇往邁進努力して己ます此の目的の外には更に他の意思を起さずして傍目も振らず直進するの人は所謂意思の固き人として一定の主義ある人である。

最も強大なる自然の意思は唯だ事實の傾向にして今日科學の研究によりて物質不滅不増の法則とか運動の第一第二及第三の定率とか、水は酸素の一分子水素の二分子より成るとか更に肉體の生理醫學の法則なるもの發見せられ以て自然の絶對意思を付度するに至つたが結局は事實である。又社會の意思は即ち法律として現はれ社會の意思目的は知らずと雖も此の法律は絶對に人々を羈束して之に違反することが出来ない。而て自己の意思は全くの自己意識にして其の存在は自己の目的に在り、吾人は主義と

いふ法則に束縛せられるのである。所謂人間自己の意思の力である、自己の意思次第に依りて我々は拘束を受ける。茲に(一)事實、(二)法律及、(三)目的といふものがありて我々の自由を拘束すると共に又此の法に則りて自己を主張し得るのである。

要之主義は自己の法にして主義を定むといふことは自己の意思の實現すべき準繩を定むることである。之を以て自己の最大なる幸福實現の方法手段とすることに於て自己の法である。結局自己の意思が幾多存する時は其の中最も強大なる意思が他を壓迫して自ら實現せらるゝものなることは自然の作用にして唯だ主義として定めたる限りは此の自然の作用を離れて人間の間たる理性の意思の力となり理性の弱き者は動もすれば他の意思の支配に任せられてしまう。例之今此の或る意思を實現せしむれば不利益と知り乍ら現實の状態に支配せられて金を使つてしまつたり、法律を犯したりするに至る、皆理性の弱き者である。

理性の最も強く表現せられて人格を構成する所以のものを天上天下唯我獨尊又は單に獨立自尊と稱する。之は福澤諭吉先生の唱導せられし標語であるが之が解釋に就ては兎角誤解を生み、先生の本意を無にすること大なるものあり、或は自己本位の傲慢不遜となし、或は徒に身を處すこと尊嚴、勿體振りて他人の誹を招かざるが如くする

ことであるとかとなし、徒に身邊を裝飾し、以て獨立自尊を得たりと考ふるの徒は却つて、不獨立不自尊にして、憐むべき自然又は社會の奴隸たるものである。眞の獨立自尊は、如斯形式上の觀念に非ず、之を言ひ換ふれば、獨立自由の自己の認定といふことにして、彼の普通の宗教が、神や佛を信じ、他力本願成就に生き、以て自分の安心立命を求むると異なり、天上下唯だ自己を信するの自信の念慮である。天を怨まず、人を咎めず、常に三省して總てを自己の責に歸するものである。之が爲めには自己の精神の修養を事とし、自然並に社會の法理を會得し、法に依りて自己を主張し法に依りて自己を屈し、輕舉を慎み盲動せず、唯だ専ら法の認定に依りて法に従て動くものである。故に獨立自尊と雖も他人を輕蔑するにあらず、國憲を重じ、國法に従ひ他人の存すると否とに不拘苟も法なりと認定せし上は之を自己の法として長上に敬意を表し正義を行ひ、人道を履むといふが如きものにして天上下總て自己の認定に歸して此の認定に於ては全く自己が獨立自由の最高の人格者たり、以て自己の人格の向上を期し、自己の實現に努力する。而て一切の善惡は盡く歸して自己の責任とし自信の力に依りて自己の安心立命を求むるのである。一言以て之を掩へば福澤先生は科學の信仰者である。總てを法の認定に依りて行動する處是れ自己の理性の批判に則るも

のにして、常に W.V. の觀念を忘れず法の理由なくしては牢乎として一寸る所に權利も羈束せられざるものである。人生科學の基礎は此の認定に存し、此の認定を主張すあり、此の認定を屈する處に義務を負ふものである。之が爲めに自己は自己の最高獨立自由の意思の認定に上りて自己の目的を定め、此の目的に向て精進し、此の目的以外には更に自己の觀念なし、之を以て天上下唯我獨尊の人格主體となすべく、入或は之を主義の人とも呼ぶに至る即ち主義は自己自律の法である。

凡そ法は之を大別して以上三種に歸するものにして之を自然科學の立場より觀察すれば其の中最も力強きを自然の法とし社會の法之に次ぎ自己の法は最下位に位するものである。故に人之を稱して天地人といふ。天は宇宙を總攬し、時及處を以て其の大權とし、此の大權は人に對して時の運を以て律しつゝあることは既述の通りである。地は天が人の自治に許與せる所にして物質を以て表象せられ、人は地の利に則りて社會を構成する。社會は表現せられて國家となる。即ち國家は地上の存在である。而て人は自己にして自己の幸福の觀念を成すものである。又人は肉體と精神とより成れども人の人たるは精神にして肉體は地上の一物たるに過ぎず、物理化學生理等の自然の法の支配の下に服するのである。然れども精神は物質にあらず、全く人間特有の靈魂にし

て此の靈魂は物體を動かす力なし、肉體を動かす力は矢張物理化學の力である。然れども此の精神は能く萬物と和合し得る性質を有し、人は和合に依りて其の存在を維持するのである。於是乎天の時、地の利及人の和と稱して人生は此等の法に則りて生活し享樂しつゝあるものである。

然れども天の時は絶対の流れにして全く大自然の直轄大權に屬し人力の如何ともし得ない所である。故に人は一定の時に於ては地の利に則りて生存するより道がない、その昔水草を追ふて移轉せるも能く此の地の利に則らむが爲めである。而て此の地の利も一定の時一定の存在の状態に於ては所謂運命として其の物理化學の力の下に征服せられ強力なる人間が一定の地の利に占據しつゝある場合、後に生れ來りし人間が更に以上の物力を有せざる限りは其の法の下に於て奈何ともし得ないのである。於是乎人は唯だ和合して物理化學の法を應用し努力して行くにあらざれば地の利を享受し得ざるものにして所謂理性は現實の努力の苦痛を抑壓し、能く物理化學の法を辨へ之と和合するの作用をなし、以て餘剰の利益を得べく斡旋するものである。從て此の適當なる和合の結果は能く地の利に勝るものあるものにして南洋熱帯の地方は地の利大なれども人の理智の發達して和合の能力の發達せる者は能く不耗の土地をも開墾

し以て現代文化の中心をなしつゝあるの事實は如何に天の時は地の利に如かず地の利は人の和に如かざるを實證して餘蘊なきものであるまいかと思ふ。經濟は實に此の和合にして自然の状態に於て不利にしてその儘にては存在し得ざる場合に能く地の法を理解し、之と和合し努力し、身を屈して而て後適當なる地の利を獲得したる時爰に經濟を得たるものである。人の和合は人と人との間に社會を構成する。經濟を目的として人々相集まる時之を經濟社會といひ、斯くて人々が共同して自己の經濟を營むを社會經濟を營むといふ。之に就ては更に詳述する所である。

第二節 人生と經濟

茲に自分が人生を説く所以のものは自分は人生を基本とし對象として經濟を説かむとする必要より出づる。犬や蟲等の動物の經濟狀態等彼等にも法の束縛ある限り其處に經濟の存すべき道理である。然し彼等は自然の法のまに／＼その儘生存し生活し行くものにして彼等自體に法の運用なるものなし、又自然の法は唯だ事實の存在にして之を解剖するは自然の科學の範圍を超越せざるを得ぬ。唯だ人は自己の自由の主義目的を有すると同時に自然の一物、社會の一員として生存し生活し行かねばならざるが

故に能く人生を處理して巧に法の運用按排を計り、以て能ふ限り人生の幸福の増進を期する必要上經濟は人生生活と最も密接なる關係を有するに至つたものである。

而て經濟は法に違反することに非るは勿論、法に従ふことも經濟に非ず、此の兩者の連絡を圖ることが經濟の職分にして従て自然の法のまに生活する者には經濟はない、此の状態に於ては自然の動物たるのみにして、彼の浮世離れし仙人や、乳兒、狂人等の類に經濟の觀念がない、又人の主義に於ても自然主義、現實主義の徒も亦同様である。宵越しの金は使はず、有れば有る限り、なければなしにて勝手にせよといふ主義は經濟主義ではないのである。眞の經濟は自己が天上天下獨立自尊の認定に於て自己は自然の動物に非ず、社會の乞食にあらず、自己は自己の目的に向つて其の實現を期せむとするに當りて之が爲めに適當なる手段方法を講ずる處に存する。故に生きる事が經濟にあらず、食ふことが經濟にあらず、人生永遠の幸福の爲めに種々の手段を繞らし、現實の苦痛を忍びて將來更に大なる幸福を求め以て餘剰の幸福を得る換言すれば儲けることに經濟の本領の存するを見るのである。

最近厚生經濟の語流行するも人間の爲す所經濟たるは法律たるは政治たるは美術工藝たるを問はず、孰れも皆人生の向上幸福の爲めならざるなく厚生は經濟にも當然

自明の本質にして獨り經濟のみに限つて居るものでない、厚生ならざる法律は惡法にして眞の法律にあらず。厚生ならざる政治は政治を成さず、厚生ならざる美術藝術は何等の價値なし厚生ならざる經濟は經濟でないのである。事新しく厚生經濟等を説き立て以て斬新なる、經濟新説であるかの如く吹聴するは從來の經濟學の不完全不徹底にして誤謬多かりしを實證するものにして經濟は其れ自體に於て厚生經濟たり、厚生ならざる經濟は之が存在を認むるの理由がないのである。

從來の通説に就ては人は慾望を有すといふ根本的前提を置き、而て其の慾望を自然的慾望、地位的慾望及奢侈的慾望となすあり、或は獨逸流の區分に依れば自然的慾望と文化的慾望との二となす、然れども慾望を如斯分類することが經濟學上如何なる價値を有するやは吾人其の意を解するに苦むものにして慾望の向上は人格の向上であり如何に奢侈的慾望にても如何にも文化的慾望にても慾望たるに相異なるなく之を満足せしむるこそ人生である。人は先づ自然的慾望より始まり、更に餘裕あらば或は地位的に或は奢侈的に或は文化的に向上すべく所謂自然的慾望を満足せしめずして奢侈的又は文化的慾望等のある筈なし、生活の目的は結局自己の享樂に外ならざるが故に生活に餘裕あらば奢侈贅澤文化の向上何等經濟に反する理由なく經濟學に於て慾望を如

斯穿鑿することは全く無用の業である。

又人は慾望を有すといふも其の慾望は前記の中の如何なる慾望を有するやといはば人は當然文化的慾望を有すとなさざるを得ず、又人に依りては唯だ生きて往きさへすれば善いといふ者もある。又甚しきは生きて居るより死んだ方がよいといふ者もある之も自己の幸福を求めむとする慾の致す所であるとなさば其の慾望は孰れの慾望に屬すべきや、功成り名遂げ身退いて最早功名を願はず優游自適山水風月を友とし自然を樂むは人は之を無慾といつて居る。然らば是れ無慾の慾望といふべきか、所謂第一次自然的慾望、第二次地位的又は應分的慾望及第三次奢侈的慾望とかに分ち奢侈的慾望は満足せしむるに及ばずなどと論じてゐるが其慾望の何たるを問はず、慾望の存する限りは人生の苦痛の状態にして之を満足せしむること人生の幸福を致す所以でなければならぬ、而て此の慾望の満足は單なる人生生活にして渴して水を飲み、空腹にして飯を食ふ芝居を見むとして芝居を見、登山せむとして登山する、其處に如何なる經濟ありや自分の金にて自分が之を自由に使ふ、當然の事を當然にしたるのみにして之を以て經濟を得たりとなすべきでない、此等は一般人生の慾望にして此の慾望によりて人生を構成し此の満足に依りて人生を享樂するのみ、此等の慾望は經濟的慾望ではな

欠

MISSING

然れども社會的に見て經濟可能なれども個人が不可能なる場合が多い。之を社會的又は相對的不可能と稱すべく、單に又經濟的不可能、經濟的不如意ともいふ、貧乏即ち是れである。換言すれば金の遣り繰りが出来ないものであつて、之を國家に就ていへば法律を制定しても之を執行することも出来ない無政府状態に陥つた場合であり、之を個人に就て見れば破産又は身代限となるものである。即ち經濟は的當なる手段を支給するのをいふのであるが此の的當なる手段を自分が缺くに至つた場合には他人は出來ても自分は出來ないのである。金を儲ける術の盡き果てた時、金の有り高が缺乏したる場合の如き是れにして社會私法上の私有財産制度とか、他人の獨立を尊重する等の社會の法の拘束の結果自分が經濟不可能となる。故に此の私法の存在なければ、どしどし他人の物でも自由に奪ひ來りて自分の用に供し得るのである。然し如斯事は社會法上不可能なるが故に他人が出來ても、自分が經濟不可能なることになる。即ち物が高くして自分は金がない場合に於て、茲に自己は社會的に經濟不如意となり、生活難となるのである。是れ自己の貧乏なるは、社會法上貧乏なるが爲めなれば、此の社會法を巧に運用すれば必ず富裕となるべきであるが、此の社會の法は結局金にして、金なきが故に、終に遣り繰りがつかないのである。之を經濟的に云へば、他人に損をか

けて自分が儲けることが出来ぬといふことである。一方立てれば片方が立たず、両方立てれば身は立たぬといふものにして、自分に澤山金があれば、両方立て得むも金がない場合には両方立て得ない、愛妻にダイヤモンドを買つてやりたいが、自分に其の値段丈の金がない、安く買はうとすると賣手が損するから賣らない、女房を立てれば賣手は立たない、即ち身は立たぬである。

経済的不可能は消費経済より考ふれば金の缺乏に基くものなれども生産経済より考ふれば資本の不足と稱するものにして利益を得べき法を知り乍ら之を實現し得ざるものである。是れ経済手段の絶對的事實の缺乏にあらずして相對的社會の私法上の缺乏である。通常之を経済能力 (Economic power) の缺乏又は經濟行爲無能力狀態といふのである。又富 (Wealth) とは此の經濟能力の畜積を指すわけである。而て通常經濟といふ時は此の富の増加を致すことを意味するのである。

最後に經濟を爲すに當りて自律的に經濟不能なる場合がある、即ち不經濟と稱する時は是れにして經濟する必要な之が爲めに種々苦勞するに及ぼす、又一方を經濟する爲めに他方を犠牲にし、其の差引却て損となるが如きはせぬのである。是れ自己自身に依るものである、即ち金がないのでない、然しつまたぬ物に高い金を拂ふこ

とが出来ないといふ觀念になる、即ち能く節約して浪費を慎むといふは自律的に經濟を守り不經濟をせぬといふことである。

以上示すが如く經濟は法によりて働き、法ありての經濟なれども、又法は經濟の爲めの法にして經濟なくして法も之を認定するを要しない、人生を中心として法を學び法を研究するはそれ自體に於ては他に目的を存せざるも之を人生に就きて考ふれば皆人生の爲め的手段として、其の實利を考ふるものである。農學、工學、文學、醫學、音樂、藝術、軍學、運動一として人生の幸福に歸せざるなし、國家の政治、法律、倫理道德も結局人生の幸福に結合し、其の價值を判斷する所に經濟ありて人生を不幸ならしむる法律命令は直に改廢せらるべく、人生を幸福ならしむる法律は直に施行すべき性質のものである。即ち經濟ありての法律であるといはねばならぬ。

然れども經濟は經濟、法は法である、孰れも對當獨立の地位を維持し、法ありての不自由あるが故に經濟の必要あり、法の拘束なく自由自在ならば經濟も亦滅亡である例之國家が滅亡して無政府となれば社會經濟は滅亡して自然の孤立經濟となる、而て自然の孤立の對物經濟の滅亡するは天國の理想郷にして、此處には法も道も何も認識なく全く自由自在の極樂淨土でなければならぬ。而て法は獨り嚴然として、其の重き

をなし、之に批判も論究も之を容るゝを許さず吾人は唯だ此の法に則りて之を運用するの經濟あるのみである。

惟ふに人が生活し享樂せむとするに於ては第一に自然の一物として、生命を維持することを要するものにして即ち生理の法に従はねばならぬ、之に必要な物件を生活必需品と呼ぶ。之によりて人は自然の一生物たるを得るものにして之が人生第一の經濟物件である。次は人は社會の一員たるを要するものにして、又之に要する適當の材料を得ねばならぬ、而て最後に自己の自己としての享樂用物件にして此の享樂なければ人は生き甲斐なく死んでしまはなければならぬ、此等の適當の材料を獲得して以て初めて人生が自己を構成し得るものなれども此等の材料を獲得することが經濟に非ず此等の材料を支結することが經濟である。此の關係は經濟の本質を明にする上に於て最も重要な點なるを以て特に吟味して貰はねばならぬ所である。若し獲得することが經濟ならば人生即經濟であらう。水を飲み、空氣を呼吸し、飯を食ふ皆是れ獲得にして、法に則りて當然獲得する所に何の經濟がある。獲得出来ないから人から支給せられて初めて經濟せられたといふべく、又之を經濟したといふを得るのである。經濟社會に於て商人は御客に對し「有難う御座います」とお世辭をいふ、是れお客に依りて經濟

せられるからである。お客が品物を買ふは貨幣と稱する法の力に依りて當然自由に得るものにして、當然自由に獲得出来るものには別に有難いこともない、所謂獲得は法の力に則るものにして經濟は助けられることである。助けられるから、有り難いのである。斯くて助けられたものはそれ丈け儲けたのである。即ち經濟は儲けることである。金を獲得することにあらず、金を儲けることである。國家は國民を經濟するため適當なる法律を設ける、戸主は家族を經濟する爲めに金を儲ける。要するに人生に適當なる材料を支給し、其の人生をして自由に其の目的の實現に従事せしむる、茲に經濟の根本義あるものにして、學生は親より學資を得て、學業に勉勵するは親が子を經濟するものであり、子は親に依りて經濟せられるのである。軍隊が戰場に於て戰爭に従事する後より之に必要な軍需品食糧品を追送する、之によりて軍隊は其の經濟を得て目的の戰爭に専心なるを得るのである。若し此の經濟する人がなければ目的の爲めに適當なる材料を缺きて活動することが出来ない、此の材料の缺乏を經濟的慾望といふのである。空氣水等は自由に獲得出来て缺乏を感ずることなきが故に經濟的慾望の對象物件とならず、其の對象となるは獲得出来ない物件である。之を財といふ。即ち財を支給せられ、又之を支給して以て人生の經濟を得るものである。此等は人生

を經濟するものにして其の人生の自己一人なるあり、家族多數なるあり、或は國民全般なる等ありて獨身經濟、家族經濟、國民經濟等あるべく、之を經濟する人から見て其の消費經濟といふのである。

然れども其の適當なる材料を支給し、以て人生を經濟する人は又如何にして自ら其材料の調達を得るや是れ即ち經濟主體自律の經濟にして、生産經濟又は資本經濟と稱する所のものである。之が爲めには人生に有害無用なる物件を蒐集して之を有用なる材料と變せしむることである。即ち人生がその目的を達するに適當なる手段は能くその人生の幸福を構成するものなれども、法は他面に義務を生み人生が之によりて拘束せられて自由なり得ざるが故に其の有害なる法を除却し、之を有益なる法と化して支給することに存する。例之人は飯を食ふ、飯を支給するは其の消費經濟である。然れども其排泄せられた糞尿は又人生の難物にして之れあるが爲めに人生は其自由を拘束せられて苦勞する。故に之を始末することも經濟にして、之を更に巧に按排して更に人生に對し尙なる材料と化せしむる處に自己の生産經濟があるのである。此の人生に對する法の按排、遺り繰り算段が經濟活動たり、斯くて經濟を得つゝあるのである。元來エコノミーの語は節約といふのが其第一義である、エコノミーは節約といふのが

其主たる意味なる上は經濟は此節約といふ觀念と全く没交渉にして正當なり得ぬ、節約あることによりて茲に經濟なるものゝ發生あることを認めざるを得ず、又節約なくして經濟あるべき筈なしと思ふのである。學者或は經濟と節約とは其意相異なる、然れども其重要なる一手段であるとなすも尙未だ足らず、節約とは經濟の總てに普遍的にして其本質を成し單に手段に過ぎざるものとなすとは吾人の一般的觀念と相容れざるのみならず、economy そのものゝ意義を没却するものといはねばならぬ、加之經濟と節約とは殆ど同一義に使用せらるゝ事實は、之を否定すること得ざるものにして、經濟不經濟は節約不節約といふも敢て誤りなきは economical, uneconomical の語よりしても、之を保證し得るのである。然るに或る學者は又經濟は二個の意味を有し、一は實際に通用せらるゝ經濟不經濟の語にして、即ち節約の意味を有し、此意味に於ける經濟は別個の性質を帶ぶ、一は所謂經濟學上に於ける經濟にしてエコノミカルに非ずしてエコノミックと稱せらるゝを謂ひ、經濟學の研究する所は、前者に非ずとなすも是亦容易に首肯し得ず、實際に使用せらるゝ經濟なる語は學問の研究する所にあらず、經濟學の研究すべき經濟は實用上の經濟と其意を異にするものであるといふは學問をして空論たらしむるのみならず、經濟學の實際上に價值ある所以を無視するもの

といはねばならぬ、エコノミーは多少意味の轉化はあれども其本質が別個なりとは想像し得ず、若し全く別種の本質を有するものとせば經濟學上に所謂經濟なるものに節約が其生命であるといふ理由を解するに苦しむのみならず、少なくとも節約が其重要な一手段であることを自認する所を見れば實用上節約の意に使用せらるゝ經濟と學問上の經濟とは其本質を異にするものといふは少しく不合理に聞かえはせぬかと思ふのである。

既に述べし如く經濟は本來は人を助くるといふ文字なれども人を助けることは慾望を満足せしむるにあらず、慾望の満足は法の力にして、法のお蔭である、經濟は寧ろ法を助けることである。法に善惡なし、善惡は人の批判である、善法も惡法も法は法である。法を助けるとは人より惡と思はれて居る法を善く思はれしむるものにして之が結局人を助けると同一の意義を有するのである。即ち法を助けることは財を助ける(save)ことにして、或る人に有害である物を或る人には有用であるとする時に之を接排するは其法を助けることである。是れ取りも直さず物をして價值あるが故にあらしむるものであり、能く其の財を助けることになるのである。此の財を助けることが節約と合致するのである。斯くて助けられるだけ人生の幸福を増進しつゝ行くものに

して之によりて利益となる。利益とは幸福を増加すると相同じ、俗に所謂儲かることである。従て經濟とは最少の勞費を以て最大の効果を得るをいふとなす所以にして是れ法を最も適當に接排し運用することを意味するに外ならぬ。

由來此の最少の勞費を以て最大の効果を收むることは單に經濟主義とか本則とかいふものに過ぎずとなすものなれども、自分をして考へしむれば之こそ經濟の本體にして之が經濟の本體であればこそ凡て費用を少なくして目的を達することを經濟的であると呼稱するのである。若し經濟の本義が更に他に存在するものならば、又何が故に最少の勞費を以て最大の効果を收むるを經濟主義とか經濟の法則であるとかなさねばならぬか、又何が故に經濟は此の法則に従はねばならぬか、吾人は其の理由を解するに苦しむのである。

實に經濟は此の最少の勞費を以て最大の効果を收むることを謂ふに外ならずして、之を經濟主義とか經濟の原則とか法則とかいふべきものにあらず、理財や財政に於ては此の經濟を其の法則となすが故に此の語は理財若くは財政の法則と稱すべきものなれども經濟自體が經濟の法則となすべきにあらず、是の故に理財と經濟とは異なるれども理財は經濟的に行ふを其の本旨とするが故に結局理財學と經濟學とは相一致するに

至る。而て理財學は財を如何にして經濟的に運用すべきやといふことを教ゆるものにして其の經濟といふことは實に經濟學の教ゆる所である。

由是觀之最少の勞費を以て最大の効果を收むとの語は理財の法則なれども之は經濟自體にして經濟の法則には非ず、唯だ凡そ最少の勞費を以て最大の効果を收めむとする主義を以て行くときに於て其の主義を經濟主義と稱すべく、其の慾望を經濟的慾望と名づくべく其の慾望を満足せしめむとするを經濟活動と呼ぶべく其の効果を收むるを經濟行爲と謂ふのである、故に此の語は經濟の法則とか主義とかいふにあらず、寧ろ之は經濟の本體を示す標語に外ならぬのである。

抑も經濟を經濟學として特に研究する所以のものは最少の勞費を以て最大の効果を收むることが困難なるが故である、費用を惜まらずして事に當らば如何なる事も爲し得ざるものはあらず、此の費用を出さずして吾人の最大の幸福を求めむと欲すればこそ吾人が日夜頗る苦勞し慎重の態度を以て事に當るのである、茲に經濟學といふ學問が社會に其の重きをなすに至つたものである。

此の最も通俗の觀念を無視して經濟は生活とか富とか、慾望とか厚生とかいふべきか、き語を並べて得意がる學者こそ寧ろ不經濟な徒勞の輩と謂ひつべきである。

而て最少の勞費と云へば節約である。水や空氣の如く無限に存在するものは特に此等の物の消費を節約する必要がないのであるが財は有限であり、消費せば代りはなきが故に可成的財の費用を少なくして、人生の幸福を圖らむとする處に節約の意義がある。

又最大の効果と云へば人生の最大幸福にして同一の費用にて小なる幸福に消費するより更に大なる幸福の爲めに消費せば即ち大なる効果ありたるものにして、之を利益といふ。

前者は經濟の消極的觀察である、後者は其の積極的觀察である、即ち節約せられたる額を積極的に觀察すれば矢張利益であり、其の利益を消極的に看れば其の額より節約せられたるものにして茲に經濟と節約とは同一義なることを知るべく、而て節約といふ代りに經濟とは利益を收むることを謂ふ、即ち餘剰利益を收むるを謂ふとなして誤りなく之を最も通俗的に云へば儲けることを意味すとなして能く了解し得ることになるのである。

第三章 經濟學論

第一節 經濟學の意義

經濟學とは經濟に關する知識との意にして、經濟とは何ぞやとの學問である、學者或は經濟學は經濟現象を研究する學問であるといふが經濟現象は經濟なる概念あればこそ存在するものにして經濟現象などいふは無用の蛇足である、故に經濟の知識を有することによりて凡ゆる自然や社會の現象を經濟眼を通して觀察し、自然も物質も國家も法律も社會も道德も人生も文化も經濟的に判斷し批評し得るものである。故に經濟學と經濟的觀察といふのも聊か趣を異にするものにして經濟學は經濟の概念を考究することではなければならぬ、而て之が爲めには通常の論理學に於て教ゆるが如く三段論法とか、或は演繹及歸納の方法によりて以て經濟學城を築き上げることになるのである。換言すれば經濟學とは經濟法理を研究する學問である。

是の故に商業學が經濟學でもなければ其一部分でもない、貨幣論は又貨幣といふもの、學問にして經濟學とは又別個獨立の學問である。其他或は銀行論、外國爲替論、金融論等は皆夫々自己の進むべき獨特の使命を有し、此等貨幣、銀行、爲替等は多く

經濟を目的として發生し、經濟と其運命を伴にし、經濟亡びて又此等の物も滅亡することを其の本來の性質とすることに於て經濟學中の一分科を成しつゝあれども此等の物は經濟に利用すれば大に役立つといふ性質を有するが爲めに發生せしに過ぎずして若し右の如く解するに依りて此等の學問は當然經濟學の一部とすれば經濟の爲に制定せられし國家の法律命令も多數に存在するに不拘此等を法學に委附するは如何なる理由なるか、或は法律は經濟の下に位し其の部分に入るともいはむ、或は便宜上之に讓るともいはむ、如斯は經濟學の最負の曳き倒しにして、所謂經濟現象として經濟の爲めに發生したる諸種の事物が社會に多數存在せむも此等の事物を研究する學問と經濟其れ自體を研究する學問とは決して同種のものではないのである。從て此等の學問中にも亦自ら經濟觀念を帶ふることにして所謂商業經濟、銀行經濟、農業經濟、工業經濟、貨幣經濟、家事經濟、學習經濟等が盛に研究せられて來た、又政治經濟或は法制經濟などいはれるものがあり、此等は兩方の學問を對立させて政治學及經濟學、法制學及經濟學といふ意味であるが政治も法律も國家の作用なるが故に所謂國家經濟といふものも出来る。國家經濟は國家の立法司法行政上に行はるゝ經濟にして所謂經濟學は此等の諸經濟に共通なる原理原則を考究することになるのである。此意味に於ける經濟

學は決して紙屑籠に非ず、或は勞働問題、或は人口問題、或は外國貿易、或は爲替、或は生産など、何等の脈絡もなく經濟原論に羅列する如きは眞の經濟學をして何たるかを疑はしむるものである。

尤も經濟學も他の學問と同様に純正經濟學と應用經濟學とに分つことが出來やう、純正經濟學は經濟の根本基礎たる法理を學ぶものにして即ち經濟憲法學である。之を他の科學に譬ふれば物理化學生理學數學天文地理學等理科に屬するものである。而て應用經濟學は經濟行政學ともいひ得べく、之を實際人生の諸生活に應用し以て人生の實際に適用するものである。即ち他の科學に於ける農學、工學、醫學等は理科學に於て研究せられし物理化學生理學等實際人生に應用するものである。此の應用に於て技術の觀念を伴ひ巧拙を生ずる譯である。所謂前記、商業經濟、工業經濟、農業經濟等は蓋し應用經濟學となし得べきであらう。

又凡て數學を離れて科學の法理を完全ならしめ得ざるが故に最近經濟學にも數理的説明が流行するに至つた。然れども物理にても化學にても數理の説明は理論先づ定まりて然る後之を數學的に式にて示すことになるものにて經濟學の理論が今日の如き混沌たる状態の下にて徒に數字を弄するは主客顛倒の嫌なきにしもあらず、加之物理學

化學等にては此の數學を知らずして之を實際に應用することが出來ない、微分積分を辨へずして、圓の周圍も面積も之を計算するに由ないから、圓を適當に作り得ざることになる。然れども經濟學は物理學や化學にあらず、若し經濟學も同様に數學上の函數にて的確に示され得るならば損する者はあるまい、是れ蓋し經濟は物質や自然を基本とするにあらずして、人の意思を基本とするが故にして人の心は常に動搖し、其の力は意思にして知情意の心理作用の結果意思として定まりし時に於てのみ力として一定の方向を有し、加速度を帶ぶるのである。意思の強弱は人力(Labor)の強弱である。(是れ肉體の物力をいふにあらず、肉體の腦力は物理學の範疇である)社會は此の意思の集合にして、自分自身の心がどう變るか不明なるものを數學の函數を以て示さんとするが如きは勞して効なし、縱令之を記號式を以て示し得たとするも未知數だらけにして、此の未知數あるが故の經濟である。未知數が既知數となれば最早經濟は必要ないのである。人ば何時死ぬかわからぬ、わからぬから經濟が必要となる。死ぬ時日がわかれば醒醒として努力する者がなくなるのである。

さりとして經濟學にも數理の觀念が必要である。然し之が爲めには敢て微分積分等を必ずしも必要としない、物理學にては之を知らざれば機械を作ることが出來ないが、

經濟に於ては微分積分など知らなくとも立派に經濟を得て居る。又人文科學にては數學は其の要件とせぬ。尤も歴史學派の經濟學にては社會の状態を大量的に觀察して、一般の傾向を察知し以て之に適當なる政策を施す、是れ即ち統計である。統計は經濟上に於て重要な作用を有する、然し統計は統計にして經濟とは別個のものである。統計と相並びて重要なものは簿記である。簿記にも種々あり、商業簿記、工業簿記、銀行簿記、家計簿記等各々其の目的によりて形式上變化あれども主として經濟上の目的に使用せらるゝことが其の本來の使命として居るやうである。

經濟上に於て缺くべからざる數學は商業數學と呼稱せられつゝあるものである。故に如何なる經濟家と雖も此の商業數學の知識なければ經濟は成立せぬのである。商業數學は經濟の法理に則りて計算せらるゝものにして、經濟學の數理公式は此の商業數學に公式を與ふるものであるとすも不可ない、原價計算、價格の決定、損益算出、利率利廻、物價指數等は皆經濟數學である。商業數學は實は經濟數學にして商業數學といふ方が寧ろ誤謬であると信ずる。蓋し商業は買賣交換にして其の價格を定むるは皆經濟より割出すものなればである。工場や農業上の產出物の所謂生産費の計算は商業數學とせざるが如きも、此等の產出物は皆賣買せらるべき物にして、商なくして

如何でか其の計算を決定し得む、商は實を法にて割ることにして、斯しくて價值價格が決定せられる。故に商なき限りは單なる見積りにして商と經濟とは相密接なる關係を有すれども其の本質は經濟數學にして商は唯だ實を法にて割つて行きさへすれば其の能事足らぬ、其の商の數を即ち値といふ、値は價值價格である。然れども之が經濟にあらず、商を得むとしても實又は法の數字が未知數なる時は値が出ないのである。此の實又は法の未知數を何等かによりて見出すことに經濟あるものにして徒に未知數を連ねし方程式を作りしのみにては經濟は未だ全からず、此の未知數を既知數たらしめむと努力する所に眞の經濟の存することを知らねばならぬ、從て總てが既知數のみならば經濟は其の必要を見ず、之を自由と稱し其の物件は自由材と名づけて經濟の範圍外となるのである。

經濟學は此の實又は法の未知數を既知數たらしむることが其の目的なれば其の目的を達したる時之を經濟と稱し又は利益といふ、是れ純正經濟數學の實に相當する。而て此の未知數を既知數となすに要する種々の努力を經濟活動といひ之を資本となし、純正經濟數學に於ける法である。此の實と法との比が決算にして之を經濟行爲とし其の値を利廻りといひ、純正經濟數學の商である。此の利益資本及決算の關係が所謂知情

意又は立法司法行政の三權たるべきものにして、此の經濟の爲めの經濟之を經濟自律の經濟といふ、即ち其關係を示せば左記の如し。

目的—實—意—動機—立法—利益—經濟
 手段—法—知—順應—行政—資本—經濟活動
 價值—商—情—批判—司法—利廻—經濟行爲

而て右に於て目的と手段との連結が結果にして其の連結なき間は所謂未知數の状態として慾望となり、慾望は力を生みて心を目的に對し推進せしむる。即ち資本が利益に向つて活動する處に資本の力の存在を認識し得るものにして其状態に於て資本は資産となり、其の速度は利子として計算せられ、其の割合は利率として進むのである。又距離は即ち利益にして、物理學に於ける仕事 (work) に該當し、其の商が工率 (power) として表示せらるゝ所にして即ち利廻である。

純正經濟學は此の相互關係の法理を會得することが其の根本的職分にして、即ち是れ經濟憲法學であるとなし得る所以である。

第二節 經濟學の沿革

經濟學の沿革は所謂經濟學史に説く經濟學說の歴史をいふにあらずして、其の科學としての發達にして普通アダムスミスを以て其の先祖として居る。其の詳細は茲に之を論ずるを略すも其經濟の本質を明ならしむる目的の限度に於て一寸述べて見たい。

從來經濟學は政治學の一分科を成し我國に於ても最近迄は法科の中に加へられて居たのである。英語に於ても經濟學はポリチカエルコノミー (Political economy) と謂へるが如くアダムスミスが著はされたる國富論も政治的意義を有し、國家の重商主義を攻撃して自由主義を唱導せるが如き是れ全く政治學の一部門たるべきものにして、ポリチカエルコノミーを邦語に譯して經國濟民なる矢張國家の政治の意味より抽出し以て經濟となせるも蓋し茲に由來するものではあるまいかと思ふ。

但し政治と經濟と相異なるは政治は國家が國家としての獨立の地位を保つ統治の方面を意味し立法、司法、行政、財政等國家が或は專制主義的に或は立憲的に國家が國家としての機能を行なひ其の國家としての意義を全からしめむとする作用が政治であ

る。即ち國家の統治の方面を指し從て統治機關たる君主、大統領、國務大臣、樞密顧問官、議會等が爲す所の仕事は政治である、参政權とは人民が此の統治の作用に參與する權利のことにして此等は皆國家の國家としての事務である。善政であれ惡政であれ孰れも政治にして、國家と國家との通商條約の如き、其の内容は商業なるも其の條約締結は國家の政治の一方面である外交談判も政治である。財政も政治である。此の政治は國家に限りて使用せらるゝ語にして是れ政治は國家が國家としての仕事を行ふを謂ふとなす所以であり、國務即ち政治に非るも國務を行ふこと即ち政治である、是れ恰も我々個人が毎朝起き顔を洗ひ飯を食ひ稼ぎに出て努力し、歸りて休み、夕に活動寫真見物等の娯樂を營み、夜に至りて寝るのが其の毎日の仕事であると相同じ、我々は如斯にして人生を享樂しつゝ送るものである。家庭に於ては家政などいつて居る。家政の紊亂といへば一家の中が無政府にして統治の實のないことである。家計生計も家政の一方面である。

要之政治は國家が國家としての任務を遂行することをいふものにして、就中立法は國家の意思を決定し司法は國家社會の法の維持に努め行政は其の決定せられし意思を實現するものである。而て財政は之が爲めに要する費用を取立て且つ之を支辨する仕事である。

事である。此等は皆國家が國家を運用する仕事の分化にして之を總稱して政治と名づけるのである。故に國家が國家として行ふ所のものは内國內を統治することも、海外に國權を發揚することも亦政治にして國家と國家との國際關係は其の内容に於て通常私人の賣買取引の如きものも國家が爲す時は是れ亦政治關係である。私人の商取引に相當するものは國際關係に於ては外交といふ、外交も國家の政治の一なることは敢て多言を待つ迄もない。

政治を職業とする人を政治家と謂ふ。政治を職業とするは必ずしも政治を以て飯を食ふ人を指すものにあらず政治を以て生活を營む人は政治屋であらう、眞の政治家は經國の才を抱き濟民の徳を有して能く生民塗炭の苦を救ひ其の幸福を圖り天下の憂に先して憂ひ天下の樂に後れて樂しむの士なるを要す、現代の所謂政治家となす所の輩は自己自身を經濟する政治屋たる者頗る多きも其の能く國民を經濟することを自己の本分となす眞の政治家の幾人あるやを怪ますにはあられなく、固より惡政、虐政も政治であるが、眞の政治の本領は國民を經濟することに在りて存するの外なく、國民を經濟するとは能く社會の善良なる秩序、道德、風習に則りて各個人上下の區別なく、一國民全體として其の生活を安定にし其の幸福を増進せしめ民の富めるを見て自己の

富めるとなす所のものである。國家の法律も警察も裁判も軍備も教育も其他國營の文化的事業等一として國民の幸福を目的とせざるはないのである。即ち國家の目的は國民の幸福安寧に在りて存し、而て此の外に復た他なきものである。之が爲めに國家の政治を司る人は常に自國民の生活状態を大觀小察し、如何にせば其の苦痛を救済し其の幸福を増進せしめ得べきやを研究し、其の方策を實行せねばならぬのである。其の實行は政治にして政治の根本は國民の經濟的慾望の満足である。國民の生存より生活へ生活より享樂へと進み或は其の自然的慾望の満足より、文化的慾望の満足へ向ふのである。此の國民の經濟的慾望を察知し其の方策を研究することを由來國民經濟學と稱して居る。從て國民經濟學は古來政治學の一分科として、大學に於ても法科の中に入つて居たのである。Political economy は蓋し政治即ち國家の方面より國民の經濟状態を觀察するとの謂にして之を獨逸語に於ては Volkswirtschaft 即ち國民經濟と呼ぶに至つたものと思ふ。而て Political economy は Economics と同様に普通經濟學と譯せらる。

經濟學は經濟に關する知識との意なるが故に單に economy と云へば經濟であつて、經濟學ではない。之に Political 政治的の語を冠して、政治的經濟と直譯すべきものを

エコノミックスと同様に經濟學となす所以のものは蓋し政治といふ國家の立場より、國民の經濟生活を研究するとの意より出づるものであるまいかと思ふ。本來國民經濟と國民經濟學とは同一に非るや明かにして、前者は國民全般の經濟状態を指し、後者は其の學問知識である。從て The principle of political economy は國民經濟學の原理にあらずして、國民經濟の原理である。而して其の原理を研究することが、即ち經濟學 (economics) の一であるとなすが正當である。但し國家の政治的方面より觀たる人生の經濟生活は國民一般の經濟生活を客觀的に考察し、之に如何なる施政方針を定むべきやといふことになり結局に於て一の政治家の心得べき學問知識となるに至るべく、從てポリチカルエコノミーを經濟學となすものと思ふ。

但し國民經濟のみが經濟學の對象にあらず、國民を離れたる世界全人類の經濟を研究するも亦經濟家である。唯だ國家爲政治家の學ぶべき經濟學は自國の國民の經濟を中心とせるポリチカルエコノミーでなければならぬのである。故に經濟學といふ立場よりすれば國民經濟若くはポリチカルエコノミーに限るとなすべきにあらずして斯かる政治的意義を脱却せる獨立の經濟學たるを要すべく、大學に於ても法科より獨立して自己の自由の天地を見出し其の發展を求めつゝある。此の獨立自由の經濟學は最早

國家とか國民とか政治とか法律とかと全く獨立對當の地位に在るものにして此の意義に於てポリチカルエコノミーは今日に於ては廣くエコノミックスの中の一科となすべきものであらうと思ふ。即ち經濟學は國家爲政家のみが會得すべく又利用せらるべき學問にあらずして、全人類が等しく研究すべき學問となつたものである。従て現代の經濟學は國民とか國家とかの政治的意義ある國境を有する國民經濟に止まらず、國境を超越せる一般人類の經濟生活を其の眞の對象物となすべきものである。

本來經濟學はアダムスミスを其の鼻祖とするものであることは一般の認識する所であるが、其の以前に於ても經濟は政治學中の一科として考察せられつゝあつたことも亦人の知る所である。唯だアダムスミスは人生の經濟生活を其の信條とする自由貿易主義の立場より科學的に説明を企てたといふことに於て所謂自然科學としての經濟學の基を開いたといふことは否めない。然れども是れ單に經濟學を開きしに止まり敢てスミスが經濟學自體を力説したるものに非ず、其の名著は所謂國富論にして其の内容は獨り人生の經濟生活に止まらず、保護貿易自由貿易等の國家の政策より或は更に財政等に至る迄論述せられて居る。而て是れ皆國家の政治問題にして尙國家のポリチックスの外を出でず、ポリチックスと對當獨立なるエコノミックスとしての研究で

はないのである。後世之を紹述せる幾多の亞聖大賢の士が所謂ポリチカルエコノミーとして初めて經濟の語を使用するに至りしと雖も猶ポリチカルなる形容詞の下に國家を基本とせる政治的範疇を超絶せるものとはいふことが出来ない、我國が所謂ポリチカルエコノミーを翻譯するに經濟の語を以てするに至りしも蓋し經濟が經國濟民なる國家政治の本領に着眼し國家の爲政家が如何にして國民の生活を安寧幸福に救済すべきやを知らむが爲めに國民人生の日常生活状態を研究するの學問となつて居るものである。

英國正統學派に依れば國家の富、國民の幸福は生産に在りとし以て從來の重金重商主義を攻撃し、國家の保護干渉を排斥して苟も國家が國民を經濟せむと欲すれば須く國民各自自己の利益幸福に最も通曉せる各人の自由に放任すべしと力説し、之を論證せむが爲めに人間の利己心なる根本前提の上に於て人生の經濟生活を解剖し以て自然科學としての經濟學を發生せしむるに至つたのである。

之に反對して生じたる經濟學説は云ふ迄もなく獨逸學派にしてリスト即ち之が先覺者たり。

此の英國學派と獨逸學派とは今日に於ても經濟學の二大潮流として甲論乙駁相讓ら

ざる二大學派にして前者を正統學派と呼び或は演譯派と稱し又後者は之に對し、歴史學派若くは歸納學派と名づけつゝある所に係り、其の是非は別問題とするも其の孰れに於ても相共通せるは即ち國家の政治學の一としてポリチカルの色彩を脱せず、所謂國民經濟たる點に存し、國家の經國濟民の任に當る爲政治家が如何にせば最も良く國民を救濟々度して鼓腹擊壤其の幸福を致して政治の本領を發揮し得べきやの内容に關する原理原則を説くものならざるはないのである。

所謂眞のエコノミーは政治學の本領とする其の内容の部分に關する範圍にして謂はゞ政治の目的又は原理に相當する處がエコノミーである。斯く觀じ來ればポリチカルエコノミーを經濟學と命名するも亦故なきには非るを思はしむるのである。而てエコノミックスといふ時は全く其の内容に於ける人間各自の經濟生活に關する學問知識にして之をポリチカルエコノミーと區別すべきはポリチカルエコノミーは國家を基本とし、其の國家の政治的立場より觀たるポリチックスなるにエコノミックスは斯かるポリチックスと全く獨立し、國家若くは國境に何等關係なく全人類に共通して人生各個人の日常營む經濟生活の内容に關する學問知識となすを至當とすべきことと思ふ。故に國家を單一なる個人とせば國家の營む經濟生活もエコノミックスの範疇に入るもの

にして之を國家經濟と稱し、之に對して我々個人の營む經濟生活を個人經濟と謂ふのである。而て前者を公經濟とすれば後者は即ち私經濟である故に國家の政治は我々個人の經濟等と同様に經濟即ちエコノミックスの對象となるべきものある道理にして國家經濟は通常國民經濟と相一致すべき筈である、何者國家は國民を經濟するを其の職分とするが故に成るべく最少の勞費を以て國民經濟の最大の効果を得むと努力すべきこそ國政に參與する人の忘るべからざる綱領なればである。國家の富は即ち國民の富にして國民の向上は取りも直さず、國家の向上である。故に國家經濟即政治に非ずとするも少なくとも國家經濟即政治の本質は即國民經濟となすも殆ど不可なかるべきを信ずるのである。故に國家の財政も國政の一方面たり、財政の收入支出其の適合を得たるの故を以て國家の經濟即ち終れりとなすべきにあらず、立法司法行政は國家政治の三大綱目にして、若し財政のみが國家經濟であることせば惡法を設け誅求苛斂國民を塗炭の苦に陥るゝも財政さへ其の收入支出を過たざれば國家經濟の目的を達したるものであるとなさねばならぬ。財政若くは理財と經濟とは同一に非るは既に述べたる所にして國家の財政(單に財政)即ち國家經濟であるとなす謬見は全く之を排除することを要するものである。

國家經濟は其の内容に於て政治の本質とする國民經濟を其の目的とするも所謂最少の勞費を以て最大の効果を收むるなる經濟の本領よりすれば國家の政治も此の要領に於て國民經濟の發達向上を促すこそ國家の經濟にして是に於てか政治學即ちポリチックスと經濟學即ちエコノミックスとは全く其の立脚點を異にしたる對當獨立の學問となるものである。故にエコノミックスは國家政治に關係なく一般人類が營む經濟生活を研究するを以て足り一國民を限界とせる各個人の綜合的傾向を察知し或は經濟をなす主體たる者が主觀的に營む經濟活動經濟行爲等を探究し、其の如何にせば最も經濟の目的に合致すべきや等を其の研究の對象とするのである。

是れ恰も彼の軍隊に於て陸海軍大臣の職責と、參謀總長若くは海軍々令部長の職責等と相異なるが如きものである。參謀若くは軍令部は唯だ戰爭に勝つことのみを攻究するを其の本分とし、若し敵と戰鬥を交ふる場合には如何にして敵に勝つべきやの戰術戰法、武器の操縱、軍隊の教練等に一心を専らにするものである。之を總稱して軍術又は兵學といふ。

之に對して陸海軍大臣は即ち國家のポリチカルの意義を存し、戰爭に對して國家の適當なる政策を施すものにして常に國內各武將兵卒の戰鬥狀態を觀察し、國家政治

上適當の方法を講ずるものである。故に他國と自國とを比較して軍備薄弱なる時は増加したり、餘りに強きに過ぐる時は無用の軍費を節約せむとして軍備の收縮を行ふが如き皆陸海軍大臣の任務である。此等は軍學や兵法にあらず、軍事に直接從事する軍人の職務と相異なるものにして一は兵學専門なれば古今東西に亘りて兵法の研究を怠るを許さず、茲に國境なきものなるも大臣の行ふポリチカルミリタリーとしては常に自國と他國との國境を明かにして他國の軍備狀態に注意を怠らざると共に自國の軍人の軍務狀態をも監督する必要があるものである。一國の政治は國民の經濟に存し陸海軍大臣も政治學の一人たる限り彼等は國民經濟の知識なき單なる武將のみにては大臣たる資格なきものである。軍備も戰爭も國民を經濟せむが爲めの手段たるべきものにして國民經濟上戰爭を必要とするに至りし時は陸海軍大臣は之を軍隊に命令するのである、其の命令を受けたる軍隊は即ち其の獨特の兵法を以て戰場に出て敵を征服するに力ひる、陸海軍大臣は戰鬥者に非るが故に自ら戰場に出で、交戦する必要なきも其の内容に於ては等しく軍學を知ると共に、一方國民經濟學を知らざれば國務大臣たる資格なきと同様に陸海軍大臣たる職責を全うし得ぬのである。

ポリチカルエコノミーとエコノミックスとの關係亦之に似たり、エコノミックス

スは經濟生活を營む各人の經濟戰術である。如何にせば最も經濟なるかを教ゆる學問である。物品經濟金錢經濟衣服の經濟燃料の經濟等皆エコノミックスの對象である。此等は其の經濟を自ら營む人々が各々獨特の見地に從て主觀的に定むるものである。然るにポリチカルエコノミイは國民の此等の經濟狀態を國務大臣として客觀的に觀察し之に適當なる政策を講ずるの學問である故に其の目的に於ては相違あるも内容に於ては自ら相一致し、國務大臣は國民が如何にして經濟生活を營みつゝあるやを理解せねばならぬのである。

經濟學に英國の正統學派と獨逸の歴史學派との二大潮流の存することは既述の如くにして其の内容も今茲に紹介するには餘りに周知せられたものである。所謂ポリチックスの立場よりすれば其の孰れを採るべきやを其の國情に最も適合したるものを選びこそ策の得たるものとせられつゝあるものにして、英國に於ては自由主義を原則とし其他の諸國は概ね保護主義を以て一國の經濟政策を樹立して居る狀態である。是れ兩學派が互に一國の政策として一面の眞理を有する故のにして國境なき學問の研究としては兩者各獨特の立場より學の眞理を認識せざるを得ざるものにして一を以て他を誤れる學問であると斷定するを許さざるものである。

獨逸學派に依れば經濟に法則のあるべき筈なし、英國流に演繹的に下したる斷定は事實に於ては空論にして適合するものを見ずといふに在るも、是れ自然科学當然の性質にして科學は事實之が人生に利用あるや否やの學問にあらず、學問は學問の世界にして事實人生生活に役に立たざれば科學の資格なしといふは科學を侮辱するものである。事實人生には毫毛の實利なしと雖も科學は科學として微に入り細を穿ちて深遠窮る處を知るべきではないのである。加之經濟には法則なしと主張するも若し此の説を以てすれば凡ての自然科学を破壊するものにして自然科学の何たるを理解せざる者の言である。自然界の法は社會の法律と異なり其の法は自然の傾向の意なること既に法の説明に於て詳論せし所にして、他に之を妨ぐる何等の事情なき時は其の物の性質として自ら斯くなるべき傾向あるといふことが自然の法則である。又數學に於て平面といふものがある。數學上に所謂平面が實在せるや否やは數學に於ては關する限りではない、然れども平面の如何なるものなるやの前提を與へたる限り其の理論は科學としては永久の眞理として他の何物の非難を容れぬのである。而て人生生活に於て其の前提に合致せるものがあらずば實際に利用せらるゝこともあらう、又利用せらるれば結構である。然し實際に利用せられずとも數學は其の生命を失はるべきものではないので

ある。經濟學亦然り、苟も經濟學を一の科學として其の存在を認定せむ限り、其の前提より合理的に演繹せらるゝ法理が自然界に於ては所謂傾向として理論の正當なる限り事實は敢て之を問ふ必要がない、理論の正當なるは事實の正當なることを示すものにして理論は正當なるも事實は然らずといふは其の理論以外に更に他に之を妨ぐる或る理論のあるが爲めにして若し其の事情のなからむか或る物は自ら斯くなるべき傾向を有すといふ科學法理は決して之を否定するを許さぬのである。故に英國正統學派が財貨の經濟價值を其の物の生産費によりて測定せらるるといふに對し、之に難辯を附する輩は之は自由競争に於てのみ然り、事實は然らずとなして得々たる如きも事實生産費に近づく傾向を有することは否定することが出来ないのである。

加之右は自由競争場裏に於てのみ見らるるとなすは未だ其の眞意を解せざるもの言にして英國正統學派は自由競争を其の理論の根本的基礎とせるよりする當然の原理たり、千古不朽の英國の學者が之れ位の事實を知らぬ程の愚人でもあるまい、事實生産費と價值と一致して居らぬことは百も二百も承知して、扱て若し之を自由に放任せば自ら其の競争の結果生産費に接近する傾向を有すとなせるに止まる。

惟ふに正統學派は國民を經濟するの道は國民の自由放任に在りとし人生の自然放任

の經濟生活の純理傾向を説くに専らなりしに歴史學派は自由放任の不可なるを論して時々刻々の國民の生活状態を調査し、之に適當なる保護政策を加ふべしとなし、現實の經濟状態の分類調査より其の大量觀察を試み其の一般の傾向を察知し之に如何なる政策を施すべきやの方面の研究に其の特色を發揮するに至つた、此の兩者の正否は兩者共に一面の眞理ありとして、自由貿易と保護貿易とは説の正否にあらず、要は適用の如何に在りとなされつゝあるも、右は國民經濟政策としての政治的觀察にして純正經濟學としての立場より見れば演繹と歸納とを兩者相並行せしめて法理を成し得るものなれば兩學派の研究方法を併せ行ふに非れば完全なる經濟學を構成するに至らざるや明である。

尙此の外に埃國學派なるものを説き此の學派は英獨兩國の中間を行く最新にして最も穩當なる學說なるかの如く教ゆる學者がある。然し若し英國學派と歴史學派とか孰れも兩極端に過ぐる時は眞理は中庸に在りとなし、之を折衷したるものが最も中正を得るに至らむも英國學派獨逸學派孰れも獨特の見地を以て前者は經濟學中自然科學方面に進み、後者は歴史科學の方面に力を注ぐものにして其の論據孰れも誤にもあらず、過度にもあらず、夫々價值を有する經濟學の二大分野である、若し之を折衷せむがその

折衷せられたるものは混血兒の如く、曖昧模糊として頗る徹底せざる旗幟不鮮明のも
 のとなつてしまふのである。埃國學派を謳歌する人は或は英獨兩學派が孰れも極端に
 失して其の中庸を得ざるものと考へて居らるゝのかも知らぬが自分は飽く迄も英獨兩
 學者の偉大なる學識に信頼し、濫に我々末世の輩に易々と非難せらるゝ如きものでは
 あるまい。又埃國の學者と雖も必ずしも之を折衷したものであるまい。或は正統學
 派は演繹主義に傾き歴史學派は歸納主義の偏すとなさむも是れ兩學の本來の性質ト當
 然の論法なるのみならず、英國學派の根本條件とする利己心なるものは一般人類の性
 質を普く通觀して歸納し得たる結果に外ならず又獨逸學派と雖も國民經濟狀態を大量
 觀察して之を歸納するには更により幾多の政策を演繹する爲めのものならざるはない
 のである。但し埃國派の特質となすべきは英獨の經濟學がポリチカルエコノミーとし
 て國家の政治學に屬するものなるに對して、所謂純正經濟學即ちエコノミックスとし
 てポリチックスと對當獨立なる學問を立てし事である。故に埃國學派には何等政治的
 色彩なく一般人類に共通なる人生の經濟生活に着眼し、之を主眼として以て之が原理
 原則を修めしものではあるまいかと思ふのである。從て正統學派とは精神目的は相違
 あれども其の論究する内容及研究方法は孰れも人生經濟の法理の研究にして兩者相合

致せるを見るのである。

我が所謂純正經濟學はポリチカルにあらすポリチックスと全く獨立なるエコノミッ
 クスの原理を攻究するものにして經濟科が法科より獨立せる經濟の原理である。
 埃國學派を最近の經濟學となすも蓋し其の理由茲に在りて存するものと思ふ。

第四章 經濟主體論

第一節 總 說

茲に經濟主體とは經濟を行ふ人を謂ひ所謂生活を營む人を指すものにあらず、生活
 を營む人は即ち人生を享樂する吾人人生を謂ひ單り人間のみなならず、動物植物等凡ゆ
 る生物は、苟も生物として現存する限り、自己の慾望を満足せしめつゝ生を此の自然
 界に送りつゝあるものである。故に吾人は生活しつゝあるの故を以て、凡てを經濟主
 體と看做すことが出来ない、植物動物には、經濟生活を營みつゝありとも覺えず、
 瓜々たる乳兒乃至狂人等が生存し、生活しつゝある事實は之を否定し得ざるも此等は
 又經濟生活を營むの類にあらず、從て此等は經濟主體たる者にあらずして、經濟主體

たる者は人生を經濟する人を意味し人生は即ち生活者にして此の生活者の要する費用を支辨し以て其の生活を維持して呉れる人格者である。故に例之一家族には多數の生活者あるも此等は其の家の經濟主體にあらずして此等の家族の生活を維持せむとする例へば戸主が其の家の經濟主體である。

經濟主體は經濟の基本となるべき人にして、凡ゆる經濟は此の主體に歸納し、此の主體より演釋せられて經濟學の對象となるべき人格者である。即ち經濟學は經濟主體の意思目的行爲等を研究すべきものなると同時に此の經濟主體の爲めに其の知識を供給し以て之に利用せらるべき學問に外ならぬ。

、經濟する人とは之を詳言すれば、人生の經濟を目的とする意思の主體にして、意思は既に説明せし如く心の或る一定方向に對する運動なり、心の運動は即ち心臓の活動にして意思は其の血液の流るゝ方面となり、其の血液の流るゝ邊には精氣を與へ神經に對しては知覺となる、而て知覺は感情の判斷によりて快、不快、又は苦樂の情緒を發し茲に慾望となり更に新なる意思を發することとなる。要之意思は自己の存在なれば經濟意思といふは經濟を目的として自己を形成する人である、是に於てか經濟を以て自己を形成する意思は自己の法にして、即ち自己は經濟なる憲法に依りて組織せられ

經濟に反して何事も爲し得ず、又經濟の憲法の規定する所、之を實行せざるべからざる義務を負担して居る、故に經濟主體は經濟以外に對しては全く死物たり、少なくとも經濟の法によりて自己の存在あり、茲に自己は形成せられて之に違反することを許さるゝ者である。

經濟の法といふは即ち最少の勞費を以て最大の効果を收むることを謂ひ、此の法に依りて形成せらるゝ意思主體之を經濟主體とは稱するのである。

此の法は經濟主體が自ら認定する所に係り、他の何物に依りて強制せられざる全く自己自身の意思として此の法の下に自己を形成する者は自ら經濟主體となり、自ら經濟を營み、又自ら經濟に違反するを許さざるものなれば其の法は自己の主義にして之によりて自己は拘束せらるゝとき即ち是れ自律的關係である。

故に他人の所有物を無斷にて取るは他律的に不可能である、或は窃盜と稱し、強盜と呼び此等は社會の法に依りて不可能である。然し他人が一圓にて賣る物に自分が二圓を拂ふといふことは社會の法の禁止せざる所である、然し一圓にて賣る物に二圓を支拂ふは最少の勞費を以て最大の効果を收むるなる經濟主體の憲法に違反するが故に自己は自律的に支拂はないのである。此の自律的不可能は行爲としては不作爲にし

て換言すれば意思を起さぬことである。即ち一圓に買へる物に二圓を支拂ふといふ意思は生じないのである。此の經濟主體が此の自己の法に悖るが如き場合を不經濟と稱し、不經濟なるものに對しては經濟主體は經濟せむとする意思を發せざることとなるものである。

經濟は餘利益又は單に利益といふことなれば不經濟は損失といふことになる。經濟主體は利益を目的とする人にして損失明なるものに意思の發せざるや當然である、幼兒狂人の類は或は一圓のものに五圓や十圓を支拂ふやも知れざるも此等は經濟主體たり得ざる者である。

從て經濟主體たり得る者は利害の判斷を明確に認識し得る人にして自然人に就て云はば理性と智識とを具備せる人でなければならぬ、理性は意思を監督する機關にして智識は其の利害を判斷する機關である。而て此の利害を判斷し得る能力あれば其の人は經濟主體たる資格を有する者にして、我國に於て法律上意思能力を有する者と規定せらるゝものは經濟主體たる資格を認定せられし者である。未成年者、禁治産者の如きは利害の判斷能力なき者なれば彼等は未だ完全なる經濟主體ではない、但し之は法律上の規定なれば事實は必ずしも然らず、二十歳以下の未成年者と雖も一圓を得ると

二圓を得ると孰れか利益なりやは大抵之を知り得る所にして此の知り得るに於て其の人は經濟主體たる資格あり、故に茲に經濟主體とはいはば先づ利害の判斷能力を有する者であることを根本的前提として置くのである。

如斯經濟主體は最大の勞費を以て最大の効果を收むることを自己の法として以て、自己を形成する者なれば其の自己的關係に於て主義となり、茲に學者は此の標語を捕へて或は經濟主義と呼び或は經濟生活に於て準據すべき經濟の法則と稱するも是れ決して經濟の法則なるにはあらず、其の事自體が即ち經濟にして此の法則に従はざれば經濟とはならないのである、即ち不經濟なのである。唯だ此の經濟を自己の主義となすによりて其の自己たる人は經濟主體たる人格者が構成せらるゝのみ、而て此の法則を應用して以て諸般の行爲を作すときに經濟的といふのである。即ち物を節約して使用する場合に使用する語にして茲に經濟は節約と相通するのである。

故に經濟主體は自ら節約せざるべからざる義務を負擔するものにして、通常經濟家とは此の節約を自己の性格となす人を謂ふものゝ如く經濟主體は節約を自己の主義となす者を指すも不可ないのである。而て節約すべき義務を負擔する反面には節約し得る權利を有し、苟も經濟を主義とする限りは無用の煩惱の爲めに費用を投ずるを止め

以て其の煩惱を抑壓し得る力があるのである。

其の如何なる場合に如何なる物を節約すべきや、又せざるべからざるや、又如何にして節約すべきやは智腦の判断にして經濟學は此の知識を智腦に供給すべき職分使命を有するものなるを以て來た經濟知識を有せざる間は知覺なる精神現象を缺き從て現實に理性は意思を發生し得ざるものなるも、苟も智腦は經濟の意義本質の何たるやを知覺し、而て理性が之を取りて以て自己の主義とし、自己の心の發動たる意思の準繩とせる智腦の進言輔弼する處に則りて不經濟と認定するものは決して意思として發動しないものであるいふ前提を豫め承認して置いて貫はねばならぬ。而て劈頭に於て經濟とは最少の勞費を以て最大の効果を收むるものであるとの一の經濟の知識を知覺し之を自己の法と自己の意思として經濟主體を形成せるならば此の精神は宇宙と共に無限大にして、此の意思の存する限其の人は經濟主體として平面的立方的宏遠無窮永劫に存續すべきものである。

經濟主體は經濟を目的とする意の主體なれば苟も經濟と認めたるものは必ず、之が意思を發し不經濟と認めたるもの不經濟なる意思の發生すべき道理なきは理論上當然の事理なるも此の意思は自己の知覺の判断に須つのみなれば此の知識の不足、過失

不注意、怠慢、誤認等によりて不經濟の結果を惹起すること多きは人の知る所である之が爲めには經濟主體たる者常に經濟知識の吸収に努力する外、常に知覺に精氣を與へて寸時の怠慢をも許さぬのである、知覺に精氣を與ふとは常に知覺神經又は腦髓を活動せしめて休止せしめざることにして、即ち理性が之に血液を注入せしめることである。注血は即ち意思の力なれば普通之を注意といふ注意とは知覺神に生氣ある血液を注ぎて活動せしめ過失誤認等のなからむことを期する精神的活動即ち心勞である。過失怠慢等の爲めに生ずる不經濟は自己の不注意怠慢にして自己の責に在るは勿論、知識の不充分なる爲め鑑定の錯誤、計算違ひ等は其の根本は智腦の責任なれども等しく自己の負ふ所である。

第二節 經濟主體の分類

第一項 公經濟、私經濟

經濟主體は其の何人を經濟するやの目的に依りて公經濟主體と私經濟主體とに分類することが出来る。而て前者の營む經濟は公經濟にして後者の營む經濟は私經濟である。

由來公經濟及私經濟の別は其の主體たる人の形式上公人なるや否やの區別に依るもの、如く、而て公人私人の區別は専ら國法上の公法私法の別に則り國家及自治團體乃至此等の機關に従事する人は公人にして、通常一ケの國民として生活する人々は皆私人たるものとし、從て國家自治團體の營む經濟は皆公經濟であり、我々の行ふ經濟は私經濟であるとなすもの、如し、此の見地に於て國家の財政は國家經濟にして即ち公經濟であるが、我々の生計は私經濟となるものであると論せられて居る。

財政や生計と經濟と同一に非るは既に述べたる所に依りて明白にして國家の財政即國家經濟にはあらず、法律上公人が營む經濟なるが故に其の經濟は公經濟であり、法律上私人が營む經濟たるが故にそれは私經濟であると解するは經濟學を律するに法律を以てするものにして許すべからず、經濟學は經濟の經濟學にして法律の經濟學にあらず、經濟學に於ける公人私人は經濟學の分類に従ふべきものにして政治や法律等によりて左右せらるべきものではない。

是の故に國家の營む經濟の中にも私經濟あり、吾人の營む經濟の中にも公經濟があるのである。其の區別は經濟主體が公を經濟する職責を有して成立するものなるや單に私を經濟するのみを以て、其の目的とするやの區別である。

公とは普通多數の人といふ意味にして、單に自己のみに非るを謂ひ私とは個人と殆ど同意義にして他人に關係なき經濟といふも敢て不可ない、從て最も具體的に云へば他人を經濟する目的を有する經濟は公經濟であり、自己を經濟する目的を有するを私經濟とするといふも差支なからうと思ふ。

但し公人私人は法律上に於て一般的に認識せられありて、其の人が公なりや私なりやによりて形式上區別せられ、國家の法律は國家及自治團體及此等の機關としての地位に在る者は其の地位に於て公人とし國家や自治團體は公の仕事をするを其の目的とし其の名に於て行ふ人は最早私人にあらず、其の人は最早國家たり自治團體たる資格に於て行ふ者なれば其の人は其の名に於て公人ともなり私人ともなる。而て國家を以て公法人であると認定するときは國家は悉く公の性質を有し、國家の營む經濟は又公の爲めの經濟にして之を公經濟とすべく、國家自治團體等に關係なく我々個人々々が自己の家族等を經濟する時は是れ私經濟であるとなすは形式上に於ての便宜の分類であらうと思ふ。

然れども國家は單一なる意思の主體にして國家は國家の國家である、國家の行爲は國家自身の私の行爲にして、國富は國家の私有財産たり、之を大きく世界人類の

國際社會に就き見るときは國家は一の私人である。大日本は大日本の私益の爲めに存在し、他國の爲めに存在して居るものではないのである。故に政治的に觀察すれば國家は私人たるに相違なきも國境を認めざる一の自然科学としての經濟學上よりすれば國家は一私人として、私經濟行爲を營むことを是認せざるを得ぬのである。故に今假に露國が露國といふ國家の名に於て支那に盛に投資を行なひ營利事業を企つときは之を我國より見れば露國を國際社會に於ける一の私經濟主體と認めざるを得ず、故に支那に於ける我國の企業家は露國といふ一の私經濟主體と對當の地位に於て經濟的に競争を行はねばならぬこととなるのである。

唯だ普通の觀念としては國家は一の政治團體にして、政治は國民を統治することを謂ひ、茲に國民といふ多數の人の公益を目的とし其の多數の國民の爲めに國家なるものが存在しつゝあるものといふ見地より國家を私人とし國際社會法も之を國際公法なる名稱を與へて居る。國家の行ふ官營事業自治團體の行ふ官營事業の如きも皆營利的意義を帯び損失ばかりすれば値段を上げ値段を上げて客がなければやめてしまふが如き全く普通の企業と異らざるも其の餘利利益は皆舉げて之を公衆の利益の爲めに費すものであるといふ點よりして之を以て公的事業として居る、此等は國家とか自治團

體とかを其の本來の性質上公物と看做すに依るものである。

國家が公物であるといふは國家が國民經濟といふ大なる公の仕事爲すことを謂ふものにして、國民經濟を圖るは國家の目的なれども國家の經濟には非ず、國家の經濟を行ふものは國民全體にして、國家の名に於て行ふ政治機關例之政府とが議會等の政治を行ふ機關が直接國家の國民經濟といふ仕事の爲めに公經濟を行ふのである、此等の人々の中には私利のみを逞しうし、公經濟を行はざる者もあるが、眞の政治家は其の財政上に於ては國家なる公の爲めに公經濟主體として、私利を營むことを許さぬのである。

或は國家と國家機關とに於て實際上何の差異がある、此等の機關は常に國家の名に於て財政事務を行ふものなれば其の仕事爲すものは其の機關の官吏等なれども實際に於ては國家が主體であると云はむも、是れ形式に囚はれたる誤謬にして國家の財政は之を國家より見れば國家の一部分である。國家は公物なりと雖も國家自體が其の私有物を經濟的に利用するは皆國家といふ單一なる意思主體の私益にして其の私益は實質上に於ては國民の利益といふ公の性質を有するには相違なきも國家は國家の自己也、國富は國家の私有財産にして、國家なる單一なる意思主體より見れば是れ私經濟

である。唯だ國家の機關が國家といふもの、私有財産を處理する者なるが故に此等の官吏が公經濟主體として活動すべきものである。即ち此等の機關が國家の名に於て國民經濟といふ仕事を行ひ、而て之が爲めに要する諸費用を國民より取立てる業務を財政といふものにして、其の内容に於て最少の勞費を以て最大の効果を收めむとする心懸けば此等の機關に任する人々が國民公衆の利益の爲めに常に胸に懷いて忘るべからざる所のものである。

要之公私經濟の區別は或る經濟主體が他人の經濟の爲めに自ら經濟を行ふと自己自身の經濟を行ふとの差あるものにして社會は私人の集合なるよりして、經濟社會の基礎は私經濟を以てすべきを至當とすべきものである。而て公經濟は此の他人の私經濟を自己の職務として其の仕事を行ふことにして其の代表的なるものは國家である。國家は國民を經濟することが其の職分たり、而て國民は夫々の私經濟なれば國家は此の國民の私經濟を計ることを自己の目的として存立するものにして、國家の官吏就中君主大臣等は一面自己の私經濟を行ふも國家の官吏としては國民の經濟を其の對象とし以て其の職務を盡すものである。獨り國家のみならず、通常我々の生活に於ても吾人が他人の代理に於て或る仕事を爲すときは其の委任したる人の經濟を自己の職分

とし其の仕事に於ては自ら經濟主體たるも雖も其の内容に於ては他人の利益なることを顧慮すべき責任あるのである。於是乎自己の所有する金錢と其の委任を受けたる仕事の爲め他人より其の費用として預けられたる金錢とは混同することなく茲に公私の別を明にせねばならぬのである。

公經濟の主體と私經濟の主體と經濟上其の性質を異にするは私經濟に於ては其の經濟主體が一定の經濟に就き自己が最高獨立の主體にして一切の責に任じ、從て他人より自己の經濟意思に何等の干渉を容るゝを要せず、全く自己の利害判断に依りて一切を支配し得るに反し、公經濟に於ては自己と同一の地位にある他の經濟主體の獨立を尊重し、他人の財を愛惜することに在りて存する。

私經濟主體としては單に自己の自然的肉體のみに止まらず、自己の家族より隣人同郷同國乃至四海同胞として他人を經濟することあれども此等は皆自己の眞の敬愛の情より發するものならば皆自己の存在にして此等を經濟すると否とは全く自己の自由判断であり家族の者に飯を食はさうと食はすまいとは戸主の自由に屬し、家族を扶養することがいやならば何時にても戸主たる地位を自由に抛棄することが出来る、況、貧

民救済とか慈善事業とかの目的にて慈善音樂會を開催し、商品市場を出す等の營利行為も倫理上は利他なれども經濟上に於ては私經濟にして其の目的は他人に自ら慈善を施さむとする博愛心より出で、其の救済せられる相手方を獨立の經濟主體として其の命令監督によりて經濟を行ふものではないのである。即ち私經濟主體は自己の經濟に就きては天上下唯我獨尊にして自己の上に更に他の經濟主體の獨立を認むるものではないのである。

然るに公經濟の客體は其の主體たるものが、自己の上に他の經濟主體の存在を認め之を尊重するものにして自己には經濟なれども一般他人にとりて不經濟なるが故に自己の利益を犠牲にして他人公衆の經濟を尊重し、又自己には利益なれども他の經濟主體には不經濟なるが故に其の他の主體の獨立を敬し、其の財を愛惜するものである。

公經濟に二の場合あり、一は共同にして他は機關である。共同は或る一定の經濟を得むために數人の經濟主體が互に其の獨立を維持しつゝ其の共同の目的に歩調を一にし協力するものにして夫婦共稼ぎの如き、其の共同の結果得たる利益は夫婦が一定の割合にて分配することになせる時は所謂共同經濟にして、此の場合には私經濟主體の共同にして互に我利の外に利他を圖らねばならぬ。故に自分に都合悪くなる時は夫

は妻に構はず、妻は夫の意思に不拘自己の利益の爲めに離散するが如きは公經濟の主體もなく客體もなし。

機關は或る一定の私經濟主體の仕事に或る他の一定の私經濟主體が従事し、其の仕事に就ては主たる人の仕事の従として之を完成を爲すことを條件とするものにして形式上公私經濟の區別は這間に其の發生を見る。此の際其の仕事の主たる人も従たる人も共に私經濟主體にして互に我利である。而て一主體が他の機關となるは自己の經濟上の目的の爲めの手段たるものである。而て之が主たる人は、其の機關の手段と見る所のものが自己の目的たるものにして互に其の着眼點に相違あるも其の結果に於ては同一なるが故に茲に兩者が私經濟主體たる地位に於て又相互間に於て離るべからざる關係を存するを見るのである、故に機關たるものは其の仕事の主たる人の利益が其の手段なれども此の人の經濟を圖るときは結果に於ては自己の利益となり、茲に相手方の私經濟を尊重せねばならなくなる。又主たる人も其の機關を敬愛し、其の仕事に忠實にして呉れるときは自己の利益となるが故に其の機關を敬愛するは自己敬愛の手段なれども其の目的上機關の敬愛を怠つてはならぬ。即ち互に利己の手段としての利他となり、斯くて公經濟の存在を維持とを認め得

らるゝものにして兩者は私經濟と共に公經濟の主體たり、而て其の相手方の私經濟は其の客體にして茲に公私は同一人に歸し、公私の混同を許すべからざることをなるのである。

第二項 個人經濟、團體經濟

經濟主體が單一なる經濟主體より成立する場合には是れ個人經濟主體にして、經濟主體が集まりて一個の經濟主體を組織し之に對して各個人が經濟意思を結合し、一定目的に對する經濟主體たる地位を失ふに至る場合、其の集合せられたる經濟主體は是れ團體經濟主體である。而て之は形式的分類といひ得べきである。

個人經濟主體は經濟主體の基本にして此等の個人か或る目的を達する必要上若くは利益上團體を組織するに至るものである。如斯にして成立せる團體は又單一個人なる意思を有し、此の團體意思と其の分子を成す各個人意思とは全く別物にして其の經濟上の利害は必ずしも共通するものに非ず、是れ人の周知する所である。

但し之を以て通常の觀念に於ける個人と團體と同一に看てはならぬ、我々の人生生活に於ては吾人は幾多の團體を組織して居る。學校に於ては校友會とか同窓會等あり

地方に於ては縣人會の如きあり、其他幾多の會とか組合とかを組織して協同の動作を行つて居る、國家は此等の契約に依る團體と少しく趣を異にするも國家は國民の團體であるとは法律學者の説く所である。此等の團體は一個の意思主體たるには相違なきも此等は一個の意思主體たる上に於て普通の個人と異なるなく法人は法律上の人格者であるといふは此等の團體は法律上に於ては我々と同様に一個人たるを示すものである、而て此等の團體を組織する各員が總て經濟を目的として組織するものならば其の團體は團體經濟主體である。

或る國家が租税を取立て會が會費を徴收するは國家や會の經濟ならずやと考ふる人もあらむも之は消費經濟又は財政にして國家が税金を取立て會が會費を集めるは是れ國家や會の當然の仕事にして、國家は税金を以て成り立ち會は會費を以て維持せらるゝならば國家や會は其の費用を徴收するは其の當然の義務である。國家が税金を取り立て或は會が會費を集めたとして之を國家や會の經濟行爲であるとなすべきものではないのである。

團體が經濟主體たるに二あり、一は非經濟團體にして是れ亦單一なる意思組織を有する限り經濟不經濟の價值判斷を有するも積極的に經濟的活動を行ふを目的として

成立せるものではないのである。然れども臨時積極的意思を懐くことがある。例之野球倶楽部がグラウンド設備費に充てむ爲め特に野球を催し、入場料を徴収するが如き是れである。今日學生連の野球にも高い入場料が取られる。其の取る目的が若しグラウンドの設備や野球器具の購入費や選手の生活費等の爲め其の野球競技を行ふ時は立派な經濟行爲である。然し事實野球選手は野球を賣物に勞動としてなす譯であるまいから如何に多額の入場料を取るも別に經濟行爲ではあるまい、然れども是れ經濟なることは事實にして非經濟團體たりと雖も一個の意思組織を有する限りは經濟意思を有するに至るは争ふことが出来ない、唯だ非經濟團體は經濟を目的として繼續せられしものに非ることにして其の組織の動機は經濟以外の他の目的を有し、此の目的の爲めに經濟意識を具備し、經濟上の價値を辨別し得るものにして、此の見地に於て右非經濟團體も其の價値判斷に對しては一個の經濟るので主體となるのみならず、時には團體の意思を以て積極的に營利行爲に出づることもあるのである。

之に對して他は經濟活動主體とも稱すべきものにして普通に見る營利會社の類是れである。此等は經濟を行ふを目的とするものなれば常に積極的に經濟活動を行ひつゝある。尙此の種の經濟團體に就きては後述經濟活動論に於て更に説くことにする。

第五章 經濟客體論

第一節 總 說

經濟客體とは經濟主體を主格とせる目的格に相當するものにして經濟主體が經濟すべき相手方を謂ふ、而て其の相手方たるや人生にして人生を經濟することが經濟主體の任務である。而て人生に就ては既に經濟基礎論に於て説明せし所なるを以て今復た茲に之を贅せず、人生を經濟すとは畢竟するに人生を幸福ならしむることにして現代的の語を以てすれば其の厚生(Well-being)に在り、其の塗炭の苦を救ひて安心立命、鼓腹擊壤、泰平を謳歌せしめ其の文化の進運を期するに外ならぬのである。

從來の經濟學は慾望と共に財貨なるものを對象とし、而て財貨は物質であるとなし或る甚しきに至りては物質以外の諸文學、諸藝術等は餘りに範圍廣般に失して却て經濟を漠然たらしむるが故に之を除くといふ暴論を敢てする者ありと雖も此等は孰れも

大なる謬見にして經濟の科學的對象は必ずしも物質のみと限るべきにあらず、物質は大自然の存在の一の構成要素にして物質なくして自然なく自然の變化は悉く物質に外ならずと雖も物質のみを以て科學の總てとあると解すべからず、空間あり、時間あり此等は決して物質にあらずして而かも空間及時間の人生に及ぼす所少なからず、經濟は人と法との關係にして決して人と物との關係のみにあらず、又此等を經濟の範圍外に除き去るとせば事實經濟學をして殆ど人生に價值なからしめむとするものである。或は經濟は人の生活を維持するものとせば、人の生活は衣食住の物質にして此の衣食住の満足さへあれば經濟は其の能事即ち足れりとなすことを得べきにあらざるも衣食住の満足は唯だ生きて行くだけの満足にして生きて行く丈けが決して人生にあらず、尤も人によりては生きて行きさへすればよいと思ふ人もあるも生きて行く丈けが、人生なれば人生亦禽獸と擇ぶなきものである。人はパンなければ生活し得ざるもパンのみを以て生き得ざるものなること亦否定し得ざる事實である。

第二節 經濟的慾望

惟ふに經濟主體の目的は經濟に在るや勿論にして換言すれば經濟的慾望の満足とい

ふことが其の對象物でなければならぬ、經濟的慾望は最少の勞費を以て最大の効果を收めむとする慾望にして常に自然並に社會の現象を觀察し、此の法理に違犯する所あらば直に之を調節して以て差引餘利益を獲得せむとする處に自己の存在を維持しつゝあるものである。

此の利益といふは或は之を以て生活の手段に充て或は舊債を辨濟し、或は社會的事業に投じ其他人生諸種の目的を遂行する上に於て經濟主體が能く適當の材料を支給して目的の實現に努めしめ其の跡始末を爲して人生をして支障なく其の目的に向上せしめ享樂せしめたる程度である。故に此利益なければ人生は何等の向上のなきを示す、向上なきは進歩なきを示す。生活に必要な利益を得て生活す、此の生活を經濟生活と稱するものにして利益なくして生活しつゝある者は所謂穀潰し若くは脛嚙りと稱せらるゝの徒である、學生の如き多くは父兄に依りて經濟せられつゝあるものにして若し父兄よりの仕送りか杜絶すれば自ら經濟を営まねばならぬものである。

生きむと欲するの努力、之は生の執着である。土地を耕して農作物を收穫し食料を得、衣服を得、住居を得て自己の生活を支持す、人之を以て經濟生活と呼ぶが如しと雖も、是れ唯だ生きる丈けの手段と講じたるのみにして經濟といふべきものでない、經

濟をせずとも生活が出来る、然し經濟して生活する處に經濟生活があるのである。伯夷叔齊が蕨を採つて生命を繋いだ、然し生きて居るから生きる、金もなければ死にたくもなし、生きて居るに相違なければも之のみを以て經濟生活とはいふことが出来ぬ、經濟生活は利益を得て生活する所がなければならぬ。而て其の利益といふ觀念が經濟である、利益は價値の増加ともいひ經濟學に於て生産ともいふ、生きて行くから經濟にあらず、法を運用して利益を擧げるのに經濟がある。土地の自然の状態に於て果實を食ひて生きても經濟にあらず、土地を耕作し種子を蒔き其の土地の價値を増加せしむることに依りて經濟現象を見るのである。斯の勞費を拂ふは蓋し土地が悪化し貧乏となり、人間が自然の儘にては不自由となりしが故に吾人は法を運用して土地の價値を増加し之を自己の生活享樂の用に供するに至るのである。或は又秋の收穫を保存して冬籠りの用に供する處にも經濟あるものにして、之を宵越しの金を使はぬといふ者に比すれば經濟と非經濟とが區別せられるのである、斯かる時による法の運用は時間的價値の増加と稱せられるものであるが秋の收穫を冬の用意に充て以て價値を増加し人生の幸福を増進するといふ處に經濟が在るのである。

經濟的慾望は此の利益を生産せしめむとする慾望にして此の利益が生活に享樂に其他如何なる形式を取るとに不拘苟も人間が自然の状態に在る法を巧に運用して以て其の幸福を増進せしめ或は不幸を減殺し斯くて人生をして自己の實境に資し得せしめし程度を以て經濟を得たりとなすのである。是の故に經濟不如意とか經濟的不可能といふは決して生活難とか生活不可能といふにあらず、利益がない、又は利益を生み出すことの出来ないといふことである。

尤も消費經濟と稱するものあり、然れども右は生計、家計、理財、財政等の方面に於て現實に存在する財を消費する際に行ふに最小の勞費を以て最大の効果を收める經濟の法を以てする場合にして、或る事を爲さむと欲するにも之が爲めに適當の手段を缺き之が爲めに目的を遂行し得ない時に所謂生活難財政難を生ずることになり、之を一家の經濟不如意とかいふやうになつて居る。

然れども消費といふ觀念が既に經濟の觀念である、即ち消費といふ經濟現象に於ける經濟觀念が消費經濟にして、之に對しては主として節約の語が行はれ財を消費する際に能ふ限り節約を旨とする觀念が消費經濟の法とせられ、節約せらるゝ丈け利益となるのである、而して右經濟不如意といふは普通貧乏になつて買ひたい物も買へない状態をいふのであるが然し之を經濟的に云へば儲からないから經濟が出来ないのであ

る。即ち思ふやうに金が儲からぬのが経済不如意であるといつても毫も差支ない、唯だ此の觀察は消費経済と異なる資本経済の觀察であるが吾人は實際一文も金を現有して居る必要がない、金がある時此の金を儲けて行きさへすれば事缺かぬのである。生活難は消費財政の方面より云へば金の缺乏であるが根本的に経済主體より觀察すれば世の中が不景氣で思ふ通り金儲けがないから不如意となるのである。故に生活難は生活に要するだけの手段を儲け得難いことを指すといつてよいのである。

此の利益は経済主體が自然の物質並に社會の存在を自己に對して最も合理的に運用し以て價值なき物を價值あらしむるのである。價值あらしむるは價值あるが故にあらしめたるものにして、即ち最少の勞費を以て最大の効果あるが如く、自然、社會及人生の法の運用を行ひ能く之を調和することによりて利益を發生し以て人生の新なる幸福を構成せしむるに至るのである。

最少の勞費と最大の効果、右は唯だ自然を相手とする孤立の状態に於ては自然を开拓することが自己の开拓を意味する、之は事實の法の然らしむる所である。然るに社會生活に於ては社會を开拓することが間接に自己の开拓として反射せられる。而て吾人が自然と孤立の生活をなすよりも社會生活を營むことの遙かに幸福にして

有利なることは敢多言を須たぬ、然るに吾人が社會生活を營む上に於ては社會の法の羈絆を受けて居るのである。吾人は此の法を犯すことが出来ない、之を犯す時は社會の破壊となりて自然の無政府孤立状態、腕力主義に立ち返るのである。然れども此の交際社會に於て人と人との調和を圖り最少の勞費を以て最大の効果を收むる如く社會を調節按排する時は社會に利益の發生となりて其の利益が自己に報いらるゝことになるものである。従て自己が社會的に何等生産する所なければ自己の經濟を得ず自己の經濟を得むとすれば須く社會の經濟を營むことにして、他人に利益を與ふる時に自己か又他人より利益を受け以て社會の共存共榮をなすのである。是れ社會の法の運用にして此の運用を巧にする時は社會の法が却て自己に權利たる地位を以て得し、之に依りて人生自己の生活が行はれるといふ結果になるものである、現代の經濟は此の社會生活に於ける經濟を主眼としつゝあることは今更申す迄もない。

而て利益とは利を増すの意にして、神様の御利益りやくともいふが如く何物かのお蔭にて與へらるゝ善の觀念である。即ち利とは目的に役立つ手段の觀念を有し、之を逆に云へば之によりて人生の幸福の程度を増加せしむるものである、換言すれば或る物件を所有すると否とによりて幸福が加はり又は減するの作用が利益又は損失である。

或は之を經濟上の効果効用ともいふことが出来るのである。

此の利益に就き前記の自己と社會との相違に於て二様の區別を設ける必要があるのである、それは經濟主體が社會經濟を行ふ上に於て當然同一視すべからざる所のものである。

甲、客觀的利盆

客觀的利盆とは或る物件が社會他人に對して、現實に與へつゝある利盆である。故に社會に於て經濟を行はむとする者は此の現實の利盆以上の利盆を生産せねばならぬ。

乙、主觀的利盆

主觀的利盆とは自己より觀たる利盆をいふ。社會の利盆と自己の利盆とは必ずしも一致せず、而て社會の現在より自己が努力して其の結果自己が得たる餘剰の利盆は普通純益又は利潤等といふのである。

第三節 財

從來財若くは財貨は經濟の目的物として詳細なる説明が與へられて居るも此等の説

明は所謂材又は材物の説明としては適切なるも財實と通じて、貴重品といふ意義なる財の説明としては腑に落ちざる點多いのである。假令財は所謂稀少なる性を有する經濟財を謂ひ、自由材は所謂財貨に非ずとなすも財貨を外界の有形物と説明し、或は價値ある物となし、或は貨幣價値額であると謂ひ、或は勞動も財の中に加ふる人あり或は無形の作用も經濟財にして有形物のみに限らずとなすあり、紛々として財の一字に就きて極る所を知らぬ有様である。

財は有形物といふも無形の物にして、重要なるもの頗る多く名譽、人格、信用、暖廉或は場所、空間等を首め眞空、電氣、光、熱等は無形物で賣買の目的物となつて居るのである。

又或る學者は有形物以外の勞務、特許權、顧客、信用等の無形の財を經濟學の對象として研究するものとすれば經濟學の研究の範圍が極めて茫漠として、捕捉し難く經濟學をして却て不明ならしむ、故に外界の有形物に限るを是とすと説く。

然れども如是説を唱ふるこそ却て經濟をして不明ならしむるものである。何者經濟學の對象物を餘りに擴大する時は不可解に陥るが故に好い加減な處で間に合せて置かうといふものである。恰も從來の經濟學は完全なものにあらず、解き易い所のみを説

明したる間に合せの経済學であるといふことになるものである。又最近の新説として貨幣價值を有する物或は貨幣價值額とか稱するものが生れ出た。

價值に就ては近來の経済學の書物に於ては貨幣價值とか貨幣價值額とかいふのが最新式として、頗る流行して居る、貨幣は後に説く如く價值を表示するを其の一職分となすものにして、苟も價值あるものは貨幣を以て表示し得ざる筈がない、例之役に立たぬ物を三文も値打もないといふが如き價值は貨幣價值と言はざるも當然貨幣を以て示され得べきものであるといふ一例證にして貨幣を以て表示し得ざるものは即ち價値なきもの (valueless) か又價値餘りに高過ぎて價値なきに至れるもの (invaluable) にして殊更に貨幣の語を附加するは眞に蛇足である。

惟ふに人生の目的を構成する物件を材と名づく。例之家屋を見るも家屋なるものは幾多の材料より成立して居る、實に是れ目的の爲めの法にして若し其の材料の一を缺かむか其の家は最早目的の家とはならぬのである。此の點に於て其の物件は其の材にして若し其の物を缺くも家たるに缺くる所なければ之を以て材といふ能はず、即ち無用の物である、人生の幸福亦如斯。吾人現在の幸福は其の何故に幸福なるやの理由を目的の法に對する關係によりて之を認識するのである。或

は衣食住等の物質なるものあり、或は社會的地位の向上名譽等の無形なるものあり、其の目的の幸福の種類に依りて其の材の種類亦多數である。然れども此等幾多の材の中其の特定の物を缺くも直に他の物に依りて代り得ること自由なるものもある。例之水の如し、即ち渴を覺えたる時一杯の水は我が爲めに幸福の重要な材料なれども必ずしも其の特定の水に限るわけにあらざるが故に此等の材は自由材と稱する、然れども今若し之を失ふときは他に同一の幸福を得ること容易ならざるものもある。之を不自由材といふのである、而て財とは此の不自由材を指すものである、即ち財の要件二あり、一は材たること、二は不自由たること即ち是れである。或は之を稀少ともいふ。

英語の goods を日本經濟學に於て財又は財貨等と譯して使用すること現在の常態であるが goods は單に材に過ぎざるが故に英語に於て free goods or economic good とに分けてをる、之を自由材と經濟財とするは蓋し、誤にして若し之を譯したければ自由材及經濟材とし、此の經濟材を日本語に於て單に財となすに如かぬのである。

財が經濟材にして經濟の客體であるが故に經濟は理財と同義に看られ或は國家經濟は財政を指すとなし、又經濟界なる語と財界なる語とが事實に於て殆ど區別の存せざるものである。然るに右の意味を以て財を自由財と不自由財とに分つが如きは全く材

と財との文字の使ひ別けを知らざる者の爲す所である。

財は形式的に觀察せられて或は動産、不動産、商品、非賣品、生活必需品、贅澤品、物權、債權、其他種々有形無形の形式を取りて所謂財産目錄等に載せらるゝも此等の物件は經濟主體にとりては單なる材料に過ぎず、目的其中に存せざる手段にして、經濟主體の目的とする財は此等の物件を材料として得る利益を指し従て此等の物は單に物件と名づけて置き以て財と區別する、物件は物質及事件との意にして有形無形一切の材料をいふ。但し此等有用の材に對して人生の手段にあらず、人生の目的其中に存するの觀念を與ふる時は財たる性質を帶ぶるに至るのである。

或は財を享樂財と經濟財とに分ち得ざるにもあらず、前者は所謂單に財産として所有するといふ意味のものにして、人生の消費經濟方面的觀察に基く彼の寶物などいふのも此の類である。反之經濟財といふは専ら經濟主體の資本的立場より見るものにして、其の物件自體は人生に對して其幸福の目標となるにあらず、然し經濟上に於て經濟主體より見て目的其中に存する物件となるものである。例之米、炭、味噌等の所謂生活必需品の如きは所謂生活の材料としては必要なれども人生としては別に興味も趣味もない物件である、他人に品物を贈るにも經濟上にては役の立たない、例之花輪

の如き或は勳章、メダルの如きはあまり無禮にも當らぬことになつて居る、此等は人生の享樂となつて居るからである。人に米や味噌などを贈呈する時は侮辱であるなど、憤慨する向があるが此等は經濟上に於ては大に喜ばれるのである就中現金の如きは最も代表的なるものである。是れ必ずしも享樂が非經濟にして生活が經濟といふにはあらず、但し享樂財は人生目的其中に存し、之に對して手段としての利用の觀念なきも、經濟財は人生より見れば手段にして、經濟主體より見れば目的其中に存するを謂ふのである。故に經濟財は人生を經濟する手段として利用價值判斷を伴ひ、社會に流通交換せらるべき性質を有することになる。貨幣の如き物件は殆ど純然たる經濟財にして學者が經濟上に於て財貨は貨幣價值を有する物をいふとなせるも蓋し此の理由であらう。

第四節 貨幣

第一項 貨幣の本質

貨幣の詳細に就きては貨幣論なる特種の學問が存在する故に、就て研究するを以て

可とし、本節に於ては主として貨幣の經濟上に於ける性質關係に就き論述することに
する。

貨幣の性質に就きては經濟學上に於て幾多の説明が與へられて居るのであるが本來
貨幣發生の目的は社會の交換媒介の用具たることに於ては恐らくは異論のなき所であ
る。

社會は各人の有無相通ずる交換流通和合の状態を謂ふが故に若し貨幣がなければ物
々交換の方法に依らねばならぬ、然るに物々交換は頗る交換に不便不都合である。自
分の欲する物を相手方が有すれども相手方が自分の有する物を欲せざれば交換が行は
れない、又分割不能の物に就ては其の一部分を以て交換するわけにもゆかね、此等の
不自由不便は社會の共存生活を頗る澁滞せしめ社會一般の幸福を助長する所以に非
るが故に茲に其の交換の媒介用具として貨幣なるものが既に古くより發達したものであ
る。

貨幣は如斯社會の交換用具なるが故に社會にのみ存在し、孤立生活に於ては貨幣な
るものは其の要なきものである。乃ち貨幣の性質を列擧すれば、

一、貨幣は社會の法によりて生ず。即ち貨幣は物々交換の不便を救済せむとして社

會の人々が協定し、此の協定をなしたる者は貨幣を以て交換の標準とし、自己の有す
る事物は貨幣を以て其の價値を定め、又之を欲する者は其價値に相當する貨幣を持參
すれば苟も相手方が交換を承諾せる如何なるものをも獲得使用し得るものと規約せる
ものである。

貨幣は國家の法律を以て定められるものであるとなす學者もあれども國家の法律は
唯だ之を保護するのみである。國法の規定なくとも二人間に之を以て兩人の交換用具
とすれば其のものは兩人間の貨幣たるに何等妨げなし、又國際間に萬國共通の貨幣を
協定すれば之れ亦國際契約による貨幣である。

今日國際社會に於て貨幣の存在なきが爲めに其の國際取引に幾何の不便あるや普
く人の認識する所にして今日に於ては僅に金銀の如き物質を標準とし、其の純分比率
に依りて兩替を爲し以て流通を助けて居るに過ぎざる状態である。今日各國の貨幣制
度は金若くは銀を以て本位貨幣とし、之に法律を以て強制通用力を附與し從て貨幣と
いへば金銀を指し、國際間に於ても金銀を以てすれば他の諸物件を以てするよりも遙
に圓滑に交換賣買を爲し得る状態なれども實は是れ貨幣としての金銀にあらず、金銀
を一物質材と見て、其の品質又は實質を以て賣買するに止まり、依然として物々交換

の一種たることは到底否定するを許さないものである。故に貨幣の純分比價を定め以て國際間の交換取引の用に供するが如きは全く金銀と稱する物質の效用に着眼せるものにして、國內間に於ける貨幣とは全く其の趣を異にするものである。

國際間に萬國共通の貨幣の發生なきは國際間には政治上の障礙ありて貨幣の取締を爲し得ざるに基づくものにして、若し國際社會が圓滿和合し、貨幣の取締十分なるを得ば當然國際間に萬國共通の貨幣の制定協約せらるべきは當然の傾向であると思ふ。

二、貨幣は流通物件である。故に流通せざる貨幣は貨幣たる資格なし、金は天下の廻り物といふも此の理にして、銀行の藏の中とか吾人の財布の中に空しく存在しつゝある間は貨幣としては未だ實動せず、賣買交換せられて支拂受取るといふ其流通行程の動的現象に於て眞の貨幣の實在あるものである。従て財布の中に藏まつて居る貨幣は所謂流通速度の零なるものとなすを得るも事實に於ては潛勢力を有するに過ぎぬものである。

三、貨幣は形式的物件である。是れ社會と稱する形式的要素を必要とする處に行はるゝ上に於て必要なるものである。然れども右は單なる形式にして貨幣と稱する形式物件がなければ社會の交換流通は杜絶すといふべからず、貨幣とか通貨とかなくと

も社會の賣買交換は行はれるのであることは申す迄もない、従て貨幣の形式は何でもよい、此點自分は非金屬説にして、但だ今日の社會の状態に於ては金銀を以てするところが比較的最も貨幣の實質的目的を達するに便宜であると解する。

四、貨幣は社會價値を表現する物件にして、其の流通は社會價値を實現するの作用を成すものである。是れ經濟上に於ける最も重要な實質的使命を成すものにして、價値の本質は後述するも、物の價値は貨幣によりて示され、而て其の貨幣の受授は其の受授する人の間に事實價値をあるが故にあらしむる作用をなし、凡ゆる價値は此の貨幣の受拂によりて交換流通せられて人生は目的物件を自由に使用し利用し得るに至るのである。貨幣の購買力とは即ち之を謂ふ。従て貨幣は無價値のもの及價値の計り得ざるものに就きては其の作用を成さざれども苟も價値ある物件の利用使用は凡て貨幣に依りて自由に實現可能なるものである。

第二項 通貨

通貨 (currency) とは自分の解釋にては流通貨幣の意である。今日一般の解釋としては貨幣は本位貨幣補助貨幣、紙幣等に分類し、銀行券又は兌換券は貨幣に非ずとして居るが、然し此等を通貨といつて居る。然し社會上に於ては兌換券も立派に交換用

具として其職分を完全に行つて居るから貨幣或は金銭現金として、之を認定することは決して不合理とは云はれない、而て今日通貨の膨脹とか、收縮とかいふが、貨幣の膨脹とか收縮とか云はないのを見れば通貨とは流通貨幣の意にして、貨幣を數量的に觀察していふものであると思ふ。

然し貨幣には善悪ありて、悪貨は良貨を驅逐すなどと稱せられて居る。故に驅逐せられて市場に流通することなきに至りし良貨は通貨たる地位を失ふに至るものと見ねばならぬわけである。従て物價に關係あるものは此の通貨である。従て我々の實際經濟に於ては貨幣の質は直接關係がない。

抑も貨幣は一の物件なれども貨幣の貨幣としての作用は其の交換流通の動的現象に於て存在するものにして空しく財布に藏まつて居る間は未だ貨幣としては實動せず、即ち貨幣は使つて初めて其の効果あるものである。故に貨幣の流通と云へば尚と殆ど同意義にして賣買して現金にて受授する現象に就て謂ふ、云はば賣買して甲の手から乙の手に現金が流動する場合に貨幣の流通にして貨幣の數量と云へば此の流通額を指すのである。故に其の流通額に依りて他面に價格が表示せられる故に通貨とは貨幣の實動にして、即ち運動しつゝある貨幣之を通貨といふも差支あるまい。

凡て運動は速度を有する、此速度は普通貨幣の流通速度 (velocity) といつて居るが此の速度は一定の目的方向に就ていふ語なるを以て經濟上に於ては利益の目的に向て走る速さといふことになり、速さと速度とは意義を異にするも經濟上通貨に就ては同一に歸する。

但だ悪貨は良貨を驅逐すといふのは此の通貨の速さにして良貨は流通遲鈍、悪貨は流通敏捷である、即ち「悪貨は良貨に先行する」。先行すとは先に支拂はるゝとの意である。換言すれば「其の速さ大である」。其の速さとは單一時間に貨幣通過する道程をいひ、其の道程は貨幣に就きては賣買の商の頻繁の程度にして、商の行程は度數を以て示す。或は金額の大小を以てすることもあるが時間に對しては度數でなければならぬ、即ち金の受拂出入の繁閑の度數である。尙通貨の速度に就ては金融の際に述べらる。

第三項 貨幣經濟

右論述せし如く貨幣は社會一般の認定に基く社會の交換媒介用具たることを其の本來の性質とする、従て最近經濟學の流行として貨幣價值云々の語を以てし貨幣は經濟學の缺くべからざる要素にして貨幣を離れて經濟なく甚しきに至りては孤立生活は貨

幣なきを以て經濟學の對象にあらず、經濟學は貨幣價值を研究する學問であると迄極論せられて居る状態である。是れ固より極端に失するものにして、貨幣有無に不拘經濟は經濟として存立し敢て貨幣の如何によりて經濟が左右せらるべきに限らず、經濟の必要の爲めには却て貨幣をも破却せざるべからざる場合もあり、貨幣の破滅は經濟學の破壊を意味することではなく又經濟の如何に不拘貨幣は又貨幣として其の獨立の地位を維持し貨幣は決して經濟の缺くべからざる要件ではない、然れども事實貨幣は經濟財としての性質を具備してゐることは否定し得ざることにして、貨幣が人生の幸福に對して純粹なる手段に過ぎず、而て其の手段たることに於て人生幸福の法を成し、貨幣の所有は人生の幸福の程度を表現しつゝあることが吾人をして貨幣を目標たらしむるに至り、茲に貨幣が現在の社會の經濟の客體としての財たる立場に立つて居るのである。即ち現在の我々人生は貨幣を以て人生の幸福とし、之を如何にして處理して人生に貨幣を供給せむかといふことが經濟の現時の事實となつて居るのである。之を稱して貨幣經濟といふ、貨幣經濟とは貨幣と稱する形式的物件を經濟財とし以て經濟の客體とすることを謂ふものである。

此の意味に於て貨幣は物質にあらず、大事に尊重すべき財にして人生より見れば貨

幣は流通物件として使はぬ貨幣は用がないのであるが、經濟主體として見たる性質に於ては貨幣は人生の幸不幸の觀念にして貨幣を支拂ふは苦痛を意味し、貨幣を受取ることは幸福を指し斯くて利益及損失其れ自體を謂ふが故に貨幣は經濟主體には目的の中に存し茲に貨幣は經濟財となるのである。於是乎貨幣は資本となり、資産となり總てが貨幣又は現金といふものに換算して、計算せらる、故に現金とならざるものは經濟財にあらず、單なる物件にして以下自分が財として表示するは凡て此の現金又は貨幣を指すものと見て差支ない、故に現金以外の財は結局投資物件として取扱ふか又は經濟以外の享樂物件として別物とし、現玉を握つて初めて現時實際の貨幣經濟の完結となすものであると見ることが至當である。此の意味に於て自分は財と物件とを區別し、財といふときは現金又は現金と同一の効力あるものを指し單に物件といふときは所謂商品の類にして金と交換せられねばならぬ手段たるものをいふことになる。而て此の貨幣の經濟主體の財としての實質要件は貨幣の購買力に在りて茲に貨幣價值の騰貴下落あり、是れ固より經濟上重要な意義を有するものなれども右は貨幣といふ物件の經濟的觀察にして、社會現實の日々の生活に於ては唯だ貨幣を目標とし、貨幣の利益(數量)を得て行きさへすれば、現在の社會生活に於ては毫も差支なく、此の

意味に於て貨幣が經濟財として我々は毎日金の爲めに働きつゝあるものである。

但し貨幣を一の社會の流通物件として考ふるときは固より貨幣の價值たる購買力又は物價の如何を、時、人、場所等に就き研究することを要するは勿論である。此の場合に於ては貨幣は商品の如きものにして、金融上の問題となる。例之貨幣として所持するがよいが、他の物に代へてよいかといふが如きは貨幣を時間的に保存し、時間的に流通せしむる上の利子の問題にして皆金融である。故に財としての貨幣は貨幣の收入支出の利益損失の差額を謂ひ、貨幣の餘分の收入が利であり、貨幣の餘分の支出が損失として貨幣自體の性質と貨幣の收入支出の關係とを區別し、經濟上財といふときは其後者に在り、而て貨幣の物件としての價值研究は貨幣學に讓るべきである。

但し右は個人の社會生活の實際に就いての考察なれば國家の公法上の立場より見れば、貨幣を以て財といふべきにあらず、租税の收入が多きが故に即ち國家が金持ちといふことが出來ぬ、國家の財は國民の福富にして、貨幣に非ず、尤も國際社會の貿易に於ては、國家は出超を喜ぶ、右は國家が國際社會の私生活を意味し、それは國際貨幣として金屬としての金である。重金思想はアダムスミス以來排斥せられたが今日の國際關係に於ては重金の復活である。此の國際關係は國家の社會と稱する私法上の契

約にして、我々國內の個人關係と理論上矛盾する所がない。然れども一國內の個人の社會を對象とする國家公法上の性質に於ては貨幣とか金とかは富や經濟には意義なきものにして、金屬としての金は國富の一小部分を占むるのみである。金よりも寧ろ米や、材木や、石炭や、石油や、鐵鋼の方が遙に人生に有用なるものでなければならぬ。彼の公法上の財政の如き政府の公經濟に屬すれども租税の歳入を以て國家政府が金を儲けたとはいはず、金儲けるといふ觀念は公法關係には生せず、親が子より金を收めても親が子より、金を儲けたといはぬと同様である。但し鐵道省とか專賣局の如きは個人と私法上の關係が立つ故に其間に於ては我々と同様に私經濟の法理が行はれて金を儲けるといふ意義を存し、私人同様に金儲けせねばならぬものである。

第六章 經濟價值論

第一節 價値の意義

經濟學は價値の學問であるとも稱せらるゝ程價値は經濟學の生命を成し、從て其の研究は古來至れり盡せりである。

價値の定義はメンガー以來一般の通説として或る一定の物件に就き其の物件を若し失はば如何に自己が苦痛ならむと認識して之を尊重し若くは愛惜するの程度であるといふことになつて居り、之に何等異論の挿むべき餘地のないことと思ふ。實に價値は程度にして或る物件に對する吾人の認定である。英語に於て財を *valuable goods* と稱する如く敬愛すべき物件が財であり、其の敬愛の程度こそ價値たるべきものである。故に價値には人と物とが二個の對象物を成すものにして例へば自己が或る物に對して幾何の敬愛の念を拂ふやの程度を稱して自己の其の物に對する價値といひ、其の認定を自己の其の物に對する價値判斷といふのである。從て價値は人と物又は目的と手段との關係に生れ出づる敬愛の情といふ一の新なる觀念が其の本體となるべきものである。

抑も價値の語は價も値も「あたる」にして相當との意である。故に何々の價値ありと云へば何々に相當するといふことである。而て其の何々とは即ち意思の力にして意思は之に依りて自己が自律的に束縛を被るものである。所謂自己の法、即ち目的に對する手段にして自己は此の手段の爲めに自由を失なひ、寢て居たくとも寢てゐられない遊びたくとも働かねばならぬ、皆是れ自己の意思の力に支配せらるゝ法の結果にして

目的の權利に對する義務である。權利は法に依りて主張し得る利益にして茲に自己の目的存し、義務は此の目的の爲めに法に拘束せらるゝ苦痛にして茲に目的の爲めの手段となるものならば此の手段に従はゞ目的の利益を獲得し得るものにして此の相對的關係に於て價値である。故に空氣の如き何等手段を講せずして自由に獲得せらるゝものは無價値なるものとなり、多少にても手段を講せざれば得ざるべき目的物は其の程度に於て價値を有して來ることになる。

此の目的と手段との意思關係は情緒に於ては幸福と苦痛とにして所謂情の價値判斷となるものである。如斯、價値は此の相對の關係なれば其の目的物件を所有すれば爲めに要する手段の苦痛の額丈け利益あり、又其の物を失へば其の手段の苦痛丈け損である。又之を逆に言へば其の手段は目的に相當するが故に其の手段を盡せば目的の幸福を得べきものなり、故に其の幸福以下のために其の手段を盡さない、若し之を盡さば損となるのである。

從來學校にて價値に使用價値と交換價値とありと教へられて來たが其の區別は今に至つても不敏なる自分には理解出來ずに居る。自分は私に考ふるに價値は凡て交換である、二つの物の交換の比率が其の物の値にして價値は其の語自體に交換の意義があ

るのである。使用價值といふのも或る物を自分が使用する爲めに之に對して支拂ふ自己の敬愛の情であり、矢張交換價值である。價值は値打といふことに於て交換の意の存すること明白にして値を打つとは前述せし如く或る物の爲めに幾何の手段の苦痛を支拂ひて交換して差支ないかといふことである。然るに之を物を使用する値打及物を交換する値打といひて果して何のことか自分は解せない。使用價值及交換價值はアダムスミスの既に説かれるものなれば蓋し自分がわからないのであらうと思つて居るのであるが自分としてはわからぬ故、自分は使用價值とか交換價值とかは敢ていはぬ自分としては價值は交換流通にして彼此交換なくして價值はないものであると信じてゐる。福田博士も勞働講話に價值は流通行程に於て發生すると堅く信じてゐるといはれて居る。而て流通行程とは即ち彼此相交換さるゝ相互關係の謂に外ならぬのである。

第二節 使用と利用

自分は先づ誤解を避ける爲めに使用と利用との間に明確なる區別あることを茲に論じて置きたい。

使用は英語に於て *use* にして之を名詞化すれば用途といふ。利用は *utilize* にし

て名詞化して *utility* とし多く之を効用と譯して居る。用途とは利用、又は效用とは違ふ。自分は之を説明する爲めに法の論理に則りて之を目的と手段との關係に分つ、用途は目的にして利用は手段たり、用途の爲めの手段が利用であり、其の目的と手段との關係が價值であると解する。

使用は所有の目的である。所有の解釋は法學である、通常所有權を定義して物件を使用し、収益し、處分し得る權利であるといふ。茲に使用といふは繼續的に所有するを云ひ、處分とは所有を失ふことをいひ、而て収益とは使用の結果の果實を所有するをいふ。之は實際上の常識的解釋として之を以て標準として誤がないと思ふ。故に此等は皆物の使ひ方である、使ひ方は使用にして使用は所有の形式に外ならぬ。即ち或る物を所有して居ることは其の物を何かに使つて居ることである。其の使つて居る限度に於て所有である。而て所有とは法の力にして此の法の力あるが故に之を使ひ得るものである。此の法の力の下に於て自由である。此の力なきが故に不自由たるものにして使用は物理學的に云へば物の有するエネルギーの表現せらるゝ仕事 (*work*) に外ならぬ。此の仕事は人に就ては行爲といふのである。吾人は所有權は物の自由權であるといふが如きも右は法の力によりて自由なるものにして従て法の力によりて可能な

る所之を所有といふも不可がない、民法上の所有權は民法の認むる所有權の規定に従ふて使用し得る權利を有するを所有權と名づくるのみである。故に自由に使用し收益し處分すといふも自然の物理の法に則らずしては自由なり得ない、即ち使用し得ないである。此の點に於て不自由である、又他人から借用して居る者は民法の上の所有權には非れども其の契約の法の力の限度に於ては所有にして例之消費貸借の如き其の物件自體は明に民法的に所有せるものである。又消費貸借に非ずとも其の借りて居る範圍内に於ては自分の所有物である。之を法律上所有物と區別して借用物といつて居るが、民法上の所有物と雖も國家の法律の認められたる範圍内に於ける借用物にして國家の法律に違反して之を使用するを許さぬのである。要之所有は法の力にして支配といふも意相同じく其の支配の形式が使用として表はれ力の大小によりて使用に廣狹あるのみである。

最後の使用、之を處分といふ。自分は之を限界使用 (marginal use) と呼びたい。故に最後に至らざる使用は處分がない、消耗は少しづつ、處分あるものである。然れども處分も使用の一種に外ならぬ、但し處分に自然法上の處分社會法上の處分及自己の處分とあり第一は物質的にして第二は社會の權利の賣買となり、第三は利益の拋棄とな

るものである、處分はいづれに於ても其の支配力の消滅にして使用を續行し得ざる状態に陥るものである。是れ無用となるものである。

然るに利用は利益に使用すとの謂にして、或る物を見て其の本來の目的以外の他の方面に使用する時に我々は之を利用するといつて居る。之は餘分に其物を使用し得るエネルギーを獲得したるものにして、蓋し或る物の使用を更に他の目的の手段に供し之によりて餘分に受くる利益が利用である。故に單なる使用には利益の觀念なく、當然自由の事を當然自由にしたる表現に過ぎない、五圓の金を以て五圓の物を買つても五圓の貨幣を利用したといはぬ、五圓の金を六圓に使つて五圓を六圓に利用したといふ、此の際五圓の貨幣は客觀的利用價值、六圓は主觀的利用價值にして差引一圓が經濟上の正味の利用價值、即ち利益である。従て我々が空氣を呼吸し水を飲み地上に棲息し、日や月に照さる、此等は單なる使用にして此等を利用して居るといふことは客觀的にも主觀的にも看做されぬのである。然し空氣より窒素を得たりといふが如き場合に、空氣を利用したといふを得るものにして、其利用價值は窒素が財たる程度である。

所謂使用價值といふは此の使用方面を指すか。然し空氣や水を使用し此等の物は人

生に缺くべからざる物質なれども自由材として、何等値打を認めないのである。或は塵灰沙礫泥土の如きは水や空氣と比べて有用ならず、是使用價値なしと誤解するものあらむも、は其の物質全般を觀察せるものにして若し如斯解すれば空氣や水の類にて實際に呼吸し、實際に飲用せる以外の無限の空氣や水は用をなして居らぬ、又塵灰土礫と雖も若し之を缺けば地球の消滅にして斯る物質の性質を觀察して値打を定めるものではないのである。

然れども使用は利用の爲めには目的たる慾望の満足にして利用は之が爲めの手段として此の關係に於て利益に對して價値を決せられる關係に在る、即ち或る物が使用せられる爲めの手段として其の段によりて幾何の用途を贏ち得るかといふことが利用にして値打である。此の目的を手段との關係に於て價値となり、エネルギーの手段として利用となるのである。此意味に於て利用は用途によりて計られ、用途は利用にて計らるゝことになる。

由來價値決定に生産費(又は勞力説)と限界効用とあり、前者は利用の反面の費用にして後者は用途である、兩者は結局同一に歸する。即ち手段の方面よりと目的の方面より見たる相違に外ならぬ。

要之使用は所有の形式にして結局二者同一の事を云ひ、吾人は使用出来ないから慾望となり、此の苦痛を救済せむとして經濟が起つて來るのである。故に我々は無限の空氣を使用所有しつゝあり、森羅萬象自己の存在を構成しつゝある。物は皆自己の使用物である。太陽も月も星も皆我々は使用しつゝあり、之を所有しつゝありといふも不可なし、其の所有の程度は唯だ吾人が自由に使用し別に之に慾望を感ぜざる無慾の程度に於て自己が之を支配しつゝあるのである。無慾なるが故に此の使用所有の現在に於ては經濟價値の發生もない。従て其の使用の觀念も消滅して無用となる。即ち使用は無用にして狡兎死せば良狗は煮らるのである。之を稱して處分といふ。故に處分は無用となり、慾が無慾となることをいふとすも不可なく、或る工事の爲めに人が使用せられつゝあるは其の仕事の完成に向ふ反面に次第に處分せられつゝるものである。故に物の價値は限界使用によりて測定せらるるといふを得る。處分は之によりて無用となるのである。即ち最早使用出来なくなる。吾人が處分するのは蓋し無用なるが故に處分することもあるが、然し無用となる時に處分ありといふも不可なく處分なき限り有用にして有慾である。

而て此の有用は marginal use にして物を使用し慾望を満足せしめつゝありて有用が

無用となり處分せられつゝあり、換言すれば利用が遞減しつゝあることである。而て現實に使用し欲望を満足せしめつゝある處に於て其物に就き最後の欲望を満足せしめつゝある使用が從來の所謂限界効用と稱せらるゝものに當る、而て其れこそ利用の程度である。而て此の限界使用を *marginal utility* といふも、自分は其れこそ *utility* として須く之は限界使用 (*marginal use*) といふべきこそ正當であると信ずる。例之茲に、小麥一袋あり之を小禽飼養の娛樂に處分するから其の小麥の價值が其の利用の程度である。故に小麥が處分せられない間は價值は未だ決定出來ない、而て利用は此の小麥を失ふと失はざることによる損益の觀念にして、從つて限界に到達せざる迄は利用の程度、亦不明であると云はねばならぬ。

而て右は使用と利用即ち用途と効用との辨を説明したるものなれども之が價值決定に於て生産費説も限界使用も結局人生の情の批判にして唯だ目的と手段と相一致し、兩者交換して互に相當する觀念に價值あり、從て二者孰れも同一に歸するのである。但し法の本質よりしては目的精神ありて手段方法が定まるものなれば或は用途を正當の順序とすべきが如しと雖も經濟は手段を提供して之を救済することが、其の任務なれば此の手段の方面に着眼し自ら費用即ち苦痛の點より論ずることにならう、然しい

づれも結局情の批判に歸納するものにして、之を正當に論ずることは共に無用の業となるものである。故に彼のマルクス流の價值の説明に於ても價值は勞働に依りて計らる、而て其の勞働は目的の仕事を作すが爲めの必要なるカロリー等の費用となるといへば結局いたちつこにしてわけがわからなくなつてしまふ、之はわからなくなるのが當然にして、價值を勞働に依りて計ることも其の一方法であるが其の價值の標準は或仕事に従事する時間の必要物件の量にあらず、唯だ其の仕事の爲めの感情上の苦又は樂等の感覺如何こそ價值の判決にして此等は人生の知情意、又は順應、批判、及動機或は法、實及商の關係を審にすることに依りて自ら理解せらる。然らずして、唯だ目的と手段との一方的觀察のみにては永遠に不明にして、價值は必ずしも人の肉體と力とかを以て本來の標準とせねばならぬといふことは頗る獨斷の嫌あると思ふ。苦とか勞とかいふはカロリーの消耗が原因するには相違なからむも人間の情の判斷こそ、其の窮極にしてカロリーの如何に多く消耗しても人が愉快に享樂を感じるものならば其人の認定に於ては苦痛がない、現に人は日曜日などは或は登山とか運動とかいひて勤務の日よりも却て多くのカロリーの消耗しエネルギーを減殺しつゝあり、其の生理的判斷に於ては疲勞あるに相違なきも人は之に又愉快を感をじつゝあるが故に損はしてないの

である。利益とか損失とか搾取とか不當とかいふは皆此の情の批判の判決に須つものにして、自分の好み愉快を感じずる仕事に對してはカロリーとかエネルギーとかの物質は問題ではない、古來一升飯食ひて八合の駄賃といふ諺あり、此の二合の差はマルクスの餘剩價值として、雇傭者が搾取するものであるといふのであるが、自分は自分の好きな仕事であれば、一斗飯食ひて一文の駄賃も貰はなくとも之をなすことに吝ならない。生産は物質の量にはあらず、人生の幸不幸の感情にして、同一の飯をうまく食べると拙く食べるとに於て前者は生産的である。大に運動して、空腹の時に食へる澤庵は病に臥して食ふ美食よりも遙にうまく幸福である。價值とか生産とか經濟とかいふは此の處に存在する。要之肉體の運動の疲勞のみを以て價值の標準とすることは獨斷にして、肉體の如きは單なる地上の一物質にして人の宿つて居る所有物件に過ぎぬ價値の要諦は人の精神感情と稱する人間獨立自由の苦樂即ち利益損失の程度の感傷に歸せざるを得ぬのである。

第三節 價值不滅の原理

價值不滅の原則を自分等が説くことは採るに足らぬ獨斷であるとの非難あるやも知れざるも彼の物理學に於てエネルギーの不滅、化學に於て物質の不滅の原理の存する

限りは經濟學に於ても價值不滅の原理の存在を認定せずには居られぬ、從來の生産の説明にては生産とは何等か物質を創造する如く見ゆれども物質は不滅不増にして、吾人の生産といふは物質に種々變更を加へて價值を發生せしむることを指すに外ならぬといふのか通説である。然れども右は大自然の法を説きたるに過ぎずして、如斯事は經濟學者が注意する迄もなく萬人自明當然の理である。而かも若し之を以て經濟學にも適用せむとせば經濟學に於ても價值は不増不減であるとなしたい、生産とは價值を増加するをいふとなすは明に誤謬にして價值は決して増加もせず減少もせぬ、價值を發生せしめ増加せしむるとは、價值あるが故にあらしめたるに外ならぬ、無價値の物を有價値とはなし得ず、有價値となすとは價值あるが故に價值あらしむるのみ、從て又價值ありしものを價值なからしむるを得ぬのである。

惟ふに自然と社會とは法を異にし、其の領域は別個の意義を有するものにして、自然の物理化學の法を以て社會の人類を同一に看做すを許さぬ大自然は永遠無窮の天地の實在にして其處に新も舊もなきが如くなれども、社會に於ては新舊古今東西南北等の別ありて新に發生したる物件は物理化學に於ては物質の變化に過ぎざるも、社會人生に於ては古今東西に亘りて絶對唯一の新たる物件現象である。某氏某名の出生は物

質の變化ならむも、社會に於ては新なる人格の發生である、某氏某名の死去は物質の變化に過ぎざるも社會に於ては其人の永遠の消滅にして、若し物質は不滅不増であるとせば新とか舊とか増とか減とか生とか滅とかといふ語は、社會より葬り去らる辭書からは削除せられねばならぬ筈である。然るに事實増減生滅等の觀念の存するは獨り價值のみならず、價值以外の凡ゆる他の物件に於ても既に其觀念の社會に實在するものなることを否定し得ざるべきものにして、此の米、此の飯、此の本、此の織物等は全く社會に新に發生し生産せられたる物件であると同時に、此等の物件が物理的、化學的に解體せるときは其の物件は永久の消滅であり、有より無となつてしまうものである。之は全く社會と自然との間の關係にして自然は縦合不滅不増であつても社會には増減生滅あり、其の消滅は蓋し社會より自然界に其の位置、場所、存在等が逸散し去り之が爲めに社會に其の物件が消滅するのであり、又生産といふは自然界より、人間界に新なる物件が變化し來るものにして、其の變化の現象を社會的認識に於て生滅増減等と名づくるのである。故に人間界には無なれども、自然界には有なるものあり、又社會に於て我々が無いといふものも之を宏遠無限大なる大自然の觀念に於ては如何で之を無いと斷言することが出来るか。我々が有無といふは唯だ我々が社會の知

覺關係の範圍に止まり、有るものは在るものにして無いものは無いものである。此等の理屈を偉大なる先輩諸學者が知らぬ道理はないと思ふ。然るに物は不滅不増である、生産は價值の増加發生をいふとなして得意になつて居るのは甚だ其意を得ず、若し、物質不滅不増を經濟學に紹介するならば自分は其價值自體も不増不滅であるといふことを主張せねばならぬのである。

故に凡そ價值の増減、生滅といふは一の經濟主體の獨立の認定に於て他の社會又は自然との間の相對關係に就きいふものにして、價值の増加又は發生といふは自然又は社會に從來存する價值を自己の領域に支配し、之を新に發見し認識し、實現せしことをいふものである。決して新に價值を創設するにはあらず、唯だ價值あるが故にあらしむるのみにして無價值のものは依然として、無價值たり、有價值なるが故に有價值を得しものである。尤も我々の認識に於ては價值の存在を知覺し乍ら、之を實現し得ないことが多い、其の間隔に於ては慾望又は慾求として人生活動の距離速度となるものであるが要するに無價值のものを有價值とするといふことは、從來自己の認識に於て價值なかりしものが新に自己の認識に於て價值ありと認定し、茲に價值あるが故にあらしめたるものをいふのである。又價值の消滅といへば自己の認定に於ける價值が

自己の知覺以外に諸般の變化を起して逸し去れることにして、價值あるものをあらしめざりしことをいふに外ならざるものである。故に其のあらしめざりし價值も依然として、價值の存在にして、其價值は自己に對しては *useful value* にあらざるも社會の誰人かに歸屬し、若し社會の誰人にも歸屬せざるときは自然の直轄の下に社會上無主の状態として自然の所有に歸し斯くて自然界に於ては價值は決して増減、生滅あるものではない。

而て大自然より社會に價值を移入するを生産といひ、社會より自己の手に價值を移入變更せしむるを收入といふ。是れ孰れも價值あるが故にあらしむる作用である、而て自己の手より價值が社會に流通し去りて誰人かの價值に實現せらるゝときは自己より見て支出にして、社會の誰人にも歸屬せざるときは自然に歸屬するものにして、之を消費といふ、斯くて價值は自然の立場より見て決して増減なく、唯だ吾人は價值あるものをあらしめむとして努力し、價值あるものをあらしめざらむとするが如き障礙を除却せむと苦心しつゝあるものである。故に社會の流通たる支出收入の關係に於ては社會全體より見れば個人に増減あるも社會には増減なし、一人の收入は必ずや他人の支出にして、一人の支出は又必ず他人の收入として表現せられ、價值は増減ない、

又對自然の現象に於ても自己が自然より生産したるときは自然の大なる立場より見れば價值あるものをあらしめたるに止まり、有る以上にあらしめ得ず、有る限りに於てあらしむるのみである。従て自己の生産は社會か自然か何處からか價值を移動せしむるものにして、自己の消費は其價值が社會の誰人か然らざれば自然の直轄内に移轉せしむるのである。

此の意味に於て二人間に於て自己の損失は他人の利益にして、他人の損失は自己の利益となるべきものなることを社會の流通に於ける當然の法則とし、茲に流通市場の商戰經濟戰の勝敗を争ふべき鬭争となる。次に對自然に於ても自己と自然とは相反し吾人は自然と常に惡戰苦闘し能ふ限り、自然を征服し自然の價值を自己の價值として實現せしめむとして、其價值を目標に努力奮闘しつゝあるのである。

然れども之を悠久なる大自然大社會の立場に於ては確固動かすべからざる法の下に價值は自ら確定して決して増減なく、價值の増減の觀察は唯だ我々經濟主體の流通である。自然のエネルギーは永遠に不減不増である。然し其の *useful* と *unuseful* といふ觀念は人間の生産、不生産、増減の目標物にして *value* には増減なし之を有用とするか、無用とするか、有害とするかは吾人の經濟の主眼あるのみである。従て今より昔

を思へば科學進歩せず、遂に幸福の程度が低かつたのは今から見れば、昔の人が價值あるものをあらしめざりしものにして、吾人今日の幸福は價值あるが故にあらしめたる効果である、昔の人は今の人から見れば頗る不經濟な次第であつたと見ねばならぬ科學の進歩は人生をして益々幸福に導き其經濟程度を高からしむる所以である。要之經濟は無を有とするの自然の法に違反せむとするにあらず、自然に在るものを自己が自然の一物として之を自己に在らしむとするに止まり、無いものをあらしめ得ざるは大自然事實の金剛憲法である。

而て價値の生産は對自然に於ては物質を能ふ限り法に従て利用することにして、物質の利用は即ち自然より法の許す限り能ふ限り搾り取ることである、鶏から無い卵を取ることが出来ない、然しある限りは取らねばならぬ、牛から乳を搾る無い乳を取るわけに行かぬ、山より鑛物、海より魚族能ふ限り搾るべし、法に従つて可能なる限り茲に價値は人間界に實現化せらるゝのである。

但し社會の流通に於ては社會の法は自然と同一にあらず、然れども社會の法の認む限り此の法に則りて搾取の行はるべきものである。之は取る者が悪しきにあらず、社會の法の致す所にして、法の善悪は國家の行政の範圍内であるが、苟も法として存在

する限りは善であれ、惡であれ法は法として従はねばならぬ、而て社會の法の精神は相互の共存共榮にして四民平等甲乙なく互に利益を分つといふことに存し、一人が他人に依りて利益を受くるときは其の利益を互に公平に分配すべき性質のものである。此の法の原理に於て甲乙兩者の相互關係により發生したる利益は其の社會の法の效果として其の社會の所有に屬し、而て之を公平に兩者に配分すべきものなるに依り、茲に其の間に一方と他方と分配の競争を生じ、他人の利益は自己の損失、自己の利益は他人の損失にして斯くて價値は社會に於ても増減ないのである。極端なる社會主義に於ては其の利益は全部國家といふが如き物が獨占し、個人に配當を許さざるものなるも現時普通の個人主義に於ては個人が經濟の主體なれば此の主體自身の認識に於て自己に有用なる價値を求めむとすることに經濟の本領あり、茲に價値の發生といふものが自己自身にある如きも社會全般として見れば社會に在る價値を自己が法に依りて其の分配に預り、自己の支配の中に移動せしむるのみにして、社會に價値なきものを自己の價値たらしめ得ないのである。従て甲乙兩人が相交換を行ひて其處に價値の増加ありといふは其の交換といふ作用が價値あるが故にあらしめたる作用にして、従て交換せざることは不經濟損失となる。而て此の利益は其の交換といふ社會現象の利用價

値にして之は社會主義に於ては社會が其儘所有し、個人に又公平に配分せらる、此の社會と個人との關係に於ても既存の價値の自己への移動にして、利益分配の爭奪戦行はれ自己の利益とならざれば必ずや相手方の利益となつて居る筈のものである。斯くて物質不滅、エネルギー不滅の原理は經濟學上に於ても價値の不滅の原則として之を認定せざるべからざるものにして、經濟學も科學としては此の前提の上に立たねば其の説明を一貫せしめ得ないのである。

第四節 價値の分類

以上述べたる如く價値は目的(實)に對する手段(法)の交換(商)關係にして人生に就て云へば知の意に對する情が價値となる。經濟上に於て此の價値を次の如く分類することを要する。

第一 利用價値、費用價値。

知の意に對する關係に於て其の情に快感を覺えしむる程度が目的に對する利用價値と云ひ或は積極的價値ともいふ。反之情に不快を覺えしむる程度を目的に對する費用價値又は消極的價値といふのである。經濟上に於て財を對象とすれば或る物件が財を

收入する程度が前者にして或る物件の財を支出せしむる程度が後者である。簿記上に於ては前者を借方に記し後者を貸方に記する。

但し吾人が通常單に價値有無云々といふ時は此の積極的價値即ち利用價値を主とする。是れ人生を常に前方の幸福の目的地に着眼するより來る。然れども作用と反作用は相關なれば共に意を同じうすることになる。積極的に利を益すを營利といひ、消極的に費用を減ずるを節約といふ、共に歸着する利益は同一である。

第二 主觀的又は個人的價値、客觀的又は社會的價値

之に就ては自分は多少通説と異なる所あるやも知れざるも主觀的價値は自己の實際上の利用價値にして、客觀的價値は他人の主觀價値を自己より觀察せるものである。例之或る物甲は之を十圓に賣ることを得、此際甲の主觀的價値は十圓である。然るに乙が之を七圓に賣る場合乙の主觀的價値は七圓である。此時甲が乙の立場に於ては七圓にして、甲より觀たる其物の客觀的價値となる。此の客觀的價値は通常市場の賣買相場が其の標準となるものにして社會に於ける他人の價値を自己の價値と比較して交換流通が行はれるものである。

社會經濟は自己の主觀を基本とすれども又他人の主觀を顧慮することを要件とするものにして、或る物が他人に幾何の値打あるかといふことを先づ考ひて自己の基準とするものである。而て所謂使用價值及交換價值とは此の主觀と客觀とを指し又客觀は主觀の綜合として居るやうであるが、然し主觀價值と雖も亦客觀的價值を離れて存在し得ざるものにして甲が乙と賣買して茲に價值を定め更に甲が丙と交換して、價值を決し、此の差額が損益となるものなれば總てが交換價值である。或は交換價值を價格と解して居る人は此の現象を以て今日の社會の經濟を價格經濟と名づけて居る位である。

然し自分の主觀及客觀は斯る事を指すにはあらず、強て交換價值の語を用ふれば自己の交換價值が主觀價值である。例之或る物を他人が十圓で賣るならば、自分は十一圓で賣れるといふ場合十圓は客觀にして十一圓は主觀である。故に他人の十圓の物には自分が更に其の物により以上多くの値打を認めて居る。茲に其の物件に就て甲の拂ふ値打と自分の拂ふ値打とに違があり、其の違が餘剰として利益が発生するといふことに歸着するものである。

第三 使用價值、處分價值

使用價值は社會經濟に於ては貸借價值、處分價值は賣買價值に相當する。

茲に使用とは或る物件を繼續的に所有して、之より果實を收得する價值たり、交換は之を社會的に處分して以て其の賣揚代金を收得する額である。尤も之を他人に貸し又は賣り拂はすとも自己が使用し、又は自己が原料として處分する場合には個人的使用又は處分價值である。

此の處分は既述の如く限界使用にして、物を處分するは使用の總額を意味することになる。例之土地の賣買値段は地代の合計たるべき筈である。然れども事實に於ては夫々別個の意義に於て價值が決せられて居る。

第四 名義上の價值實質上の價值

右は Nominal value 及 Real value として古來行はるゝものであるが前者は或る物件の形式上の價值を謂ひ、後者は實際上の財たる價值である。例之公債額面百圓と云へば名義上の價值にして一定の時期に於ける相場九十圓と云へば九十圓が實質上の價值である。經濟學としては其の實質上の價值を對象とするや勿論にして、其他貨幣に就

きても昔と今と其の實際の購買力に相違あらば、徒に名目上の數字や形式を以て論じ得ざるものである。

又或る物を目して其の相場金十圓であるといつても直に其の物の利用價值十圓であると即斷すべきにあらず、之が爲めに他面に要する費用を差引きて正味の手取金純益を見るにあらざれば其の實質上の利用を判斷することが出来ない、即ち諸種の費用を差引きたる正味の手取金が實質價值である。

第五 限界價值、餘剩價值

此の名稱は固より周知の處に屬するも此の兩者を相對照せしめたのは自分の獨斷に係るを以て聊か其精神を述べさして貰ふ。

價值は既に述べたる如く實を法にて割りたる商である、實は情に感ずる苦樂の感にして法は其の手段たる物件の使用にして、今限界使用流の目的の側人生の消費經濟より見るに、限界使用に依りて物の利用價值定まるとすれば、其の反面に其使用によりて慾望満足せられ使用が無用となり、利用が消滅し、其の消滅したる價值は價值不

減の原理によりて費用價值となりたる時、其兩者の利用と費用と相一致し、差引更に何等餘分の使用を残さざるが如き場合に其使用の効果を限界價值といひ、使用しても尙餘分の使用が残る時は之を餘剩價值といふのである。

限界價值は之を言ひ換ふれば**必要價值**といふものに當る、即ち目的の使用に對して必ず缺くべからざる極小の費用又は目的に使用する時は、當然權利として生ずる極大の幸福たる利用が其の限界價值にして、此の範圍に於て物の使用は經濟主體の富の増減、利害に關係し利用は其れ以下なるべからず、費用はそれ以上なるべからず之を超過する時は價值が更に變動を生ずるに至るべき窮極の利用又は費用が限界價值であり、必要價值である。之は結局限界使用の雙面的觀察にして限界使用に依りて利用ある反面に其の處分によりて最早利用を得ざるが故に他面利用と同額の費用あり、又其處分に依りて費用ある反面に他方同額の利用あり、斯くて物の使用に表あれば裏あり、裏あれば表ある如く相一致する限度である。即ち利用と費用とは一定の使用といふ目的に對する法又は手段たる權利義務の觀念にして目的に向つて使用せる時は、當然法に依りて主張し得べく、又主張せらるゝ極大極小の値でなければならぬ。故に使用といふ目的に對する手段の觀念なくして利用も費用もなく、即ち無用の長物蛇足たるも

のにして用のない金は財にして財に非ずである。即ち經濟は無用の財たることを許さざるものにして之を不經濟といひ、必ずや一定の目的を有し、常に利用と費用との觀念を伴ひて法に依りて義務として主張せられざる費用を排し、又法に依りて當然主張し得る利益は飽く迄之を追究して利用し、利用し得べくして利用せざる時は損となるものである。而て此の損は必ずや他面社會か自然か誰人かの不當利益となりて表現せられあるものにして法に依りて認められたる限界價值、又は必要價值は之を犯すを得ぬのである。不法行爲、又は不當利得とは之を犯せるをいふ。マルクス流の説明に於て不勞所得は不當利得として攻撃する所以である。

而て餘利價值は之に對して不必要價值といふべく、限界以外の無主、無用の價值にして、經濟は之を獲得して以て自己の限界價值たらしめむとするものである。

但し右の法は物の使用といふ目的に對する手段の法にして各人生が夫々自然の法、社會の法及自己の法に則りて以て物を使用するに於て所有たる力に於て發生し、其の使用と處分とに於て利用及費用が決するが故に此の程度に於て限界價值となり、其れ以上は敢て主張せず、又主張せられぬのである。此の限界價值は對自然の關係に於て

目的物件の物質的使用に依りて定まるも、社會に於ては例之賣買指値が社會上に於ける限界使用として價値の限界が表示せらるることになる、從て此の指値に違反するを得ず、又成行と稱する場合に於ても不特定の定められるのである。故に一圓にて當然自由に賣れる品物を一圓以下にて賣つた場合には損である。即ち商人が委託者より販賣を委託せられしに一圓にて買手があるに不拘、其商人が何等かの情實にて知人に八十錢にて賣つた場合には商人は委託者に對しては八十錢を渡しては濟まない、其二十錢は自腹を切つて委託者に一圓を支拂はねばならぬものである。故に一圓の限界價值を有する者を八十錢にしか利用せざりし其の差額は一圓に對して二十錢の損失にして是れ二十錢の消極的餘利價值を生じ、損失となるのである。然るに一圓の限界利用に對して特種の方法を講じたる結果一圓十錢に賣り得たる場合には積極的餘利價值を生じて其の餘利丈け利益となるのである。

利用は人生の限界使用又は勞費の程度に於て茲に法としての價値定まるが故に、之を標準として之れ以上に利用したる時に利益となり、之れ以下に利用せし時に損失となるのである。故に例之今或る人、生命維持用として小麥一袋を有するときは其の小麥一袋の限界利用は生命維持として定まりしものにして、經濟主體は絶大なる經濟能

力を有する。然るに今更に一袋増加せるときは其の限界使用は低落する、然らば利用も低下し曩の限界利用以下に降るのである。此の差額は餘利にして經濟主體の損失となり、即ち供給過剰の爲め物價下落といふことになるのである。然るに今其の限界利用を限界使用たる利用と同額に下落せしめたとすれば損にはならぬ。然し自己の得にはならず、但し人生は一袋あるより、二袋あれば更に第二の健康増進の幸福を得るが故に其の餘利は人生の利益にして自由の擴張である。即ち人生は小麥に就きて餘利が生じて贅澤になり、經濟程度が向上せるわけである。我々は如斯にして空氣や水は絶大無限の餘利を有し、贅澤極れるものである。餘利の富めるを富者といひ、餘利の少きを貧窮者といふのである。此の餘利は經濟主體より見れば損にもならず、得にもならず、即ち利用もなく費用もないのである。

於是乎單なる利益損失と利用及費用との區別を立てる必要あり、經濟上に於ける利用及費用は限界價值にして利益及損失は餘利價值である。而て此の餘利價值が經濟主體の限界價值となれば悉く利用及費用となる。經濟主體は自然並に社會に存する餘利價值を自己の限界に入れて利用及費用となすことを原則とし、即ち積極的利益の餘利價值は更に新なる利用となりて生産とし、消極的餘利價值の損失は限界價值の費用と

なりて投資とせらるゝものである。

而て其の限界に入らざる間は單なる利益、損失として遊離し、其の利益は經濟主體の富を作さざれども其の客體たる社會又は自己の人生々活の幸福を意味し、損失は經濟主體の富を減少せしめざるも社會の人生の不幸苦痛貧窮となる。經濟の本質は之を救済することが、其の根本的眼目たるものなれば利益を利用とし、損失を費用とすべきものなるも之を全然斷念して、計算外に置くときは經濟主體は關係なく、之に對しては別に計算を立てず、經濟主體は唯だ限界價值たる利用及費用の觀念あるのみにして、若し利益が生ずれば直に之を新なる利用として限界に加へ、損失の生ぜるときは之も一の資本である、投資であるとなして更に前途の活動に資するのである。

是の故に經濟主體が利益を目的とするといふは餘利價值を獲得して之を自己の利用とし、自己の財として自己の資本とし以て自己の經濟能力を充實せしめむとするに在り、從て經濟主體には餘利のなさを原則とするものにして、貸借對照表にても必ず借方と貸方との結を合致せしめねばならぬ。此の合致せし程度に於て限界となり、其れ以外は經濟主體自己の餘利價值にして關係がない。而て一切の収入と一切の支出との差額の餘利價值は之は社會の無駄な餘利を自己が獲得して利用又は費用とせし

意味にして、例之水は社會は餘利だらけなるが故に此の餘利を獲得し、水より酒を得るときは其の差額丈けは社會の餘利を自己が獲得して利用せしことを意味し、之を人生社會に對しては利益となることをいふのである。又自己自身の餘利はそれ丈け社會人生の幸福を成せしものにして、自己が富みて生活程度の進んだものとする。金持が餘利の多いのは即ち無駄使ひをし奢侈費澤をして居る、然しそれも人生の享樂にして損とも思はない、從て他人が取得しても不法とはならぬのである。然し之を損であると認定する時は其の損は費用として計算せらるゝものにして即ち奢侈享樂は之も自己の一の投資であるといふ觀念である。

經濟主體は原則として一切の收入を、限界利用とし、一切の支出を限界費用とし、其の差額の餘利を利益又は損失として計算する、而て此の利益及損失は所謂決算に於て更に利用及費用となるのであるが此の利用及費用への決算に於て利益あつて利用とならぬものが多々あるのである。換言すれば將來の生産に役に立たぬものと立つものとである。利益にして生産に役に立たぬといふは利益金を使つて享樂した場合である。それ丈け對しんだのであるから損とも見られまい、我々が米を買ひ衣服を買ひ酒を飲む、損をしたとなされまい、然し金はへつて居るから將來の生産にはならぬ不生産

的消費にして、從て眞に残つた現金其他の有價物件のみが利用となり、其他の享樂上の支出は餘利價值として見ねばならぬ。然し之も一切限界價值として見れば其の支出は又費用とするのが原則にして米も着物も酒も自己の資本であるといふ觀念である。經濟家を吝嗇とするのも凡ての此の餘利を節約して限界價值に入れ以て極大極小の價を以て總てを律することが其の金剛法則なればである。

尙限界價值及餘利價值は更に説明の進むにつれて自分の精神が了解せられること、思ふ。要するに限界費用即利用、限界利用即使用と自分は解する、即ち使用は人生の諸種の慾望を満足せしむる、用途に供給せられつゝあるものにして、何等かの効果あるが故に使用といふ、觀念があるのである。沙磧塵と雖も使用の觀念の存する限りは何等か人生に効用のあることを示す、故に經濟上極大の利用價值を求むる限りは此の使用の程度迄之を上げし得るのである。例之人が渴に苦しむときは一掬の水は其の程度迄利用することが出来る。甘露一滴價千金といふも此の觀念である。然れども經濟上に於ては其の水の限界使用零なるが故に利用がない、即ち限界利用は千金にして利用がないといふことになれば其の差額は單なる利益にして人生の幸福を構成すれども經濟主體には關係のないものである。從來の所謂使用價值とは或は此の限界利用を

意味するのかも知れぬ。而て右の限界使用零にして利用のないといふことは何等勞費を要せずといふこと、全く同一なること既述の如くにして無限の價值ある水を何等勞費を支拂はずに獲得したるが故に其の分丈け利益(餘剩)が得られたわけである。是の故に社會に於ても價值は此の使用迄騰貴し得る、然れども限界使用以下に下らず、而て此の限界使用の處分を以て財の消滅とすれば則ち限界費用に相當し、其の差額が人生誰人かの利益に歸する筈である。

然るに經濟上に於て其の限界使用の目的と手段との合致を以て價值とするときは是れ經濟上の限界價值を決定せるものにして其處に經濟上に何等の餘剩が残らず、最も經濟を得たるものである。蓋し是れ所謂價值均等の法則と稱せらるゝ所にして、過不足なく價值をしてあるが故にあらしめたるものである。

經濟は利益損失そのまゝにては未だ足りず、之を經濟主體の限界内に利用費用とすることにして於て完結するのである。之を決算といふ、廢物を利用して生産を得たり、斯くて増加せられし價值は其の廢物に價值あるが故にあらしめたるものである。其の利益に於て利用である此の利用が經濟主體の限界價值たるものである。而て其利益は餘剩價值にして若し此の廢物を利用せざりせば其れ丈け損となる。是れ此の利益を利用と

して限界價值とせるに基く。然るに之を限界とせざる時は、經濟主體の富を構成せざるものにして廢物を利用せざる時は其分は餘剩價值として自然その儘に残存するか、社會の誰人かに歸屬するか、或は價值あるものをあらしめざるものである。

第六 確定價值、未定價值

確定價值とは現實に利用又は費用の發生せるものにして、通常値打があつた、値打がなかつたといふが如き過去の使用の事實に就き生ず、賣買契約に於ても既に商の成立を見たる時は社會の確定價值とする、而て未定價值は概括的の豫定又は見積の値打にして、所謂單なる自己の認定價值である。例之或る人が或る物を五圓にて買ふといふ需要があれば、其の物は先づ五圓の値打あるものにして賣買契約成立し、現金を手に入れて初めて確定となるべきものである。

第七 全部價值、部分價值

從來全部効用又は部分効用の如き語あり、彼の限界効用の説明にて小麦五袋ある時其の全部の使用が全部効用の如く説明すれども苟も限界使用零なる時は全部無用にして價值あるべきにあらず、但し最初の生命維持用を以て限界使用とせば其餘分の四袋は餘剩にして効用漸減し、物價下落とならう、物價下落は其の限界利用に従へば損失

であり、其の損失は他の人生の幸福を意味する、又最後の小禽の娛樂用を以て限界使用とすれば其れ以上の四袋は同じく餘剰なれども經濟主體にとりては利益にして、儲けとなる。但し此の利益は利用なき利益にして通常自己の經濟客體たる自己の人生生活の消費經濟方面の裕福として見る事が多い、即ち前述の贅澤となり、贅澤は人生生活の幸福の發展を意味するが故である。然れども茲に説く全部價值は斯る意味に解するにあらずして平均價格といふに同じ、即ち全部効用は部分効用の合計に外ならざるも其の合計を其の數量にて除する時は即ち平均價格にして、之によりて其の全部が一と纏めとして價值の標準となるをいひ、卸値及小賣値ともなるものである。

第五節 價值と價格

價值と價格とは其の意義を異にするや勿論である。價值は値打にして價格は値段である。而て從來の通説に於ては價格を以て交換價值額とし、今日の經濟は人々互に交換流通して經濟を行ふが故に之を價格經濟など呼ぶ學者もある、誠に恐れ入つた次第である。交換價值が價格ならば使用價值と稱するものが單なる價值即ち値打であるといふのかもしれない。然し或る物が例之十圓にてれ賣るから其の物は十圓の値打がある

といふのではあるまいか、然らば交換價值も使用價值も何等異なる所ないのではないか。所謂價格經濟と稱するものは價值經濟といつてはいけないのであらうか。價值と價格とを加斯にして辨することは甚だ其の意を得ない。

本來價值も價格も同じく價である。唯だ價值は價をつけて拂ふ意義を有し、價格は値をつけて拂はれるものである。前者は其の物件に敬意を表し、後者は其の物件が敬意を表せらるゝ格式である。格式なるが故に法の力を有し、茲に其の物件は價值に従つて他を拘束すると同時に他に拘束せらるゝ義務を負ふのである。

是の故に價格は物件の有する限界使用の程度にして例之小麥一袋之を娛樂に處分すると云へば其の小麥は其の程度の格式を有するのみ、而て限界使用の程度は價值であると云へば價格は其の價值を附せらるべき額にして其の値打を拂はれたる認定に於て其の物件が法としての拘束力を有し、總ての經濟主體は此の法によりて其の物件を處分し得る權利を有し、又此の法に従ふに非れば其の物件を使用し得ざるべきものである。所謂價格とは此の價值を支拂はるべき法の力であるといふも不可ない。

此の法の力の強弱に依り、値段に高低がある。高い安いといふは此の價格に對する價值判斷である。

價格は人生の或る物件に對する使用又は所有の目的に存し、價值は之が爲めの手段に存する故に價格定まりて價值もきまる、價格が不明なれば是れ法の不明にして經濟の見當がつかぬ。即ち物の値打がつけられない、物の値打は限界使用に依りて定まるといふも此の限界使用が其の物の價格たるが故に外ならぬが故である。

我々が物を買ふにも先づ其の値段を尋ねる。此の値段がわからなければ其の物を使用し得ざるべきものにして此の値段を知つて然る後其の値打を判斷する。其の値段をきくのは其の物の限界使用の程度を知らむとすることである。又或る物を五圓にて賣るといふは其の物の限程使用が五圓といふことにして五圓を以て其の物件を處分するといふ意味である。

而て此際五圓を支拂ふ能力を有すればよし、若し之を有せざるときは茲に經濟的慾望を發して、何とかして此の五圓を儲けやうといふ經濟が必要となつて來るのである故に若し其の値段がわからなければ、經濟すべき程度が計り知ることが出來ない、此の經濟すべき程度は價值にして利用となり、費用となるものである。

經濟は法學にあらず、價格が高くなるのは法の重きを加ふることにして何故に高くなつたかといふことは經濟ではない、惡法も法は法である、之に従はねばならぬ。

物が高くなつて困つた故に如何にして之を切り抜けて行かうかといふことに經濟がある、物が下落して生活が容易になつた、故に經濟も其の必要を減するに至る、故に物が高くなればなる程益々經濟が必要となり、益々節約して行かねばならぬことになるものにして、價格も法なる限りは自然の法國家の法等と同じく人生生活は之に依りて羈束せられ我々の實際經濟は何が故に價格が騰貴したか下落したかといふが如きことを研究するよりも價格が高くなつたから如何にすべきやといふことに着眼すること經濟主體の職分でなければならぬ。

但し此の價格の拘束力は社會の限界價值として、此の法に違反するときは、茲に餘剰を生じ、所謂不法行爲又は不當利得となるに至る。即ち不法行爲は社會の公法に違反して他人の限界價值を犯すを謂ひ、不當利得は社會の公法に違反して限界價值以上に多くの價值を獲得するをいふ。故に此の價格を犯さなければ、不法行爲も不當利得も成立せぬ。従て此の價格は社會の私法上の拘束力たり、我々は此の價格に則りて、諸種の價值を判斷すべきものとなる。國家が金一匁を以て、金五圓とし以て價值の單位とすと定めたるも、此の價格を一定して以て價值の度量衡となせるに外ならぬのである。

是の故に經濟上に於て利用並に費用は此の價格を以て批判せらるゝものにして、蓋し限界使用に依りて價附けられたる物の價格は之が法となり、標準となりて更に他を律するものなればである。故に小麥一袋の限界使用娛樂であるとすれば、其の關係(値打)に於て小麥の價格である。此の認定に於て價格は法として拘束力を有し、吾人は唯だ此の價格に則るべきものにして、又之に則るときは、之を處分し得るものである。即ち之を心理に譬ふれば限界使用は意である。價格は知である、而て價値は情である、經濟は此の價値の批判の下に價格と使用とを調節するに在り、是れ價格を犯すに非ず、犯し得ざるが故に價格であり、此法に従つて經濟を行ふものである。

但し自律の價は格自己に於て自由に之を變更することが出来る。即ち自ら限界使用を變更すれば之に追隨して價格が變更するのである。

是れ經濟自律の法の改正變更である。然し苟も一定の認定の下に決定せられたる限りは自己と雖も自己の法として之に羈束せらる、是れ自己の限界使用にして、小麥一袋を娛樂に供する時は其の價格たり、生命維持に處分する時は其の價格である。之に理屈はない、其の處分の状態に於て自己の法は常に改正變更せられつゝあり、之は自己の自由の認定である。

之に對して社會價格は社會を對象としつゝあるが故に他律的に従はねばならぬ。此の社會の法が我々實際生活に於ける賣買値段にして、此の法に依りて我々は拘束せられて行くのである。此の價格は社會の限界使用にして、社會の限界使用が表現せられて價格となり、之に則りて賣買し權利義務を負ふ。

此の社會は自己と他人との共存共榮の生活を謂ふが故に自己の價格は他人を拘束すると共に他人に依りて拘束せらる。此の關係に於て自己の所有物は他人の使用處分に供せられ、他人の所有物は自己の使用處分に供せらる、故に若し價格を以て限界使用とせば價格は所有者の認定するものにあらずして、社會に於ては他人が認定するものである。即ち他人の限界使用が自己の所有物の價格を定めるのである。

於是乎若し使用は所有の實體であるとせば所謂社會法上形式的の所有者は其の物の所有者にして、他人が其の物の價格の制限に於て使用者たる地位に立つ。此の組織の會を經濟社會と稱する。

但し此の社會は個人主義の現在社會制度に於ては、各個人が經濟主體たる地位に立つも、此の地位に於て各經濟主體は、自己の自己に非ずして、自己は社會の自己であるといふことになる。

尙社會に就ては後述するも、要するに法律上に於ける所有權者は經濟社會に於ては利用權者にして、社會即ち他人が自己の所有物を使用せむとするものである。其の他人の限界使用に依りて自己の所有物の價格が決せられ、此の價格に依りて自己の利用價値又は費用價値となるのである。故に自分が或る物を大に値上せむとしても他人の限界使用が低ければ價格は上らぬ。即ち此の限界使用は他人の認定なれば自己によりて之を改正變更せしむるを得ぬのである。

此の他人の限界使用は賣値段又は買値段として、表示せらるゝものにして之を稱して申込値段ともいつて居る。即ち申込は契約成立の拘束力を有し、申込者は其の價格によりて賣買せざるべからざる義務を負ふに至るが故に、之に依りて其の物の社會的限界使用を認識し得るのである。

但し申込の値段は未だ契約の成立に非るが故に商の手續によりて、賣買せられて價値の決定を見るのであるが、然し之によりて社會的に拘束力を帶ふるが故に之を以て利用又は費用の價値を判斷することが出来るのである。

尙申込値段に對して出來値段と稱するものあり、右は商が成立せる賣買價格に

して之によりて兩者の客觀的價値が確定するものである。

要之價格は形式上價額と其意義を同じうし、價値の額が價格である。而て其の實質上の性質として價格は拘束力を有する法にして、利用又は費用の程度を示すことになる。故に此の法の認定によりて又利用價値も費用價値も定まる、而て此の價格は如何にして定まるやといはゞ結局限界使用説と生産費説とあるべし、而て兩者は既に述べたる如く同一ならば價格の立法の精神を問責するは經濟主體の職分にあらずといはむのみ、經濟主體は唯だ法に則るのみにして、法の目的精神を研究して、之を論ずる限りではないからである。唯だ個人の孤立の生活にては自己の限界使用、社會生活に於ては社會の限界使用が價格であり、價値となるものであるとすることに止まるのである。但し此の價格が社會に於て如何にして形式上定まるかの立法の手續は所謂商の方面の研究に譲り、茲には唯だ價格の性質を述べるに止めて置く。

以上述ぶる所に依り、價格は社會經濟に於ける物件の價値額にして法的性質を謂ふものなるが故に社會經濟を營む者は此の法の支配を受け、此の法に依りて權利と義務とを取得するものである。權利といふは其の價格に則れば其の法の規定に従つて其の物件を自由に使用し得る力にして、義務といふは其の價格に則らざれば其の物件を使

用し得ざるの不自由である。

貨幣の所有は即ち此の權利たる購買力にして、貨幣の所有は其の額面に相當價格の一定物件の自由使用又は處分權を所有するものである。是の故に物件の價格が高くなれば貨幣の購買力減じたるものにして價格下れば貨幣の價値の増加するものであるといふことになる。而て其の物件價格相當の貨幣を所有せざれば其の物件を使用するを得ざるの不自由は即ち經濟的慾望として吾人が貨幣を求めむと努力するに至る所以である。斯くて價格が高くなればなる程貨幣價値下落し、貨幣價値の下落は自己の經濟程度の下落即ち貧乏を意味し、貧乏は即ち人生の經濟價値の高騰にして經濟的慾望の強度を加ふることとなり、益々經濟の必要を生ずるに至るといふことになるのである。所謂物價が高くなる程生活難の度を増す譯にしてのんきに遊んで居られず、大に經濟的に働かねばならぬことになる。大に經濟的に働くとは今迄例へば一日一圓儲ければ充分であつたのが之からは二圓も三圓も稼がねばならぬといふことである。

次に物價と稱するものはプライセスと複數に書く如く價格の綜合にして特定の物件に就て謂ふに非ず、社會に存在する多數多様の一般的價格にして此等の一般的物件を總代して貨幣なるものがあるが故に物價は貨幣價値と同一體を成す、但だ貨幣は物件と反體側に立つが故に物價の騰貴即貨幣價値下落、貨幣價値騰貴即物價下落といふ、而て物價指數など、使用して社會一般の價格の傾向を示すに用ゐらるゝのである。

第六節 價格と對價

價格と相對の關係に在る價値額を價格に對して對價といふ。對價は或る物件の反對給付たる物件の價格との謂にして價格は之を反面より云へば其の價格に相當する他の價格を要求する額である。故に價格と對價と相合致せる時に茲に價値の方程式が成立して彼此交換せらる。此の合致なき限りは商は成立せぬのである。

今茲に小麥あり、其一袋の限界使用、小禽の娛樂であるとするれば其の小麥一袋の價格は小禽の娛樂である、此の兩者の價値に於て一を價格とせば他は對價である、即ち小麥一袋を失はむ爲めには小禽の娛樂を要求する。故に小禽の娛樂は小麥一袋の爲めの對價である。又小禽の娛樂を以て小麥一袋の價格とせば小禽娛樂を得む爲めには小麥一袋を失はねばならぬ。此の彼此相交換せられ得る状態に於て兩者の客觀的價値となるものにして、即ち價格と對價との合一が商であり、其の賣買出來値段である。

但し此の交換に於て互に餘剰の利益のあることは各自の主觀的價値にして此の利益

といふ力がなければ相交換といふ作用は起らぬのであるが、客観的価値は主観的価値の合致にして兩者相交換せられ得る状態を指し、一方を價格とせば他方を對價とするものである。従て小麥が生命の維持用の一袋となれば小麥の價格は生命といふ物件の對價を要求することを意味するのである。

而て一方の物件を實とせば他方の反對給付は法となり、實と法との價值の關係に於て商を見る。

一定の對價を支拂ひて或る物件を要求するを其の程度の需要と呼び、一定の對價を要求して或る物件を提供するを其の程度の供給といふ。需要と供給に就ては更に後述する。對價と殆ど同意義なるものに代價の語あり、但し代價も等しくプライスとし價格と同じやうに見るも是れ價格と對價とが同一の額に歸するに出づるものにして對價はコストに當り、コストは普通原價と譯すれども、此の原價も價格なるや疑を容れず、生活費を *cost of living* といふが如く價格が高くなるから生活費が嵩むのである、但しプライスは利用價值の方面に立ち對價は費用を意味する、従て價格と原價との差引が損益となるやうになるが其の原價も元の價格との意ならば斯る區別も出來ないものである。

價格は法的性質を帯びたる、價額にして其の法たる性質に於て多く價額を數量にて除したる商を以て價格とし、普通單價といふ場合は多く此の價格の意義を有する。

而て價格に買値段、賣値段等あれども此等は皆孰れも抽象的の價額の意にして、之が具體的に交換上に表現せらるゝ財の額は對價である、故に買値段といふときは對價を支拂ふ額をいひ、賣値段は對價を要求する額たるものにして、此の意義に於て代價は價格と同一といはむより對價に屬するものであると思ふ。但し對價と異なるは代價は代金と殆ど全く同一にして多く貨幣を以て支拂はるゝ場合に用ゐらるゝことである。故に代價は對價の一種にして其の意義の狭きものである。

第七節 需要と供給

需要及供給は略して需給と稱せられ其の意義は殆ど周知の事實である。其一例として需要とは或る一定の價格を以て買はれむとする財貨(物件)の數量を謂ひ、供給とは或る一定の價格を以て賣られむとする財貨(物件)の數量を謂ふとするは其の目的物件の數量的觀察であるが、本來需要は *demand* にして供給は *supply* といふが如くいづれも人が人に對する關係を指すものである。即ち或る物件に就き人が人に對し

て要求するのが需要であり、人が人に對して提供するのが供給である。而て要求すとは必要又は有用と同意義にして或る物を使用せむとする意思力をいひ、供給は使用せられむとする意思力である。

意思是法の力にして從て需要供給は法に依りて主張するものでなりればならぬ、故に法的確なる範圍に於て需要供給たり、法は價格に則る對價にして、從て需給は必ず對價を要素とし、即ち需要は一定の對價を以て或る物を使用せむとする意思たり、供給は一定の對價を以て使用せられむとする意思である。

此の法の主張に於て最早其の物の所有と同意義にして、唯だ其の物が未だ使用せられざるのみである。故に或る物を所有せむとするは法の力の不足にして、慾望となり使用は所有あれども未だ所有の精神たる使用の不實現を謂ひ、從て需給は所有と使用との關係である。然れども所有ありて使用し得ざるは又是れ法の力の不足にして慾望のある所である。此の實現を不能ならしむるは經濟自律の法たる價值の問題である。

而て價值は限界使用にして或る所有の物件に就き之を使用せむとする一の人生の慾望と他の慾望とに於て弱き慾望は犠牲にせられねばならぬ、此の限界使用の程度が需給として表現せらるべきものである。強き人生の慾望は其の物件に對して限

界使用高く其の程度の値打を以て一定物件を使用せむとする。弱き慾望は其の低き値打を以て其の物件を使用せむとする、是に於てか眞の所有物件は大なる値打の爲めに使用せられ茲に其の限界使用決して價格の決定を見る。其の結果弱き慾望の主には依然として其の程度の需要が存在して居る。故に之に使用せらるゝ場合には價值も自ら下落するものである。而て此の際其の物の所有者より見れば大なる慾望の爲めに之を提供せむとするものにして其の大なる慾望の限界使用を認定し、茲に自ら價格を定めたる時は即ち其の供給價格にして、其の價格に相當したる効果を奏すべき慾望の爲めには直に之に提供して需給の結合を見るも小なる慾望とは値段の折合がつかぬことになるのである。而て小なる慾望が満足する爲めに目的物の使用を得ざるは即ち他に大なる慾望換言すれば更に大なる効果が他に存するが爲めにして、更に之を他方より見れば物件が不足にして小なる慾望を満足せしむるに足らぬ事を意味するものである。

是の故に需要は或る物件を一定の効果を以て使用せむとする意思にして、供給は一定の效果の爲めに使用せられむとする意思である、此の效果は經濟上に於て財の額にして此の財は貨幣をいひ、貨幣を以て使用するを買と呼び、貨幣を以て使用せらるゝを賣といふ。故に金を與ふる力なきものは物を使用する資格なく、其の金を與ふる程

度に於て需要の價格又は買値段として法の拘束力を有し、又供給は金を與へらるゝ方面にして其の金を與へらるゝことを要求するに於て供給價格又は賣値段としての拘束力を負擔する、故に此の法に的確なる場合は何時にても自由に之を使用し處分し得るものにして其の範圍に於ては需要者は其の物件を所有し居るも同然である。又供給者は其の價の範圍内に於ては自己の所有物にあらず、其の對價を支拂ふ者の爲めには何時にても自由に使用し處分せらるべき義務を有する、唯だ對價を支拂はれざる限りは之を使用せしめざるのみにして、此の地位に於て供給者は其の物の單なる保管者又は番人の如きものである。

使用は人生の效果にして實たり、所有は手段にして法たり、法に則りて實を要求するを需要といはゞ實を求めむとせば法を要求する之を供給といふことが出来る。價格は此の實と法との合致にして、其の各々要求する實と法とに於て商が未だ成立せざる場合にても法の力の潜在として價值判斷の對象となるのである。

而て經濟上に於ては此の需要供給の未決定價格が重要な任務を有するのである。何者價格の決定は需給の結合にして過去の事實に過ぎず、需給の結合は限界使用による人生慾望の満足にして有用は無用となり、價格決定と同時に其の價格は消滅して利

用は更に遞減するに至る、故に過去の事實は之を以て將來を測定する上の参考となり、統計其他の有力なる資料となれども、唯だ參考たるに止まりて、拘束力のないものである。

故に經濟上に於て注目すべきは需要と供給との生存しつゝある處にして其の賣又は買の値段に依りて方針を定むるのである。故に此の需給が經濟主體の眼目である。然れども此の價値は他人の附するものにして不明である、之を判斷することが困難である。統計は過去の事實に則りて將來の標準を定める、供給者は通常原價計算にして需要者は財の購買能力である。然れども此等は單に價値の限界を定める標準たるに過ぎない、加之所謂生産費なるものも主觀の生産費は社會を拘束し得ざると共に過去の生産費を以て將來の價格となすを得ず、何者生産費を餘分に投じたとして案外悪しき結果となれば價格は生産費以下に下るべければである。於是乎再生産費説あり、然れども此の再生産費と過去の實際の生産説との關係に至りては問題の存する所である。

生産費と再生産費とは随分議論せらるゝ所なるも要は生産費と再生産費との差引を以て利益損失となすべきものにして、生産費よりも再生産費か低下すればそれだけの損失である。又再生産費が多くなれば其れだけの利益にして要は利益損失の決算に係

るのである。即ち損失として計算してしまへば如何に高き原價のものもあきらめられる。然し尙損失とせずと頑張るときは依然として生産費を以て其價格を主張せむとするであらう。

而て原價は對價にして對價は價格の反面を指すものなれば結局生産費と價格とは一致あるべきものたるやを疑なし、若し一致なければ價格は未だ定まらぬのである。或は原價と利益とを加へたるものが價格であるといふのが最も普遍的なる一般的觀念なれども利益は主觀的價值(主觀的生產費)と客觀的價值(客觀的生產費)との餘剰の開きにして經濟主體は之を目的とするに相違なきも客觀的價值に於ては價格が對價にして入は此の利益なければ決して生産せざるを見れば此利益も社會の生産の一要素である。

而かも生産とは價値の増加をいふといふのが一般の通説であらば此の利益額が生産額たるべきものにして學者は兎角用語を混同して居る、普通の觀念に於ては生産とは物件の供給を指して居る。換言すれば物件の製作である。此製作費供給費を生産費といつて居る。然るに經濟學者は生産は價値の増加といひ乍ら猶此の供給と同意に解してあるは甚しき矛盾である。若し假に生産と供給と同一としても利益なければ生産又は供給の意思の發生なきものなれば此の利益は其の物を獲得せむとする人に對しては

對價として見積らねばならぬ。

尙之に就ては更に商に於て之を説明する。蓋し商は價格を定むるものなればである。

第八節 市場

市場とは多數の需要と供給とが集合する場所である。換言すれば多數の賣手と買手とが集まりて相結合せむとする場所である。但し市場に音訓二様の讀方ありてイチバと訓讀する時は具體的の賣買物件に就き取引賣買を行ふ具體的の場所を意味し、シジャウと音讀するは其の賣買の内容に就きての物件の相場並に賣買取引の狀況等の無形の方面を指す場合に用ゐらる。故に我々日常の生活に於てはイチバへ買物に行くといひシジャウに行くといはず、然し取引所の中へ入つてシジャウの狀況を見るといふは其の賣買の景氣不景氣相場の模様等の經濟的の方面に着眼するものである。是の故に經濟學上に於て市場は専らシジャウにして具體的の場所には關係ない、社會を以て一の市場なりとなすことが出来る。

要之市場は需要と供給とが集合して、茲に賣買を行ふ處にして經濟社會も一の市場であるが、今社會を我々の如き單一なる人格者と假想すれば既に述へし如く需要は社

會の慾望であり、供給は之に對應する物件にして物件が増加すれば其の物件に價値の遞減あり、物價の下落となる。然れども之と並行して慾望も増長すれば別に相對的に變化なく、獨り慾望のみ増長すれば物價騰貴する。社會の物價の變動は全く此の理に外ならざるものにして人の慾望は或る物件を如何なる目的に使用するやの意思となり、其の意思は自己の法として其の物件の自己の價値を決する如く、社會に於ての物件的慾望は貨幣の使用目的たる需要として現はれ、貨幣は人の血液の如く社會の血液にして血液が意思の力なる如く貨幣の力が社會の意思となり此の貨幣を使用する目的物が需要として社會の物的慾望即ち社會の意思の流れとなり、需要が増加することは人に於ては物件の用途の増加即ち限界使用の高騰を意味するものである。多血質の人は血氣に任せて物などは兎角粗末にしたがる、宵越しの金は使はぬなどいふ、貨幣が多くなれば自ら貨幣を粗末にすることになり、従つて物價の騰貴となるのである。貨幣の使用は即ち需要である。

貨幣が増加すれば物件に對する需要が増大し、需要の増大は需要せらるゝ物件の限界使用の騰貴となり、物價の高騰となるのである。

反之人に於ても貧血になれば別に物を欲しくなくなり、物の價値下落するものにして社會に於ても貨幣が減少すれば社會の貧血にして活動鈍り不景氣となり、物價下落である。次に供給方面は之と相反的にして、需要の増加は供給の減少を意味し、供給の増加は需要の減少である。

孰れに於ても需給の結合せざる差額が需要又は供給として存続しつゝあるものにして、此の存続するは値段の折合はざるに因るものなれば需給の増減とは價格の騰貴又は下落せむとする傾向状態をいふことにならねばならぬ。

貨幣が社會の血液なることは貨幣が社會的財にして貨幣に依りて社會の人々が動くこと猶人體に於ても人體を動かすものは意思の力であり、意思の力は生理的學に於ては血液に外ならざると同じきの謂である。故に意思なくして動く筈なく、社會に於ても人を動かすには社會の意思あるを要し、社會の意思は公法となり、個人間には私法として存在し、公法は國家の力を以て動かし得るも私法は國家の力にては動かす金の力である。即ち他人に利益を與へ其の人の意思の承認を求めものにして利益を以て人を動かす外なく此の利益は所謂貨幣が之を總代し人は貨幣を求めて動くものなるが故に此の貨幣を以てせば人を自由に動かすことが出来るのである。

次に意思は血液の流れなれども血液は物にして之を動かす力がなければならぬ、それは心臓の流血力にして其の本は知情意の本理により神経に覺ゆる知覺であり、之が慾望となりて流血の方の本となるが故に其の慾望の強き程流血力大にして意思強く極端なるものは本能及衝動となる。人の意思の強弱も此の慾望の力に源泉を發するが故に社會に於ても貨幣の數量のみが多くなつても此の社會の慾望がなければ貨幣は動かさない、故に需要は貨幣を使用せむとする人の慾望である。而て人の慾望の程度は貨幣(M)の流通速度(V)となるが故に之を $M \times V = M' \times V'$ (等式)といひ表して居るのである。

而て一方供給の數量を以て前者を割りし商を物價としてゐる。此の物價は社會の客觀的價格にして、結局需要と供給との相對的關係を表現するに外ならぬ。

一定市場に於て一定時期に於ける一定物件の客觀的價値、即ち相場を示すに通常中値を以てする。中値は平均値段である。今日の取引所市場に於ては毎日最高價格と最低價格との平均を以て其日の中値として以て大體の價値の標準としてゐるのである。

取引所は一種の市場である。然れども具體的に物件を其の場所にて取扱はず、單に賣買契約を成す爲めの場所なるを以てイチバと云はずにシジャウと稱するのが通例で

ある。取引所の定むる相場は社會に於て最も基本的の相場と認められて居る。

尙物件としての貨幣にも其の使用に相場あり、其の原理は後述する所なるも其の相場に Bank rate と Market rate との二種あるは人の知る所である。前者 中央銀行 (日本銀行) の貸付利率の相場にして後者は普通の銀行の貸付利率である。之を Market rate と云ふは、蓋し社會に存在する多數の普通銀行乃至金融業者の提供する貨幣が供給にして同時に借用する者の價値が其の需要たり、斯く多數の需給が結合することによりて自ら其の一般の客觀的價値を決するに出づるが爲めである。

第九節 商

茲に商とは賣買價格を決定するをいふ。既述の如く社會の賣買價格は各經濟主體の價値に依りて定まるも、其の價値は又社會の價値によりて定まるものなるが故に其の歸着する處に迷はざるを得ざる道理なるも、一定市場の仲値は概括的に或る物件の客觀的價値を表現し、社會は之に準據して、一般的價値價格の基準とするのが通例である。但し此價値は過去の賣買決定價格にして、其の現實の價格と相一致せざるや勿論である。次に買手が或る物を十圓の價値ありと認定し居るに、若し相手方が八圓にて

之を供給せば茲に入圓にて賣買契約成立し、此の時其の物件の兩者の客觀的價值は、金八圓なりと雖も買手は實は十圓の値打あるものである。茲に主觀と客觀との差額たる二圓が利益となり、此の兩價值が相一致するに及びて、社會の流通は停止するに至る。

而て各主體の其の物件の利用價值及費用價值は、此の賣買に依りて茲に確定する。即ち個人の孤立の場合に於て物を使用し、其の効果を得て初めて其の價值ありしや否やか判明する如く、社會の流通場裏に於ても此の賣買交換契約成立を以て初めて其の物件の價值が判決せらるゝのである。而て之を供給せし賣手は、其の利用價值定まり之を需要せし買手は其の費用價值が決せられ、茲に他律的に拘束せらるるものにして此の價格は賣手、買手兩者に依りて價值附けられたる出來値段である。之を以て商の成立といふ。

而て此の商の成立に至る迄の賣買雙方の値段の申込は其の間の道程にして、尙未だ不確定の状態に在るものである。不確定なる限り、各自が自由に變更し得る。之を法律に譬ふれば法律案が確定して後之が天皇の裁可に依りて決定するは賣り又は買ふの決心を表示する申込値段である。之が外部に表現せられて、法律の公布である。法

律の公布は賣買契約を兩人間に締結する所に相當し、茲に外面的に確定し商の成立となるのである。

而て法律の實行は各行政官が之に則りて種々の取締を爲す如く賣買に於ては物件の受授である。而て法律を實行すれども種々の脱法行爲を行ふあり、違法行爲を作すありて法律が完全に行はれ難きことある如く、賣買に於ても物件全錢の受拂が完全に適法なり得ないことが又多い、其の最も例の多きは賣掛代金の貸倒れである。其他泣きを入れて取消を申込み、或は破約に出て或は物件に瑕疵ありて、契約品と相異なる如き孰れも、契約に依る社會の法が確實に行はれざる證據にして、社會の法が自然の法と異なり、事實の可能不可能に非るより生ずる必然の傾向である。故に契約文けはうまく行はれ名目丈けは儲かつても算盤合ふて錢足らず、事實何等の効果を生せぬことになるのである。故に契約によりて社會法上の價值の決定を見ると雖も尙未だ不十分にして、之事實として現出するに至る迄は安心なり難いのである。正直なる人々が損することあるは此の理由に基くこと尠からざるものにして頗る遺憾である。机上の空論が事實役に立たず、高等教育を受け法律とか經濟とかの學者が、目に一丁字なくして、社會に經驗に富める商人(奸惡なる)にしてやれることあるは、皆此の手である。

是れ机上の空論が役に立たざるにあらず、社會の法が事實の法に敵せざるの理論に基くものにして、無教育の者は社會の法の知識なく、唯だ事實にのみ著眼するが故に之を知らずして、社會の法の知識を以て之に當らむとせば社會法又は國法上成程正當なるも事實無い袖は、振り得ざるの自然の法理に壓倒せられて泣き寝入りとなつてしまひ、無教育の輩が勝利を得てしまふ結果となるのである。吾人が取引を營むに於て相手方の信用、資産状態人格等を調査するも蓋し相手方が能く社會法に的確なり得るや否やを知らむが爲めにして、社會の法を無視する人は最早社會の一員として人間並には交際し得ざるの徒である。其他手附金、現金制度、或は現金ならば幾割を安くするといふが如き皆此の危険を免れむとするものにして、眞の確定は賣買契約の成立のみにては未だ十分ならず、事實の法に基きて事實適法の物件が受授せられて初めて之を見るべきものなれども學理上社會法の立場に於ては價値の決定は賣買契約の成立價格を以て之を表示し得るものである。

要之社會に於ては物件の價値たるや、社會的價格が定まりて、然る後此の價格を以て標準となすべきものなるを知るのである。即ち其の價格が社會の限用使用の程度を表示するといふことになるのである。而て價格は需給の結合に依る交換と共に消滅

し、後は唯だ各主觀の判斷に移るが故に其の價格に立脚する經濟價値も亦消滅し、確定價値は社會の歴史的出來事に止まり、之を以て他の時他の物件に就ての大體の傾向を知るに止まり、確たる準繩となし得ない結果になるわけである。而て他の時他の物件に就ての價値は又新なる、需要及供給に依りて決するの外なきものにして、一市場の賣値段及買値段の夫々極大極小を以て價値とし、而て其の價値は賣買の成立と同時に逐次中和し、消滅し去るものである。而て此の賣値段及買値段は甲者及乙者が賣買契約成立する迄は夫々各自の法律案にして自由に變更し得べく即ち夫々の主觀的認定にして、於是乎此の主觀的認定價格は如何にして、社會經濟に於て定むべきやの困難なる問題に逢著するのである。孤立經濟に於ては固より、單に對自然の流通關係にして自己自身の慾望及其の物件の性質數量等より其の個人の使用を以て定むべきも社會は他人の限界使用なるが故に、自分勝手に其の限界使用を確定することが出來ない、若し豫め之を先見し得るならば相場に於て忽ち成金であらう、相場は社會の限界使用を豫め相るものである。

相場の全く賭博なるは其の未然なること及社會廣漠にして社會全般の人的慾望の程度を捕捉し難き處に存す、而て天災地變等の自然の結果に因るものは孤立の個人に於